
PoisoNin g

りばーさいど

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P o i s o n i n g

【Nコード】

N 1 1 7 5 L

【作者名】

りばーさいど

【あらすじ】

部活帰りの『俺』。『俺』はヤンキーに絡まれていた。そんな『俺』の前に脱色した金髪の男が現れて
吸血鬼とただの(?)学生の、ギャグとシリアスがマールブルしたら
ブよりもかなり少年漫画気味のおハナシ。

金髪ブリーチ（前書き）

なるべく毎週日曜日に更新したいと思います。

ラブなんてジャンル外だし吸血鬼なんて何一つ読んだことないんですが、想像（別名妄想）で頑張ります。

他のヴァンパイア物とカブってる所があるかもしれませんが、なんせ知らないのです、ありがちな思考してるんだな、ということでもスルーして下さい。

金髪ブリーチ

俺は部活帰りだった。

よりもよってその日は他校のヤンキーに絡まれてた。サイテーな日だった。

カツアゲだつて半分しか聞いてなかった。

ただ、早く終わんねえかなーこの低脳で暴力的なおねだりー

…とか思いながら、路地裏での無駄な時間を過ごしてた訳なんだけど。

退屈だつたんで、ふと、視線を上げると、路地の入り口つていうか出口つていうか、そこに人が立っていた。

誰だろーか。

俺は知らねーぞ。

殺人鬼だったりしたら面白いのに。

黒づくめだからそうだったりして。

…その辺にそんなの居るわけねーじゃん。

ソイツは街灯も無い中で黒づくめの癖して、金髪だった。
ブリーチか？
オカルト系の奴なのか？

本当に殺人鬼だったらどーしよー。

新聞載るかな。

ソイツは顔を上げて、
嬉しそうに、

「頂くとしよっ」

クールなポーカーフェイスで笑って、

ぞっとするくらい綺麗に、

確かに、そう言ったんだ。

何の話だ？

いただく…？

がぶ、と、

おもむろに、男はヤンキーの首筋に、噛み付いた。

「…っ、はぁ！？」

俺は思わず、言ってしまった。

何だ！？この状況！！！？

こいつがホモで出会い頭のヤンキーに襲いかかって…！！

いやいやいや！ないないナイでしょ。そう簡単に居るわけないし。

男の喉が鳴った。

俺の血が凍る。

ヤンキーの瞳孔が開いた。

↑↑↑ ↑↑↑ ↑↑↑ ↑↑↑ ↑↑↑ ↑↑↑

いっへ いっへ いっへ いっへ いっへ いっへ

いっへ

最後、だったのか

ヤンキーが、

蒸発した。

空気に溶けて、消えてゆく。

ムースが水に溶ける様に。

俺は視線を外す事が出来なかった。

怯えたもう一人のヤンキーにも、男は再び牙をたてる。

同じく、何かを嚙下する音が続き

俺はただ、立ち竦む。
思考が凍結していた。

また、ヤンキーが消えて、

男は俺に手を伸ばし、

首筋に鼻息が掛かって 鈍い、痛みが続いた。

ああ、俺、咬まれたんだなあ と、
滲むように、何となく、そう思った。

何だろ、眠い。

寝ちゃ、駄目…なんだろーけど…

何だ、これ…

眠い…

俺は、男に咬まれたまま

深い眠りに、堕ちた。

吸血ヴァンパイア

飽和したような意識。

当然の様に頭は働いていなかった。

麻酔みたいだ。

意識がはつきりしない。

感覚、意識、視界、全てが霞み、ぼやけている。

なんだか眠い。このままオヤスミと呟いて二度寝したい。そして
実際そうするつもりだった。

のに、

「起きたのなら何か言うことがあるんじゃないのか」

水を差された。

…んだよ母ちゃん…後五分…
…じゃなくて。

…何だよ誰だよ…。

「…は…？」

聞き返す。見ようにも視界はピンボケしてるし、脳は動かない。

「『初めまして』。我が下僕。調子はどうだ。まだ意識ははっきりしないか」

下僕…？

誰が下僕だこんにやろおお…

「…う、るせ…」

怒鳴ろうとしても腹筋に力が入らない。

聴覚だけは鮮明だった。

足音が徐々に大きくなり、ピントの合わない視野に変化がある。

「闇の世界にようこそ。我が下僕にして夜の世界の住人よ」

はあ…？

何だよ、頭おかしいんじゃないのか？

「お前は余りに美味かった。つい、独占したくなったのだ」

…いや〜ん。食べないでえ、俺の童貞があ。

…ばーか、何言ってるやがる。

ホントにイツちやってるんじゃないかな。
110？119だっけ？精神鑑定宜しく。

「私の物だ、お前は」

ふわり、と

「……？」

体温のある何かが覆い被さった。

……あ、いい匂い。

……髪柔らけえー……

…………っえ？

と、ぼうっと考えていると、突然、おもむろに
ずるり、と皮膚の下に

何かが侵入するのが分かった。

「…いつて…！」

痛さは採血の注射くらいだけど、なんせ突然だし

「あ…！」

溜めていた尿を放尿した時の様な爽快感と快感が、身体に走った。

感覚が鮮明になってゆく。

濁った思考回路が澄んでゆく。

俺は、怪しい金髪に咬まれて、

急に眠くなって、眠ってしまった。

きんぱつ？

で、俺は今血を吸われてる…のか？金髪に。

いやいやいや！！

おかしいだろ！！！？

何一つ状況の理解が出来ない！

ってか俺の血を吸ってるのは、きん

「金髪…っ!?!」

はああ!?!?

訳わかんねえよ!?!?!?!

どついうことなんだよ!?!

ズル、と

体内から何かが抜き取られた。

「うぐ…っ!」

普通に痛い。

傷口を男が舌先で舐める。

不思議に、痛みはすぐに引いていった。

「分かったか?」

唇を舐めながら言う。

…何だよこの仰天野郎は。

脈略って知ってるか？

我輩の辞書に無いとか言っくんじゃねえぞ！

「何がだよ　！！」

「お前の置かれた状況」

「分かるかドアホ！！」

「私はお前の主人だ。そんな罵倒は許されんぞ」

「はぁーん？許さなかつたらどうなるんだよ？」

ポーカーフェイスの癖に。ぺろりと舌を出す。

正直ミスマッチ。

「更に飲むぞ」

びく、と

肩が、震えた。

何でだ。

今、怖いと思った。

「お前は私の下僕。服従の証に血を献上しろ。私はお前に主人の慈悲において血を提供してやる」

何だよそれ。

「…意味わかんねー」

「お前と私は吸血鬼^{ヴァンパイア}。」

もう、それこそ

血が凍った。

「大昔、人の進化と枝分かれた人種だ」

男は妖艶に笑った。

服従マインド

どっしりおじ。

どうすんだよチクショー！。

吸血鬼？んなもん居るかつーの。

血を提供する？

献血でもしてこいよ。

俺は帰りたいのに。

あゝあ、母ちゃん心配してんだろーなー…。

親父は帰ってきたかな…。

直^{なお}、俺のセーブデータいじってたらシメるからな。

許さんぞ。もうすぐラスボスなんだからな！ココまで来るのに2ヶ月掛かったんだからな！！

…シャワー浴びてえー。

「帰らせるよ。俺がココにいる意味なんて無えんだろーが」

金髪がプライドの塊みたいな態度で述べる。

「外出自体には何ら問題はないが、今のお前には手放しでそれを許可する事ができんな。」

はあ？

「何で？」

何がだよ。

「今のお前は余りに自分を理解していない。苦しむだけだ。止めておけ」

その言葉にカチンと来る。

「理解い！？テメエが説明して無えんだろーが！！教えられて無えのに理解なんか出来る訳無えっつうの！！」

「無礼な。言葉を慎め、私は主人だぞ。私の命に背くことはできん」

「俺がお前なんかには服従してたまるかよ!!!」

冷酷に、

彼が笑った。

…ただ、どこか悲しそうな匂いを漂わせて。

「『命令』だ。静かにそこに座れ。」

ぞくり、と

背筋に冷たい物を感じた。

聞かなきゃ

言う事、聞かないと

「…」

俺は何故かそこに座り込んでいた。

聞か…って、あれ…何で、だ…？

…え、何で？

反論したいのに、それをマズイと制する俺がいる。

華麗に笑ったまま前髪を掴まれ、男の顔が寄せられる。

「分かっただろう？お前は私に抗えない。」

チクシヨー！！このヤロー！！

死ぬ程悔しいのに、今は死んでも言い返しちゃいけないとストツブが掛けられる。

何でだよこれ ！！

「まあ、お前の言うことにも一理有る。説明してやっても良いだろっ」

ムカツク！！

この意志に関係無い俺の奴隷精神もムカツク！！

ひょうひょうと話すコイツもムカツク！！

表情変わんねえけど

「主人となる（アルファ）のヴァンパイア この場合は私か。に咬まれると（デルタ）の元人間 お前の事だ、は、唾液に含まれる成分が後天的に血液中に侵入したと免疫細胞が認識し、攻撃しようとする。が、唾液の成分は脳に直接届き精神の意識レベルを越えて本人の意思を抑」

んな事訊いてねえんだよ！！

誰が体のメカニズム訊きたいつつたよ!!

なんだコイツ、どっか重大な所がズレてる。

「あ……!! もっいい!!」

あ、やばい

逆らっちゃった。

逆らっちゃった。

逆らっちゃった

……逆らっちゃった逆らっちゃった逆らっちゃった逆らっちゃった逆ら……
逆らっちゃった逆らっちゃった逆らっちゃった逆ら……

逆……って、何でだよ。

当たり前だろあんな睡眠薬みたいな話。聞きたくねえもん。

気持ち話りい…何でだよ…。

一瞬、俺じゃなくなる。

金髪がくすりと笑った。

スカしてんじゃねエ！！ オカルト野郎！！

「もう楽にして良いぞ」

「デメエエエ！！！！いい気になってんじゃねエ！人が大人しくしてりゃ調子コキヤがって！！！！」

跳ねるように立ち上がった。

胸倉をひつつかんで怒鳴り散らす。

「『命令』。私への暴言を口に出すな。尚、此の『命令』は半永久

的に持続するとする。」

む、と、言葉が詰まる。

畜生…また

「手を離して貰おうか。」

シャツを掴んだ手が振り払われた。

「とにかく、今は帰るべきじゃない。家族の顔も見ない方が良かったら。」

言いながら、金髪はボロい木の椅子に腰掛けた。

「…痛い目を見るのは お前、だ」

…意味分かんねえよ。

「…嫌だ。帰りたい。」

流し目でこっちを見る。

面倒そうな目だった。

「帰る。だって意味分かん無えもん。吸血鬼なんて信じる訳無えじやん。俺は大人しく間抜けに誘拐なんか、絶対されねえ」

吐き捨てて、

俺はリュックをひつつかみ、錆びて歪んだ鉄のドアに手を掛けた。

だん！と、

男がドアに手を衝き、耳朶を男の鋭った爪が掠める。

そこに燃えるような痛みが後付けされた。

「これは命令じゃない。忠告だ。帰りたかったら帰るが良い。…だが、忘れるな」

爪が掠った場所を温い舌先が舐めた。

「あ、…っ！？」

咄嗟に裏返った声を手で押し込む。

何だよ俺…！！

…何て事、しやがる

「私が言った事を。」

息が耳に掛かって、俺の心拍数を着実に揚げていった。

「私が言った事は正しかったのだと 思い直すであろう」

キィ
…

男が、ドアを開けた。

「行きたいなら行け。後悔、しないのならな。」

背中をどつかれて、前につんのめる。

背中で、

ドアが、閉まった。

「……っ何だっただよ……!!」

振り返って見えるのは無愛想な鉄のドア。

後悔なんか、するもんか。後悔したら後悔しちまうだろ。

未練なんか無いね。清々するぜーか。

耳朶に触れてもすでに痛みはない。指に血も付かなかった。

…変なの。

…とんだ変質者だぜ。絶対そつちの人だよ。キモイなあもつ。
俺はノーマル人間なんだからな。まともな女の子が好きだからな
！！

いたいけで健全なノーマル人間を…。ちつくしょう。訴えてやる。

「……」

やっと帰れる。

俺は見覚えの無い廃ビルの階段を下った。

この一歩が我が家に近づいていると思うと、根拠のない安堵感を噛み締める。

何だかんだ言っても、結局、家が一番いい、ってことなのか

男の事なんか頭からはすっ飛んで、俺はただ、望みに望んだ帰宅に浮き足立った。

心屈折 愛虐

重たい闇が心地良い。

しかし、其れに反して、気分は重厚に沈んでいた。

原因はあの小癩こしやくな小僧だ。それ以外に何が有ろうか。

しかし、命令を出した時の、服従の屈辱に歪むあの顔は、思い出
すだけで歯が疼くほど愛おしく思う。

つい唇を舐めた。

嗜虐心が強烈に刺激される。普段威勢が良い分、その落差が滑稽
で愛くるしく憎らしい。

なのに、其れを遙かに上回る、喪失感。

彼の家族に対する嫉妬、やり場のない苛立ち、
燻くすぶる、独占欲。

そして生命維持への強迫観念。
そんな物はみつともないので表に出さないが、胸の奥では不安が
渦巻いている。

「…。」

深い溜め息が漏れた。

本当はこんな事、実行したくは無かったのだ。

あいつが苦しむのは判っている。

苦しむ顔は可憐で、もっともっと見たいと思うのに、其れは哀れ
で可哀想で、心臓が強く締め付けられる。

余りに理不尽で、矛盾している。

私は、大人気の無い男だ。

噛み合わない欲望は自分を醜く映し出す。

私は醜い

会いたい。

帰ってきて欲しい。

吸血衝動が腹の底で疼いている。

未だ切れてはいないはずだ。

やはり、中毒性が強い。禁断症状が出るのも時間の問題だろう。

気を紛らわせなくては。

何としてもあいつが帰ってくるまでは耐えねばならない。

帰って来る事は確実なのだ。

あいつも耐えられる筈が無い。

じきに、苦渋の表情を浮かべ、この部屋の扉は開かれるだろう。

私とあいつは切り離せない。

私は退屈と衝動を忘れようと襟を正して靴紐を結び直し、朽ちかけたドアを開いて外出を決行した。

東の空が明るい。

夜明けが近い。

自然と足は急ぐ。そう遠くはない筈だ。

私が向かったのは仲間達の巣窟だった。

彼処には親友が居る。

自分が酷く愚かしい事を自負しながら、夜明けを凌いで私は歩いた。

後悔ブラザーズ(前書き)

今回R15指定するか本気で迷いました。『ヤバイよ』という方は言ってください。そんな意見が多かったり、強く訴えられたりされた場合、R指定させていただきます。時間の問題の様な気もしますので、どつどつ遠慮なく…

後悔ブラザーズ

眼前にあるのは家のドア。
嫌って程見てきた家のドア。

でも今は駆け寄って頬擦りしてベロベロ舐めたいくらい懐かしく
愛おしい。

…あ、いや、嘘。

全部嘘、嘘嘘ウソ。

嘘だから引かないで。そんな目で見ないで。蔑まないでえ！

…言い過ぎたけど、嬉しいのはホント。

母ちゃんと親父は正直どうでも良い部類なんだけど。直…、弟は
気になる。

あとゲームのセーブデータ。

…あ…あと…

た…タンスの裏の…、…エ…エロ本…、とか…

…と、とにかく！気になる物が盛り沢山の我が家はやっぱり気になる訳で、だから帰ってたんだ。

なのに何だよあの金髪変態野郎は。

もつぜってーあんな所行ってやんねえ。

俺はリュックから合鍵を引っ張り出し、玄関のドアを開けた。

鼻腔の奥に家の匂い。

闇に包まれた玄関なのに家に帰ってきたという実感が押し寄せる。

履き古したスニーカーを脱ぎ捨て、一歩、家が上がった。

靴箱の上にあるアナログ時計は5時を少し過ぎたぐらい。

そう言えば空が薄明るかった様な気がする。

なるべく廊下が軋まないように忍び足で歩き、台所の冷蔵庫を開ける。

部活の後だったから腹減ってたんだ。

…今日は掛け持ちの写真部だったんだけど。

冷気が顔に当たる。

作って余ったポテトサラダとか、
使い掛けのハムとか、
忘れられた魚肉ソーセージとか、
… 食っても差し障りなさそうな物が大半だったのに

何故か、食欲が湧かなかった。

子供が作った泥の料理を差し出された感じ。

「…おかしいな…」

…変なの。

静かに扉を閉め、俺はキッチンを後にした。

軋む階段を上ると、まず直の部屋のドア。

「直ー？…直夜？起きてるか？」

返事はない。

つまり勝手に入っても怒られない。

なんの躊躇もなく、ドアを開けて入る。

「…んだよテレビ「っけっばなしじゃ…」」

真っ暗の部屋をカラフルに照らし出すテレビの画面。

リモコンを取って電源を …

「…は!?!?」

それはテレビゲーム。

ゲームのセーブデータ。

苦労したラスボス戦。

ラスボス戦。

ラスボス。

「直夜ああああああアアアアア！！！！！！！！！！」

布団を引っ剥がし、憎き弟を叩き起こす。

時間帯だあ？

んなもん知るかクソ！！

「……っせえな……！今何時だと思って！！」

「知るか！！貴様俺のサーバーデータを一体どういう事だ説明しろコ
ルアあ！！！！」

目を擦りながらむっくり起き上がる弟。

「……はあ……？……って……！うっわ……ヤッパ……！！」

「これはどつという事だ……！！」

たじろぐ弟。

「…っ！だだ…だからって…っ！真夜中につ！！こんな真夜中に叩き起こさなくなつて良いだろ！？」

おいおい、声裏返ってんぞ。バカが！！

「真夜中に電源つけっぱなしで寝てるお前が悪い！！」

ちくしょう許さねーぞ直めが！！

目が覚めてしまったのか、頭を掻きながら直夜はベットに胡座まぐりをかか。

「……………で？よ、様子を見るに今帰ってきた風だけど。な、何どうしたの、美沙ちゃんと夜遊びですか。感心できませんねえー」

「…お前ソレわざと言ってんのか」

美沙には最近振られたばっかだけど何か？

直も知ってる筈だけど何か！？

「つか話題逸らすんじゃ無えよ。俺の勇者！」

「タクヤは弱かったぜ。レベルアップしてやったのに」
三回全滅したけど。

「ちよ、お前ふざけんなよ！！！」

「あーうるさいうるさい。母さんが起きちゃっよ。また怒られるよ。」

弟、母の真似開始。

「もう！！どうしてあんたって奴は女の子と真夜中まで遊んで！
！妊娠させちゃったりしたら私何て言ったらいいか分からないわ！
！！」

「ぎやははは！似てる似てる！」

大丈夫だ母ちゃん。間違っても妊娠なんかさせねえって。

だって無理だもん。責任なんか取れねえもん。

俺、パパになんかなれねえもん。

…畜生。俺のドラクエ…

「で、美沙ちゃんじゃ無いなら何なのさ。15の夜って奴？16の癖に。」

俺は盗んだバイクで走り出したりしねえ。

「いや、なんつーか…」

言い掛けて、

言わない方が良いんじゃないかと思った。

何故だか分からない。

何だか気軽に人に話しちゃいけない気がした。

「…いや、何かそこでオッサンの顔したノラ犬に出会って」

「にいちゃん、チヨイスが古い」

「何言ってるんだ。その上すっぱーブサイクなんだぞ」

「オッサンなんて大体ブサイクだよ」

「テメエ…マツチに謝りやがれ。オッサンになってもあんなにカツコイんだぞ」

「マツチは年取った方がカツコ良くなったよね。渋くなったっていつか」

「そっぴやざんばらってさ、鬘を切っちゃまった髪型じゃなかったか」？

「俗に言う落武者ヘア」

……………ふう、

…なんとか古いチヨイスでも誤魔化せたらしい。

古いチヨイスだからこそ誤魔化せた気もする。

ナイスだ都市伝説！！

ありがとう人面犬！！

じいじでいんまっチー！

「…でさ、俺落ち武者へアーとかどうでも良いんだけどさ、」

……………来るか？

「明日ってにいちゃん部活？」

……………ハラハラさせやがってこの野郎！！

「…無えよ。何で？」

「俺も明日は無いからさ、どっか行こっよ。」

「え、無いの!?!?何で!?!?」

直は柔道部に所属している。

基本的に休みは日曜以外には無い。

のに、何でだろう。

「何でって明日は祝日じゃないか。柔道部だぜ?国民的な休日ぐら
いは休みになるんだよ」

「ふーん、そうなのか」

「あの貸しはまだ忘れてないさ。…スマブラで勝ったら、ハーゲン
ダッツ。買ってくれるんだろ」

そっぴやそうだった。

マルスを極めた俺は調子に乗って

『カービィで俺に勝ったらハーゲンダッツ買ってやるよ!』

…なーんて間抜けにも言っちゃまった訳でして。

見事にカービィに負けましたぁ!!

スツゴいカービィって強いんだねえ!!

だってマルスしか使ったこと無いもん。

…しかもよく考えればあのスマブラは直のモンだったんだよなぁ…

ハーゲンダッツかぁ…

高けえなぁ…

「…牧場しぼりじゃダメ？」

「ダメ。」

…高つけえなぁー…

「…てゆうか今何時？朝なの夜なの？」

ウチは雨戸を閉める派なので外の様子は全く伺えない。

「…5時ぐらい。」

「…わお、スツゲエ早起き」

直は伸びをして、ベットから下りた。

「もう起きちゃった方が良いよね。」

俺は寝たい。

「じゃあにいちゃんと出掛けてハーゲンダッツ買って貰うのは今日か」

ちくしょう。

直は嬉しそうに笑って言う。

俺の財布は泣いてるぞ。

電気をつけ、テレビゲームの電源を切った。

「…ああ…！俺のレベルアップ…！」

嘆く弟。

セーブされてなければリセット状態になる。

「タクヤは5レブぐらい上がったのに…。」

「レベルは自分で上げるから感動するんだ。」

其れが分からない奴にRPGをプレイする資格は無え。

「…もう着替えちゃおーかなー。どうせ今日だしね
ぐるる、と腹が鳴った。」

「あれ、腹減ってんの？」

ずっと食ってない割に冷蔵庫の中身に食欲を刺激されなかったか
らな。

「何か食う？テキトーに取って良いよ」

そう言って菓子が詰まったダンボールを指差す。

にじり寄って漁ってみた。

が、やっぱり食いたいと思えない。

直がパジャマから着替える気配がする。

「直ー、やっぱり俺いらぬ」

…それよりさ、と振り向いて、

上半身裸の直と目が合った。

浮き出る首筋。

ドクン

急に心臓が強く打つ。

「…なに??どうしたの?」

俺は立ち上がり、

直の首筋に

ズル、

「っ!?!? 痛っ…!!にいい…ちゃ…っ!?!?」

口いっぱい、しょっぱい味を頬張る。

ああ、美味い。

もっと欲しい。

腹に溜まってゆく感覚が気持ちいい。

満たされるのは食欲。

え…？

「……ッ！…？」

俺は思わず飛び退いた。

「……あ……」

がくりと直が崩れる。

俺は…

俺は今…何を…

唇に触るとぬるっとした感触があった。

血…？

今…俺は…血を、飲んだのか？

弟の血を…？

『お前と私はヴァンパイア』

…マジかよ

「…に…、にいちゃ…」

はっと現実に引き戻された。

肩口を押さえた直。

流れる、リアルで赤い、血。

食欲が疼く。

「…な、直」

「…なんだよ…！どーゆー…事だよ、今の…」

血が止まらない。

ふたつの感情。

『やばい』と

『飲みたい』。

どうかしてる、俺。

「直…っ！…血が」

「にい、ちゃん…今、俺に…何した…」

『やばい』の方が、兄としては大きい。

妙な空腹感が後をストーカーしてるだけで。

「…い、いま…にいちゃん…」

心に刺さる

「…俺の、血…吸ったん…だよ、な…」

事実。

吸った

俺が飲んだ

吸血、したんだ。

否定できない。

『お前と私は』

…俺、は

ヴァンパイア

……そう、か……

「……直、血 止めねえと」

「な、に……言ってん、だよ……」

俺は直の首に出来た牙の痕を舐める。

やっぱり、美味しいと思う。

…もう…戻れない

苦い傷口が消えて、俺の舌はさらなる血を求める。

余りに、美味くて。

「…っ！？にいっ！？」

首筋を抜けて、鎖骨、胸筋、腹筋、浮き出た骨盤

「あう…！」

ヒタリ、と

ベルトの金具の冷たい感触に、

はっと我にかえった。

「あ…直」

顔を真っ赤に染めて叫ぶ。

「『あ…直』、じゃ無えよおお ツ…!」

まあ俺が悪いことは明確だ。

「ばかばかばかばか…!!! にいちゃんのバカヤロー!!! 豆腐頭!
! 吸血コウモリ!!! ばーかばーかばーか!!! 弟に何すんだよおおお
!…!!!」

吸血コウモリ

…否定できない俺が恨めしい。

…全部、あの金髪野郎のせいだ。

「あー…いやそのー」

冷静に考えると俺がした事って近親相姦に近いよつな。

しかも弟。

俺は兄。

「…ッっ…!!どういう事なんだよ!!説明しろよ!!」

そう言えば俺は金髪野郎に咬まれてヴァンパイアが伝染った。

「…っ、何だよ」

俺はすでにヴァンパイア…な、訳で…

直は

「な、直…!!」

びくつと直の肩が震えた。

「な…、なんだよ…」

「何かおかしくないか!?!」

「その言葉そっくりそのまま返してやるよ!?!」

ああ!?!そうじゃなくて!?!

俺は制服のシャツの襟を広げる。

ボタンが簡単に弾け飛んだ。

「ななな、何っ…!?!」

突き出したのは自分の首筋。

「何か感じない!?!」

「はああ!?!」

「いや…!?!何か…!?! ザワザワしないか!?!」

「しないよ!?!」

…。

…しないのか…？

「気持ち悪いな、何だよにいちちゃん！！まさか変態の道に走ったのか！？もう何がなん何だか訳分かんねえよ！！！」

しないって、事は

伝染って…ない…？

「……よかつたあゝ……」

全身の力が抜けて、その場へたり込んだ。

「一体…何なんだよ！？ さっきから、何かにいちちゃんおかしいよ

「!

…直夜、

俺の弟

「いや…」

…そうか

俺、もう今まで通り暮らせないんだ

…じゃあ、ガッコーは？

部活は？友達は？家族は？

…俺が今まで持っていた物は、守っていた物は…、一体…どうなるんだ？

「…直、」

少なくとも、もう此処には居られない。

「俺が言う事、信じるか？」

「…人面犬じゃなければ」

…限りなくそれに近いような

…信じられるわけ無えよなあ…

…俺だっつてさっきまでは信じちゃいなかったよ

けど、

今は信じてる

直感的に、

信じるしかないだろ

「…嘘だと思つか？」

「そりゃあ…ねえ」

…まあ…俺だって直に突然言われたら信じないし

って言うか信じる奴なんて居るのか？

「…って言いたいんだけど…」

なぬっ!？

覆して、直はサラサラの頭を掻いた。

「俺 実際咬まれてるし…」

…むむむ…

「…信じるしか 無いんじゃないの」

…何だこいつ。

サラッと認めやがって。

頑かたくなに認めなかった俺がバカみたいじゃねえか。

「信じるの？お前バカ？」

八つ当たりした。

「…。…にいちちゃんよりは頭良いと思っつよ」

…。

…俺は確かに直より勉強は出来ない。

…だからって、いや、だからこそ、ムカつく。

「テメエ…兄貴にそついう事言っつて良いと思っつてんのか」

「にいちゃんが俺の事けな貶すからだろ」

「…ぐうう」

そんな事言われちゃったら確かに直に非はないけど。

「…、悪かったよ…」

「うわぁ！？にいちゃんがやけに素直だぁぁ！…！…！どっしちやっ
たのさ！？」

「…なんだテメエ。今まで俺が意地っ張りだったとでも言つつもり
か？」

「うん。」

即答かよ。

コイツ…

「やっぱりハーゲンダッツ買ってやんねーぞ」

「うわぁぁぁぁぁ！俺が悪かったよお！…！だからハーゲンダッツ
買えやゴルァ！…！買うつつただらろうが！…！」

「態度豹変しすぎ!!」

「約束破るうってのか!? あゝあゝ、だから大人は嫌なんだよ。」

「お前と俺、年子なんだけど。…どこが大人だよ」

…あれ、

…何だろっ

何も無くした気になれない。

…余りにも直が変わらな過ぎるからだ。

「なあ、直」

「…？今度は何さ？」

「俺に距離置いたり、しないのか？」
「…？」

「…だって俺、吸血鬼なんだぞ。さっきだってお前咬まれてるんだし…また、俺、飲んじゃうかも知れないのに…」

そうなる事を一番恐れてるのは、案外、俺なのかも知れない。

吸血行為は必要以上に強く、現実を突きつける。

自分が吸血鬼なんだと認めたくないのは、変わっていない。

あまり快い事実でも無いし…。

「お前ホントに分かってんのか？」

俺が責めると、直は拗ねたように唇を尖らせた。

「分かってるよ。俺だってバカじゃねーもん」

「わかってねーよ。ぜってーわかってねー。」

「こごと俺は直に詰め寄った。」

「俺はもう人間じゃ無えんだぞ！！」

言ってる自分が辛くなってくる。

でも、兄貴としても当事者の意地としても、そこは我慢。

「もう、人としては」

「分かってるよ!!」

言い終わる前に、直に遮られた。

「分かってるよ!!分かりたくななくても分かっちゃっただよ!!」

出来の良い弟が、まるで出来が悪いみたいに、ヒステリックに叫

んだ。

「そんなのホントは分かりたくない…分かつちやいたくない…。でも俺が受け入れなかったら、誰かにいちやんの現実理解してやるんだよ！多分俺以外信じる奴なんていないだろ！！」

…俺…弟に氣イ使わせてたのかよ。

なっさけねえー…。

「…俺…バカなんだろ」

…ホント馬鹿だよ。

出来が良いっ言っても、やっぱり俺の弟だから

カワイソーな事に大バカ野郎だよ。

お前なんか大っ嫌いだ。

兄貴のプライド、どうしてくれるんだよ。

「…人間じゃなくても、俺の兄貴だって事に変わりは無いじゃんか」

…ちくしょー

嫌いなんだからな！！

嫌いっつっつたら嫌いなんだからな！！！！

「ちくしょー直め！！大好きだああ！！」

「ぐああ！何だよにいちちゃんむさ苦しい…」

「ごんにやるー！！こちよこちよしてやる！！！！」

「くっ…！！ギャハハははは！！！！や…やめろよ　っ…！！！！」

…ふっ。

「…………で、早く服着ろよ」

いつまでも裸で居られると押さえ続けてた自制心が外れ掛かってくるから。

「…はあ…は…っ…、こんの…バカ兄貴…！」

息も荒いまま、直は恨めし気にぎろりと睨んだ。

俺は気づきつつも見て見ぬ振り。

都合の悪いことは知らんぷりに限る。

直が舌打ちをしたのが聞こえた。

が、無視し続けると、ようやく着替えを続行し始める。

…さて、今日の外出どうしようか。

日光とか銀製品とかニンニクとか、十字架とか杭とか清水とか…
一体、大丈夫なんだろうか。

…まあ清水とか杭はそこらへんには無いと思うが。

ヘタしたら十字架のシルバーアクセとかあるからな…。

「ねー、にーちゃん？」

すでに着替えの九割を済ませた直が、靴下を履きながら呼んだ。

「あー？」

「そんななんつちゃって昼間出掛けられるの？」

「…すげえ。何で考えがシンクロしてんの？」

それとも誰もが抱く疑問なのか？

「いや…実は俺も詳しいことは分かんないんだよな」

「え？何で？」

何でって……

「なりたてホヤホヤだから？」

新米ピチピチヴァンパイアです！！

…ピチピチ？

「…なんか分かんないの？直感的に。」

「…その時にならないと分かんない」

血を飲みたくなるって事も今知ったぐらいだ。

「なあ、どんな感じ？」

「…は？何が？」

「吸血鬼ってどんな感じ？」

…じゅっつと……

「あんま変化無い」

直は怪訝な顔をした。

「…ええ？」

だって何も変わらない。

今まで通り、普段通り。

だから余計信じ難い。

「…ふーん？」

…さて、どっしりおっ。

…親に何て言えば善いんだろう。

直が言った通り、信じてくれる筈も無い。

…憂鬱と言うよりリアルに困る。

「…うーん…。…へたに外出したりしてにいちちゃんに辛い思いして欲しくないし…」

なんて兄想いの弟なんだ!!お兄ちゃん感激!!

…じゃなくて、

「……何か……お前、順応早くない……？」

…なぜそんなに当たり前に考えられる？

「…うーん、何でだろーねえ？」

性格の悪い女みたいに、弟は笑った。

性格が悪いかという事に関しては、なんとも意見しかねますが？

「出掛けるのは日が暮れてからの方が良さそうだね」

「…良いのかよ？…夜更かし」

「…いーよ。」

…まあ、良いなら良いんだけど…。

僅かに、弟は悲しい様な困惑した様な、切なげな表情をした様な、気が、した。

真偽は定かではない。

俺の気のせいかも。

「とりあえず…にいちちゃん着替えたら？」

…「もっともで。」

俺は直の部屋から出て、奥の自分の部屋に向かう。

嬉しくない筈、無いんだ。

あんなに望んだ家に帰ったんだから。

のに、なぜか気分が重い。

理解しきれない色んな事全てが、罪悪感に変換されている。

更に、罪悪感是自己嫌悪に進化。

そんな事詳しく分析しても、結局はテンションが上げられない
って事で

…あー…もーヤダ。頭ん中ぐっちゃぐちゃ

…全ては、紛れも無くあの変態金髪ブリーチの所為だ。

い。
ろくな説明をされなかったので、自分の事とかがなにも分からな

『今のお前は自分を知らな過ぎる』

……。

『行くなら行け。後悔、しないのならな』

……後悔じゃねえよ

後悔、なんて…

「……しちまってるん……だろーなー……」

……後悔。

そして『後悔』に後悔。

のろのろとダンスの引き出しを開け、Tシャツを引っ張り出した。

あ、直とペアルックの奴だ。

…当時ダブルで反抗期真っ盛りだった俺と直は、やっぱりダブルでブチ切れて、散々喧嘩して、結果、俺はダンスの奥にペアルックTシャツを封印した。

今でも両親には無性にイラつくが、直とは妙に和解が早かった気がする。

…つたく、男兄弟でペアルックとか何考えてんだよ。

考えれば分かんじゃん。気持ち悪いいだろ、兄弟でお揃いとか。

…まあ…でも、そんな事親に言うのも…もう、無いのか…。

母親を罵るのも、

直と会えるのも

…何だよもう

俺はTシャツの上にパーカーを羽織り、ジーパン履いて靴下履いて、アナログ腕時計を装備した。

文字盤を視ると6時ちよっと過ぎ。

…1時間も直と喋ってたのかよ。

弟と居ると無駄に喋ってしまう。全くもって時間の無駄だ。

どうせ、夜まではやることも無いのだが。

雨戸の外はもう明るいのだろう。

俺はぐちゃぐちゃになってるベットに倒れ込んだ。

…金髪に二回目に咬まれたのも、ベットだったな。

「…畜生…何であんな奴の事、思い出すんだよ…」

何だか瞼が重くなってくる。

脳が、麻痺してくる。

頭が全然廻らない。

何だか気持ち良い…。

気持ち良いを通り越して、俺は乱れたベッドの上でうたた寝してしまっただ様だった。

夢なんて観ない

深く深く深く深く、

闇の中に、眠った。

兄貴 俺

「にいちゃん、…着替えんにどんだけ掛かってんの」

俺は兄の部屋のドアを開いた。

目に入った、うたた寝を通り越して熟睡している兄貴の寝顔。

…無性に腹が立つ。

思いつ切り、家中ペタペタ歩き回ったスリッパ履いたまま、眼前の間抜けを蹴り付けてやるうと思っただ。

コイツのうのうとお気楽な顔して眠りやがって。

無神経なのは変わんねえなあおい兄貴よお？

もうすぐ、いなくなっちゃう癖に。

…解ってないのはにいちちゃんの方だよ。ばーか。

…人の気も知らないで。

…って、あんたは一生に何回言われるんだろっ？

卒業式の日には熟睡する奴が居る？そんなバカそうそう居ないっつうの。

例外がこのバカなんだよ。ホントに。

「…夜まではやること無いからって…」

何でそれで寝ちやうんだよ

…もう今までみたいには会えなくなるんだろ？
話せなくなるんだろ？飯だって食べなくなるんだろ？

最後の休日なんじゃ無いのかよ。

俺だって、にいちゃんに追い付きたいよ。

…あわよくば追い抜かしたいよ。こんじゃろつ。

俺は…自分だけ新しいところに行っちゃう背中を追いつくので必死なんだよ？

いつもいつもそっやって、ふと気が付くと違う立ち位置にいる。

いちいち懂れて追い掛けてたら、真似だって怒られた。

柔道始めたのだって、違う事してやるっていう意地みたいな感じだった。

分かってない。

俺の事なんか全然分かってないよ。

「ばかやるー…」

にいちゃんと一緒なら吸血鬼だろうが何だろうが成ってやるよ。

百年でも千年でも背中見続けて生きてやるよ。

だから俺も連れてけよ。

「…追い掛けさせてよ」

ハーゲンダッツなんて本当は要らない。

その約束が分離した俺等を繋いでいてくれるような、そんな気がしていた だけ。

…だから言った我が儘^{わがまま}。

熟睡した兄貴の着ているTシャツが、昔母さんが買ってきたペア
ルック事件のそれだと気付き、

状況に不釣り合いに笑ってしまった。

今じゃなければ腹抱えて笑ってたと思う。

考える事は同じなんだなあ、なんて。

∴俺が着衣したのも、色違いなTシャツだったから。

比喩コウモリ

「ばっかやろうー!!何寝てやがるー!!」

がつんと頭に衝撃を感じ、心地良い眠りの縁から引きずり出された。

「…つてえな…、…んだよ…後10分…」

再び微睡まひむ俺に、激しい罵声が降る。

「それで何時も遅刻すんだろーがぁー!!どついう神経してんだか全く知れんわ!!なぜ今寝る!?!」

「…つとおしーなあ…黙つとけよ…」

弟の声が耳元で執拗に繰り返される。

「起きろー!おーきーろー!!おーきーろお、おーきー…」

「ううぜえエエエエえええ!!…!!…!!」

堪えきれずに俺は布団を跳ね飛ばして飛び起きた。

「俺睡眠不足なんですけど何か！？俺って睡眠不足なんだよね！？」

「知らないよ」

知る由もない。

「もうちよつと寝かせてくれたって良いじゃん！お前には思いやり
って言葉は無いわけ！？」

「…お言葉でございますが。その布団を掛けて差し上げたの、他な
らぬ俺なん德斯けど」

そう言えば元来俺の上には、跳ね飛ばす布団など無かった気がす
る。

「しかももう7時だし。外真っ暗なんだけど。」

嘘

さー…っ と、血の気が引いてゆく

雨戸の所為か、時間の感覚が掴めない。

俺は馬鹿か

こんなに、時間を無駄にってしまった。

「…何で、起こしてくんなかったんだよ」

恨めしく、直を見る。
拗ねたような弁解。

「…起こしたよ、何度も。にいちゃんが起きなかつただけじゃん。」

… 俺の 馬鹿野郎

…長く此処にいられないつつうのに。

腹が減ったら多分また誰かに咬み付いて仕舞うのだろう。

もう弟に手を出したくはない。

俺は、戻らなくちゃいけない。

「…あれ、母ちゃんは？ いないのか」

家にいるなら叩き起こされる筈だ。

「友達とお食事会だったさ」

呆れたように直が言う。

…まあ…出掛ける時に言い訳しなくていいし…丁度良いか。

「ふーん…そうか…」

後は財布だな…

二千円ぐらいなら在ったはずだ。

ハーゲンダッツなら買える…な…、うん。

仕方無い…買ってやるとするか…

そもそも自分で蒔いた種だし…。

「…行こうぜ、直」

「しょうがないなあ、行ってやるよ、まあ」

「…買ってやるの俺なんだけど」

なんて奴だ。

ギャルの彼女がお前は。

俺達は玄関まで降りて、リビングを横目に通り抜けて、靴を履いて、家を出た。

直の言った通り、辺りは暗い。

たまにある街灯が淋しげにブロック塀を照らし出す。

頼り無い灯りにわらわらと集まる羽虫。

それをコウモリが何度も往復してハンティングしていた。

…あの中で

あの中で俺は、一体どの立場なんだろうか。

闇の中で必死に消えまいとする街灯か。

頼り無い灯りに群がり^{すが}縋る羽虫か。

それとも群の中に堂々と飛び込み、入れ食い状態を満喫し、捕食する

コウモリなのか。

いずれにせよ、すごく滑稽な姿だという事に変わりはない。

118

…まあ、

生き物なんて、所詮生きようとする限りはみっともないモンだと思っけど。

白鳥なんかで良く例えられるが、どいつもこいつも皆そうだろう。

本気で本当にクールな奴なんていない。

美人な女は美人でいるので必死だし

ジャニーズは醜い姿を見せまいと影で奮闘している

美しく見える奴との差なんて目に見えるか見えないかだけ。

百獣の王だって、サバンナで飢えてハイエナの残飯を漁る。

…生きようとする限りは格好付けてなんか居られない。

…なんてね。

…あ、そこ！うんとか言っな！！深イイだろっがこの話！！

「…あ。…にいちちゃん、俺チャリ鍵忘れたみたい。後ろ乗せて」

早速チャリに跨またがった俺の後ろに、直が乗っかってくる。

「…ペダル重くなるじゃん。降りろよ」

「ヤダ。乗せてけ」

何だコイツ。

仕方なくペダルを漕ぎ出す。

「っもおおおおっ！！」

ペダル全然動かねえエ！！

ムリムリ！！二人分は無理！！

「ギア変えれば良いじゃん？…よいしょ」

ガチャ、ガチャガチャガッチャン！！！！

「どうわぁア！？」

「うわわわわっ！？」

いきなり6から1にするとかコイツバカなんじゃ無えの！！！！？

「ばばばバカ！！！！ぶつかるぶつかる！！」

「前前まえ！！電柱！！ハンドル切れよおっ！！！！」

「わ！！つぶねえな！！！！テメー！！」

「前見るバカに！！！！！！」

ドがつ！！！！

「…っがあ…！！！？」

股間、打ったア　っ！！！！

ど、ど、どつやらぁ…電柱にい…っ激突した、らしいい…。

…ひよ…っ、ひよっとして死んじゃうんじゃ無えの…！！？ってか
死ぬう…！！！！

使い物にならなくなる…託子ちゃんになっちゃっ…。

「あぐうっ」

「大丈夫？きつと女の子達たぶらかした罰が当たったんだよ」

「たぶら…かしたって程…っ！！付き合っ…ねええ…っ」

むしろモテねえ部類だ

美沙にも遊ばれたような気がする…のは俺の癖じがみかも知れないけど…

「何かチャリはムリっぽいね」

「いや、無理じゃ無え！！直、お前漕げ！！」

「えー？ヤだよ」

「俺のダメージを労って貰おうか…」

「…にいちゃん、目がイってる」

しよーがないなあ、とカゴの歪んだ俺のチャリに跨る。

俺は冷や汗なんか滲ませながら何とか荷台に跨った。

「っ、っ…いしょっ」

「うおを！？動いた！！」

「え、エコドライブにしるよ…っ！…」

「チャリなんだから無茶したってエコでしょッ」

遅いけど徒歩よりは速い速度で、最寄りのコンビニに近付いてゆく。

風に靡く直の髪なびから、シャンプーの匂いが流れてくる。

フードとTシャツの間からは、筋の浮く柔らかそうな白い首筋が覗いていた。

「くん、と

つい生唾を飲み込んでしまう。

ホントに咬み付いたりはしないと思うけど。

「あ、にいちゃん？」

「え、な…何？」

「今吸血したりしないよね」

かなりどぎまぎしてしまう俺の馬鹿正直さ。

「…ななな何で今そんな事言う訳？？」

「また事故つたら本気でにいちゃん男で居られないよ」

そんなの御免だ！！

「分かってるっつもの…我慢しますう」

素直にウンなんて言えない。言える訳無い！！

「ほーらにいちちゃん？コンビニですよ〜」

「ここに用があったのはお前なんじゃ無いのかよ」

俺は出来るだけ近寄りたくなかったんだが。

結局、買わなくちゃいけないのか…。

まあ…何かやり残したことがあったら後悔するだろうし…。不完
全燃焼は燃やし尽くしてしまった方が良い。

チャリ置きにチャリを停めて、眩しい店内に入った。

いらっしやいませも言わない店員は眉毛の無いケバ子。

可愛気も眉毛と一緒に剃り落としちゃったらしい。全然可愛くねえ。仕事しろアルバイト。

「…ねえにいちちゃん！どれが良いと思う？バニラ？」

無愛想なケバ子が一瞬こっちをチラ見した。

チラチラと、俺と直を見比べ、

その後、マスカラまみれの視線は直夜を選んだ様だ。

…分かってるよ…。顔の造形が俺とは違う事ぐらい…分かってんだよ！！

「何でも良いよ…勝手にしてくれ…」

ウダウダと側に行く。

…だって食うのお前じゃん。
俺は貢ぐだけじゃん。

暇なので周囲を見回す。

陳列された食料品を見ても、美味しそうだとは思わない。

今の俺にとっては食料品じゃ無いって事なのか

「にいちゃん！会計！！」

無邪気に俺を呼ぶ直。

おい。見てるぞ、ケバ子が。

色々うんざりしつつ、千円札を出す。

：おいケバ子！。金払ったの俺だぞ！。そいつはたかってるだ
けなんだぞ！。

何故直なせに釣り銭を渡す？…あ！こら！！添える振りして手エ触ん
な！！直の手が香水臭くなる！！

直の愛想笑いに、ケバ子はあからさまにはしゃぐ。

あーもーウザい。俺ケバい奴嫌いなんだよ。

自動ドアから店外へ出て、外でカップを開ける。

「直、釣り返せ」

「ん」

レシートと一緒に手の上にぶちまけられる。

細かい小銭は嫌いなんだが…。

まあ…いいか。

「にいちゃんも食う？」

突き出されたバニラハーゲンダッツにも、高級アイスなのに食べる気はしない。

「いや…俺は」

「…」

ぐうむうじう。。。

唇に押し付けてくるアイスを断ることも出来ず、

…仕方無く口を開いた。

「ぱく…っとお」

いちいち効果音を付けんな鬱陶しい。

俺の彼女がお前は。

口の中で冷たく溶けるバナナ。

飲み下した後の濃厚な余韻。

…何ら変わりなく、今まで通りの味覚を感じる。

ただ、全く美味しいと思わないだけで。

味覚は正常に感じていても、『味』は、感じていない。

「ぢゅっめいじいっ。」

そんな事

「…うん、美味しい」

直が僅かに眉を曲げた。

「…うまくないんだね」

よく分からないが傷付いた様な顔をされる。

俺マズイ事言っただかな？

「そんな事ね」

「良いよ 嘘なんか吐かなくても」

あれ、なんかコイツ怒ってんじゃないの？

「てめー、まあた怒ってんだろ？短気は駄目だぜ？」

当の俺は人の事なんて言えたモンじゃない超絶短気だって言われるけど。

…友達に。

…ちくしょー。悪友ばっかじゃねえか。

「お前さ、気まぐれなんだよなあ。ホンット、女臭あゝ」

ふざけて鼻を摘んだ所で

「ふざけるなよ！！」

なぜか怒られた。

「な、何だよ！ちょっとふざけただけじゃんか！お前何も解つ」

「解つてないのはにいちちゃんの方だよ！！」

何の話だ？

思考を『？』が占領する。

「俺が…俺がどんな気かも知らないで！！」

ぐしゃり、と、高級アイスのカップが握り潰された。

勿論中身もボタボタとアスファルトに落っこちる。

ああああああ…

「よく言えるね。　　いーなあ。にいちちゃんは。朝から晩までのーてんきで」

プチンと精神の紐が引き千切れる。

「そういうお前も毎日毎日楽しそうですわねえ。悩みなんか欠片も無いようぞ。」

「…悩みが無い？」

直が、言う

「…それ、俺の事言ってるの？」

あれ

何だこの展開は。

「ばっかじゃないの!？」

突然迫ってくる直。

殴られるんじゃないかと俺は身を縮めた。

「っ!？」

どん

「…っ！」

「…っ、な…！？ 直？」

俺は自分と変わらない背の弟に、抱き付かれていた。

何が起きたのか分からない。

…こんなにでかくなった兄弟に甘えられてる理由なんて解るはずもない

コイツが何考えてるかも 勿論

ちぢらじと

ふと上げた視線の先で、飛び回るコウモリが、光に^{すが}縋る蛾を捕まえるのを見た。

蝙蝠

アイツも俺も

光に群れる人を狩る。

所詮、吸血蝙蝠。

目の前にはコウモリよりも数倍出来の良い蛾。

俺はただ、戸惑った。

兄として、人として、

そつと、寝てしまった。

血中毒 依存

私はコンクリートの階段を上がっていた。

硬質の靴音が壁に哀しく反響する。

目的の階にある目的の部屋に着くまで、終始奴の事が頭を過ぎっていた。

彼奴を、^{あいつ}と言うよりは、彼奴の血を求めているのだと思う。

空腹感が軽くながら有るのだから、やはりそれは事実だ。

そして彼奴も同様に空腹を感じている筈だ。

一体、どうする？

途方に暮れて私の所へ泣きつくか？

つまらぬ強情を張って元同胞を喰い殺すか？

どんなことが有ろうとも、良い結果に終わりはしない。

人とは同じ空気を吸えないのが我々だ。

必ず痛みを伴って、現実を告知されるだろう。

それでいい。

それで、私の下に跪くのなら。

心と事実が、僅かでも私に傾くのなら。

そんな虚しい事であって、構わない。

階段を登り切って、短い通路から達した角を曲がる。

その向こうにある通路の突き当たりに、アルミ製らしきドアがある。

ドアの片端にいる警備の者と目が合った。

あからさまに、嫌な顔をされる。

私は構わず歩いた。

「お待ちください」

ドアノブに手を掛けた所で、語勢強く止められた。

髪色は濃い栗色。瞳は色素が抜けた様な、半端な茶色だった。

「何だ」

ヴァンパイアとしてはまだ半人前と言える。

恐らくは主人に申し付けられて雑用、といった所だろう。

「特に申し上げることはありません。…が、」

彼の眼光が鋭くなった。

「… 貴方の事を、我々は歓迎しないでしょう」

そんな事は解っている。

言葉を交わす価値など無いだろう。

「何故ですか」

私はただ正面だけを見詰めていた。

「何故 我々から外れて一度は争った貴方が、今更、此処へ赴いたのですか」

あの頃の私は忠誠心に従い、戦っただけだ。

そんな事より… 御前は、主人の奴隷だろうが

私に意見するのか

「お前と言い争うつもりは無い」

苛立ちを呑み込んで、ドアの向こう側に向かう。

一枚扉を隔てた向こう側では、人の気配で賑わっているのが聞える。

私は、ドアを開けた。

キィ…、と、か細い音で金具が鳴く。

一瞬にして、話し声が消えた。
沸騰した湯に水を差したように。

訪れる静寂と突き刺さる視線。

その表情には困惑と嫌悪が伺える。…中には私を知らない者も居るようだが。

耳に馴染みのある声が、その張り詰めた空気を引き裂いた。

「お前、自分から来たのか!？」

そう言って一人で爆笑する。

その場は小さくざわめいた。

…なんとも、いたたまれない。

私は彼の側へと歩み寄る。彼が連れていた下僕の少年が、座っていた椅子を譲ったが、仕草で断った。

「…あんなに嫌がってたのに何で来たんだよ!?!? どんな心境の変化だ?」

ざわめきは話し声に変わり、段々とまた会話が満ちてくる。

どんなに鼻屑ひこぎに聞いても、嬉しい内容ではない様だが…。

「…笑うなよ」

今、来なければ良かったと少し悔やんでいる。
腹が減ったから気分転換に来た。と、説明した。

「お前はその辺で人を狩ってるんじゃないのか」

嫌みつたらしく言われる。

「…いいや」

断固として否定しよう。

「少なくとも今は違うぞ」

つい顔がにやけてしまう。

「手下を一人作っただ」

もう野蛮だなどとは言わせんぞ。

一昨日までの私のように下僕をキープせず、人を狩る方だけに頼っている者達は『野蛮だ』と批判の対象にされる。

私が嫌われ者だった一因だ。

「…ホントかよ！うわゝ、誰だれ!？」

『一応友人』はせわしなく辺りを見回す。

「連れてきていない。家族の所だ」

「…？、何だ？直系か？」

「元人間。」

ちーっ

面白いくらい速やかに、友人の血の気が引いた。

「…そそそそ…それって…！」

疲れるので背後の壁にもたれ掛かる。

「やばい！！ヤバいつて！！絶対やばい！！！」

「…何だうるさい奴だな」

「のんびりしてる場合か！！連れ戻しに行け！！即刻！！大至急！！」

「心配いらん。じきに帰ってくる」

「そういう事じゃなくてさあ…！」

本当に、煩い奴だ。

「その相棒、家族襲つちやうぞ!？」

そんな事

「好きにすればいいだろう。私は知らん」

「はあ…!？」

呆れたような声だった。

「…どうでも良い訳？お前の相棒であり後輩であり、恋人であり、人生の伴侶なんだぜ？…じゃあ、何で仲間にしたんだよ」

それは

「…通りすがりに襲ったら、たまたま血の味が好みに合っていただけのことだ」

彼に惚れて仕舞ったから

「この味を使い捨てて仕舞うのは余りに勿体無い」

彼が幼い頃から

「そう思ったただけだ」

あの瞬間から

「それ以外には何の意味も理由も無い」

恋しくて恋しくて、苦しくて狂おしくて、癡おしくて

「好み…、ねえ…」

観ていたのは私だけで

「それ聞いたらソイツ泣くんじゃねえの？」

ずっと、その首筋に取り付かれていた

「…彼奴は私が嫌いらしいぞ」

その気の強そうな瞳めに、憧れていて

「…だから…何とも思わんだろう」

いつも隣に居る顔の似た弟を邪魔だと思っていた

私だけがひたすらに

本当に馬鹿の様に

飽きもせずに、昼間の世界にお前を捜した

所詮、其れは…叶ってはいけない憧れだった

叶ってはいけなかったのに

数人の不良に絡まれていたあの時、

夜明けを待つかのように、ただ突っ立っていたお前を見たとき

私は彼を助けようと思っていた

でも 不良達の血を飲み干した時には、既に

『我慢』という概念が、頭から消え去っていた

欲望に忠実なただの吸血鬼に成り下がっていた

だから欲望の赴くまま、長年欲しかった物に手を伸ばし

力で支配した

だから

「そもそも…何故、私が下僕如きに神経を使わなければいけないのだ？」

精一杯、大切にしてやるのだ

あの時の間違いの埋め合わせ

…それでもいい

愛しいお前よ

一体何時になったら

私の下に、帰って来るのだ？

私はこんなにも待っているのに

心も身体もお前を欲しているのに

だから、

見て見ぬ振りなんてしていないで、さっさと舞い戻ってこい。

私はお前を待ち望んでいるから。

だから、帰ってこい

お前の為にも

「……っ……！」

心臓が不整脈を繰り返す。

息が詰まり、嫌な汗が滲み出す。

禁断症状が出始めた。

人間にとっての麻薬や酒や煙草と一緒だ。

私達にとっての血液には精神、身体共に依存性があり、欠乏した場合は禁断症状が出てくる。

それは人に近ければ近いほど弱く、ヴァンパイアとして強ければ強いほど、依存度も高くなる。

私はこの場では恐らく一番上級だろう。

「…おい、大丈夫か？」

友達の声が側で心配した。

「……い、じよぶ……だ」

…こんな姿見られたくない。

何処の誰にも

「……心配いらん…」

恥だ。

必死に息を整えて、心臓を抑え付ける。

ごくり、と苦い唾を呑み込んで、冷静を取り戻そうとする。

「えっと……あの……ど、どつぞ……」

譲られた席に今度は腰掛ける。

古びた机に突っ伏した。

「…お前、いつから飲んでないんだ」

「……そう、長くはない……。5時間……。位か……或は……もっと長い
か……」

「……それでも、そんなところか……」

「……やたらに早くこうなったのは、精神面が時期を早めたからだと思
う。」

「……怪我を負った事を思い出すと、急に痛くなるのと似たような物
だろ。」

「……やばいよお前。……だって、」

何かに、感付いた様に、

そこまで言って、急に彼は席を立った。

「
…
」

私も異変に気付く。

ツ、カツ…カツ…カツ…カツ、カツ

近づく足音。

「……ハイヒールだね」

微かに漂ってくるのは同胞のおいでは無い。

しかし、懐かしい

いつの間にかその場は静まり返っていた。

「……桜助、……この匂いはな」

桜助。おしすけ

私の名だ。

いきなり、

勢い良く、扉が開いた。

「初めまして」

全く抑揚の無い、女の声。

私は顔を向けるのが面倒で、音だけが勝手に耳に入ってきた。

「私は『勧告』に来た。雑魚に話しても意味が無い。一番上級な

ヴァンパイアを出して頂戴。」

ああ

…面倒だ。

「…勧告？」

立ち上がるのが億劫な私の代わりに、代弁してくれたのは友人だった。
僅かに声が震えている。

「…宣戦布告じゃ無くてか？」

「…そうとも言っわ」

調子が変わらない女の声は淡々と言う。

「貴方には用が無い。もっと上が居る筈よ。…違つかしら」

仕方がない

私は立ち上がった。

「…恐らく…私がこの場では一番上級だろう」

纏れそうになる足を踏ん張って、

乱れる息を抑え込んで、

悪魔で平然を装って、彼女の前に立つ。

「その様ね」

彼女は

「…懐かしいわね。…チェリー…、…だったかしら」

見知った顔の

「そう呼んで許されるのは私の師匠だけだ」

見知った女。

昔と同じ、金の髪に金の瞳。左胸には大輪の蔓薔薇の刺青が咲き誇っている。

変わったのは服装だけ。

丈を切り落とした真紅のドレスに、不釣り合いなジーンズのジャケットを羽織っている。

「…クリステイのこと？」

それは、我が師匠。私の主人。

私の、総てにおいての目標であり憧れの男。

「…愚かだわ。私達を裏切るから痛い目を見るの。気高い私達から好き好んで出て行って、こんな」

言いながら、部屋を見回す。

「野蛮で、最も愚かな種族に魂を委ねるなんて」

本当、ほんと下らない。

怒りと苛立ちに震える拳を、更に握り締める。
ぶっん！

鋭った爪が掌の皮を貫くのがわかった。

「…貴女は昔話をする為に此処へ赴いたのか」

体調と気分は最低だ。

い。
こんな心身共に疲労困憊する会話は、早急且つ簡潔に切り上げた

それに、偽るといふ事は、ひどく疲れる。

私は、嘘は大嫌いだ。

例え残酷でも、真実だけが本当で

嘘は言葉で創られた言い訳でしかない。

「……いいえ。『勧告』を伝えるに来ました。今からそれを伝える」

つまり、伝言か。

「『278年の沈黙は破られた。我々、気高き一族は、太古の昔に分岐した野蛮な者共を駆除する。』」

… 駆除。

そう

彼等にとって、我々は目障りな害虫という存在…なのだろう。

だから、駆除する。

増えすぎた虫ムシケラを殺虫する。

あわよくば絶滅させる事を望んで

手元にあるスプレーで、蠅叩きで、雑誌で、叩き潰す。
何らかの情などある筈もなく。
『殺した』という意識も伴わず。

邪魔で不必要で癩に障る、ターゲット標的がいなくなった、位。

何も、思う筈も無い。

女は続ける。

「『戦え。傲慢な亜種共よ。我々は全面戦争を要求する。拒否権は
無い』」

戦争ではない。

それは、虐殺だ。

「『尚、過去に我等を裏切って脱退し、愚行を犯した者』」

激しい動悸。

目が廻る程、狂おしい。

「『奴の虞属に置いては例外的に、』…』」

そこで、女は台詞の様に述べていた『勧告』を、一旦区切った。

「…つまり、其処の貴方だけ。貴方だけは歓迎するわ。悪い話じゃあない。どう、チェリー？」

それは、これから始まる戦争から逃れ、

この部屋の者達の、敵になるという事だ。

「例えば」

…もしも、の、話だ。

「例えば、私がその話に『はい』と答えたでしょう。… 私の虞属は一体どうなる？私と共に、行けるとでも言うのか？」

「それは出来ない」

即答だった。

「私達が受け入れを認めるのは私達と同種である貴方だけ。貴方以外の受入許容は有り得ない」

それでは、その話に賛同する利点は何処にも無い。

「…ならば、その勧めを認めることは出来ない」

女の鋭い視線。

…やがて、小さく息を吐き、

「そ

素っ気無く、端的に言った。

「じゃあ私が此処に居る意味は無いわ」

さようならと踵を返して、

カツリと一歩足を踏み出した所で、フツと振り返った。

「そうだわ。此処に居た男の子、御馳走になったけど。…飲めない事も無かったわ。御馳走様」

それと

「痩せ我慢は良くないわよ。チエリー？」

見透かした様に言い残して、

今度こそ振り返ることもせず、彼女は去った。

「此処に居た、男の子…？」

久し振りに、友人が言葉を発する。

「見張りの虞属か!？」

場が、突沸する。

頭中に飮^{したま}する、騒音。

だらだらと嫌な汗が皮膚を伝う。

「っ!! あいつ…!!」

友人が悔しそうに噛み締める。

そうだ。

あの女はそういう奴だ。

冷酷無情なのは言うまでも無く、人の感情など関係無しに、本位に他人を切り捨ててゆく。

変わらない。

… 変わる筈も無い

一瞬、意識が薄れて、大きくふらついた。

「…っぐ…う、」

倒れないように何とか踏みとどまる。

…厄介な事になってしまった。

どっして このタイミングで

いせ…

…いずれにしろ、巻き込んでしまったか

すまない

私の身勝手に

額に頬に、張り付く金髪が鬱陶しい。

「…あの、」

誰かが、私に声を掛けた。

振り向くと、友人の虞属。

「大…丈夫…、ですか…？」

サイズの大きい長袖シャツから覗く白い首筋。

「……う、ぐっ……!!」

急いで目を逸らした。

いけない。

此処に居るのは、まずい。

「……悠二……っ!!」

悠二とは友人の名だ。

……決して駄洒落では無く。

「……何だよ?」

「今は……何時だ……」

常備していた懐中時計は忘れてきてしまった。
友人は腕時計を覗く。

「午前9時。」

3時間近くも此処に居たのか。

… 9時

今は、外には出られない。
日光が強すぎる。

せめて夕方か、それとも

我慢が効かない様なら… 太陽光がピークに達する前の今の内か…。

「…桜助…？何か、色々ヤバそうなんだけど」

立っているのが辛い。

「取りあえず…座った方が良いんじゃない？…今更…外には出られないし…」

視界に映る、私を覗き込んだ友人を、

「…っ、…お、桜助っ!？」

取っ捕まえて、襟をひん剥いて、

突発的に、その首筋に

柔らかい皮膚に

「…………っ！」

この牙が届いた瞬間に、

はっとして、自己を叱咤した。

彼を突き飛ばし、誘惑を遠ざける。

「っ！！ ……な、何だよ…！！！」

ああ…クソ…っ！！

「…お前…、そんなに…ヤバいのか」

…そのようだ。

駄目だ、頭が動かない。

ただ、『呑みたい』だけが、頭の中で堂々巡りを繰り返す。

…此処に居たら

此処に居たら、誰を襲ってしまつか解らない

一人にならなくては

「また来る」

コートが翻った。

「ま、待てよ！？ お前今行ったら！！」

額の毛細血管が数本、限界を迎える。

「嫌い！！！」

つい、怒鳴っていた。

「今の私に構うな！！」

「……だ……だって……、……そんな事言っただってさ……！！」

「私の事は放っておけ！！」

誰かに手を出してしまうのは心苦しい。

「放って……！！……放って……おいてくれ……！」

最後には、見苦しい哀願。

友人も、何かを悟ってくれた様だった。

「……………」

憐憫の視線。

暴れる心臓を握り締め、じつとりと皮膚の上を流れる汗を感じる。

薬物中毒。

「……………」判った、止めない」

苦虫を噛み潰した様な苦渋の表情で。

「…だけど、その辺の奴、食い殺したりすんなよ」

そんな事は解っている。

制止が効くかは判らないが

まあ……そんな事は言ってもいらねいだろっ…

背を向けて、ドアをくぐる。

「それと、気を付けろよ」

…太陽は有るから

背中に友達の声を感じて、

止むを得なく、久方振りに明るみを目にした。

随分と昔の事

まだ人間だった頃を思い出した。

旅立コンティニュー（前書き）

かなり長いです。

飽きないで読んでもらえるとすごく嬉しいです。

旅立コンティニュー

薄いTシャツから、じんわりと体温が滲みてくる。

鼻の先には直のサラサラの髪。シャンプーの芳香が鼻腔をくすぐる。

さらにその先には白い柔肌。

…俺を誘惑してるのか。この馬鹿は。

だからって咬み付く訳にはいかず、どうすることも出来ずに俺は突っ立ったままだった。

「…っ、な、直」

「バカ！…っにいちゃんの…、ばかやろー…」

…まあ…バカだという事は認めるとしよう。

成績悪いし、夏休みは補習で潰れるし。
特に威張れる特技なんて俺には無い。

…強いて…言うなら、サッカーのリフティング位だ。…と、思う。
…それだって、普通より若干抜けてるぐらい。

良い所なんて分からない。

出来の良い直とは違う。

「…分かってないんだよ、にいちゃんは」

…確かに、分からない。

こんな事になっている理由とか、

俺では、きつとずっと解らない物なんだろう

中学時代の担任曰く、『他人の気持ちに鈍感なようですよ』…なんだ
ぞうだ。

「…どうしてくれるんだよ」

…何の話だ？

「…何でいつもいつも、俺のずっと先に行っちゃうんだよ」

質問の意味も理解できぬまま、反射的に質問を繰り返す。

「え、な…何が…」

「何がじゃねえよ…！」

耳元で叫ばれて、耳の中に激しくエコーした。

「…っっ！」

「…っちは にいちゃんに追い付こうと必死になってんのに…！」

「…は？」

「…やっと追い付いたと思ったたらもう違うことやってて…！！…いつ

だって俺は置いてかれてるばっかで」

何言ってるんだ、こいつ。

…置いて行かれてるのは、いつだって俺の方じゃないか。

何をやっても全部直の方が上手くて、

それがやんなくなって止めて、違う事に手を出して、

また、悠悠抜かされて

そんな自分が嫌いで

いつもいつも、

ああ、

俺、ダメなんだなあ

…って

直の方が俺なんかより優れてて、
イケメンだし、髪サラサラだし、人当たり良いし、人望厚いし

スポーツ出来るし、頭良いし、人間として出来上がってるし

モテるし。

兄貴の俺はダメダメで、ゲームでさえもコイツに勝てない。

いつだって負けてるのは俺だ。

それどころか、

何かで勝てた事なんて、有っただろうか。

今の俺…吸血鬼になっちゃった有り得ねえ事故だって、昔っから俺にばっか回ってくる、損な役回りの一環だ。

また、負けたんだ。

「俺は、にいちやんが目標なんだぞ!」

目標なんて大層な物にはなれてない。

良い所で、『悪い例』…位。

俺なんか目指したら曲がって育つぞ。

直は、太陽に向かってまっすぐ伸びてればいいよ。

甘美な匂いと華美な花を咲かせて。

…俺は、夜闇の中で

…枯れる、のだろうか。

日の光に焦がれながら、醜い自分を呪いながら、

悪臭と異形の色彩で、昏間の植物達から敬遠されて、

…今はまだ昼間のままだけど

いつかは夜の花々に、染まってしまうのだろうか。

いずれ、変わっていく自分を見るのは… 怖い

「…俺の側から居なくなっちゃったら、何を目指したらいいんだよ」

…ん？

側から居なくなるって…？

俺、言ってないんだけど

えエええええーッ！！???

「お、おま…っ！いい家出るってななな何で」

「バカ！！俺がそんな鈍感かよ！ ……ずっと、分かってたよ」

じゃあ、妙に楽しそうにしてたのも　そういう事…だったのか。

最後になるかもしれないから
楽しんで『見せよう』と

ああもう

だから完璧なんだよ。

『気使いがあり、友達の多い子です』
…なんだった。小学生の時の直夜は。

対して、

俺は

『集中力に欠け、努力が嫌いなようです』

…小学生の時から人格が露わになってるよ。

「……ねえ、この鈍感馬鹿ネガティブ兄貴？俺の初恋の人知ってる？」

いきなり何だ。天然タラシ。

悪口は羅列すれば良いって物じゃないんだぞ。

ホント…突然何聞くのさ。…何、さなえちゃん？

…や、ごめん。テキストに言った。誰だろ、さなえちゃんって。

「知らねーよ」

「にいちゃん」

……づん？

…何で今呼んだ？

「何？」

「じゃなくて、にいちゃんなの。…初恋の人」

え。

「ええええええええ！！！？」

そそそそれはどついう事なんだ！？

「お前ホモだったのか！？」

お兄ちゃん泣くわ！！

しかも俺って！？

「…やゝ何か…違つて。…ほら、小さい頃ってお母さんに恋しい？」

「たまたま確かに幼稚園の先生や従姉に結婚してって言い触らしてたりするが……！」

「だろ？で、俺はそれがにちゃんだっただよ」

「なんだ。そうか。」

「……じゃなくて……！」

「ソコなんだよ問題は……！」

「いやいやいや……！だって俺男なんだぜ……！」

「やめてね……？変な道に走るのが……！」

「嫌だ……！直が男と付き合ってた……！」

「あれ、覚えてない？小さい頃俺が『おっきくなったらにいちちゃんと結婚する』……って、言ったの」

「全っ然……！」

「だろ……とは思った」

「…で、俺なんて答えたの？」

直が苦笑した。

「…いや、ちっちゃい時から、にいちゃんってやたらリアルでさあ」

別の名を『夢がない』。

「真顔で『おれ、男だから直とは結婚できないよ』…だって」

「夢無え〜…」

正論だとは思つが。

…二つの不可能が重なっちゃってるし。

「…そんな時からさ、にいちゃんは人の気も知らないで何でも言ってきたんだよ」

…あ〜…

「ホント、俺だって色々考えてんだよ？」

「…反省します」

満足そうに直がニカツと笑った。

「いい子だねえ」

ぐしゃぐしゃと頭を掻き回される。

「ああああ頭を撫でるなああああ」

…屈辱じゃねえかよ。弟に頭撫でられるって。

「…とりあえず離れるよ。暑苦しい」

高校生にもなって抱き合ってる兄弟ってどうよ。

すんなり直は離れてくれた。もっと早く言えば良かったんだよ、俺。

「でさ、まさか今も、とか…言わねーよな？」

何か…なんとなくなんだけどさ。

…俺、そつちに傾いた人生に転落してる気がする。

「幼稚園の先生をいつまでも一途に想ってる？」

…それは…ナイ。
いたら引く。

…良い話だとは思っけども。

「…それにガキの恋ってさ、好きの種類が分かんないでしょ。恋なんだか、愛情なんだか。自分でもよく分かって無いじゃん？」

…確かに。

「それと一緒だよ」

ふーん？

言っなければお父さんと結婚するの〜!…的な愛か。

…でもそれが俺ってどうなのよ？

俺そんなに優しくったのかな。

「…で…で…どうしようか？」

いつまでも此処に居る理由も無い。

ハーゲンダッツはもう買ったし。

…今は…アスファルトの上だけど…

…もう…泣いて良い？

不憫な俺とハーゲンダッツ。

「帰るの？」

出来れば帰りたい。

でも、直はイヤかもしれない。俺が出る事を知ってるなら。

「…もし、出来んなら」

じゃあ帰ろうかとアッサリ。

吃りながらも、俺は了解した。

「…どうすんの？またチャリで2ケツ？」

「…事故ンなければそれでも良いけど」

…もう痛い目は見たくないんでね。

「じゃあ俺が漕いでやるよ!」

…嫌な予感がする。

「サービス料金は500円ね」

ほらまたこうやってふざける!!

「高けエよ!!無駄に高い!距離的にバスの方が安いじゃねえかよ
!」

田舎だからこの時間バスなんか通ってないけど。
バス停無いし。

「…男捨てるのと500円ドブに捨てるの、どっちがいいの?」

「自分の収入と財布を排水溝扱いしてんじゃねえ」

「…もあー、しょーがないなあ。ワガママばかりなんだから。
オマケして5円にしてあげるよ。」

「…お前は一般常識っていう四字熟語を知ってるか?」

「アップルパイをさあ焼こうっていうアレでしょ？」

「あー、アメリカンでとってもよろしいですね」

んな訳あるかい。

「…冗談だよ。そんな訳ないじゃん。にいちゃんバカなんじゃないの？」

「…もう、何でもいいや」

結果的に5円だろ？文句無いよ、もう。

帰ろーよ。…この掛け合い疲れる。

「…にいちゃん？置いてっっちゃうよ？」

「結局お前が漕ぐのかよ」

ヤイヤイ言いつつもチャリに跨またがった。

「いいですいいです。兄弟のよしみでタダにしてあげますから」

「当たり前だ！」

直が脚に力を入れ、チラリと覗いたアキレス腱が格好良く浮いた。

ギアは1のまま、スローなスピードで電柱を追い抜いてゆく。

点滅する街灯。

むさ苦しい生け垣。

無機質なブロッケン塀。

さつさと横切る野良猫。

直のおいがさつきより鮮明で

何だか感傷的になる。

俺達は、一言も言葉を交わすことなく、

見慣れたドアに帰宅した。

…でも、さつきほど嬉しくない。

このドアに入りたくない。

これを開けたら、何もかも変わってしまっ気がする。

ノブは冷たくて、筋肉の隙間に染み込んでくる。

家の空気もやっぱり冷たい。

キッチンの脇を通って

足音を忍ばせ、軋む階段を上がる。

「じゃ、俺部屋にいるから」

直の部屋のドアを通り抜け

自分の部屋に入った。

ぱたん

静かに、ドアが閉まる。

…もう決まっている事だ。

今更、どうにもならない。

小さく、息を吐いた。

……さて

すごく嫌なんだが現実的に考えなくちゃいけない。

何が必要か。

一体、何をどうするべきなのか。

具体的に、行動を起こさなきゃならない。

「…とりあえず…この家から出るって事は…」

…荷物か。

確か修学旅行ん時使ったでかいバッグがあった筈だ。

そうそう。ベッドの下にダミーとして。

…あのエロ本達…どうしよっかな…。

「必要な物…」

ケータイ。財布。

「貯金箱つと…」

俺は銀行に金を預けない。

『母ちゃんが預かってあげるわよ』からは絶対に返って来ないと学習した結果だ。

…其れに気付いて以来、金を預けるといふ事にトラウマ。
それに面倒くさいし。

クッキーの缶を開けて、中味をひっくり返す。

耳障りな音を立て、大量の小銭と数枚の札がぶちまけられた。

「…すくね」

…こんなに少なかったっけ。

まあ…いいや

俺は床に散らばってる小銭を財布に詰め込み、札も同じく突っ込んだ。

他、着替えとか下着とか歯磨きセットとか。

後は、なんとなく必要そうな雑貨類を修学旅行のデカイバッグに詰め込んだ。

閉まらないチャックを強引に締める。

…パンっパンじゃん。

見るからに重そー…。

チラリと、視界に本棚が入った。

…ああ…、俺の漫画コレクが…

ゲームソフトとかさあ！！…エ、口…本…達とか…。…永久の

別れ、本当に悲しく思うぞ…。

だからって持っていく訳にはいかねんだよな。

…ああ、もう。

あゝ！！もオオおお！！！！

ちきしょう！！！！

何でなんだよオオ！！！！

何で俺なんだよおお！！

「っざけんなよオオお！！何でだああアアア！！！！」

腹立つなああ！！

今まで注ぎ込んだ金は一体何だったんだよ！！

つつつか！！もう何か……！！んああアアーツ！！！！つなんだよ

！！

「結局っ！俺は……俺は……人生めっちゃめっちゃねえか……っ」

……ただの不運で。

くじ運は最低の癖に。

何でこんな年末ジャンボ宝くじより低確率なモンを引き当てちゃ
うわけ？

これ、結構凄いなじゃないの。

……いや、全然嬉しくないんだけども。

…ああ、

全部、夢だったら良いのにな。

そんな事無いつて分かつちやいるんだけど、

やっぱり、信じたくないから。

「なに何なにっ！？にいちちゃん口蹄疫っ！！！！？」

騒ぎを聞きつけた弟がドアを開け放つ。

「馬鹿か！俺は偶蹄目くつていもくじゃねえ！！！」

「そついつ問題じゃねえ」

ツッ込んだのにツッ込み返されてしまった。

偶蹄目っていうのは蹄が偶数の動物の事なんだと。
…ニユースの受け売りなんだけど。

「つつつかにいちちゃん、にいちちゃんには蹄が無いと思うんだけど」

正論だ。

「馬鹿言えい。実はありました言ったらどうするっ」

「実の兄が偶蹄目の動物だなんて受け入れない。自殺する」

「ひでえ」

自殺するって…

まあ…偶蹄目だったら 豚とか牛とか羊とからしいからな。

「…って、口蹄疫はどうでも良いんだけど、」

「よくねえよ。今本気で深刻なんだぞ」

感染範囲が広がっちゃってて

…って俺は畜産業関係者じゃねーんだけどさ。

だって宮崎牛、食べなくなるかも知れないんだぜ？

「…にいちゃんはもうハンバーガーもステーキも焼肉も食べないじゃん。…だから、もう関係ないんじゃない」

少し暗い顔で、直が言った。

「…あ

それは、確かに。

「…あゝ…、くそ！大人になったら一度は食おうと思ってたのに…」

小さな淡い夢、崩壊。

やべえ、何かショック。

すっごくちっちゃくて下らない事なんだけど、

そんな事に、でかい失望感を受ける。

…なくしたのは食だけじゃなくて、

俺が持っていたもの、思っていたこと、切実に願望していたもの、

それらは全て、俺の手元から去ったと、小さな事実は悟らせた。

…だってさあ？

俺はもう、楽しみだった物も全部、捨てなくちゃいけないんだぜ？

食い物にしろ、ゲームにしろ、俺が期待したもの、何もかも全部

もう存在しないも同じな訳で

…何かもう、裏切られた感。

「……………あゝあ、…やってらんねー…」

何か色んな物が積み重なって、すごく憂鬱になっちゃって、立ってんのも嫌んなって、この世のありとあらゆる義務と権利を放棄しなくなつて…

ほとんどため息でぼやきながら、俺はパンパンになった旅行バックの上に腰掛けた。

「…なんで…、…なんで、…なんだろーな…」

何で何でが頭をぐるぐる巡る。

無駄な思考。

意味が無いと分かってる。

だけど、意識して考えてる訳じゃない。

勝手に、鬱な考えは堂々巡りばかりで

俺は、バカだから、それをどうしたら良いか分からない

何で、こうなったかなんて、考えたって解る物じゃ無いだろうに

「…そんな、らしくなくへこんでるにいちちゃん」

何を言っのかと俺は顔を上げた。

「俺だって色々思う所は有るけどさ」

直は影を隠したように笑った。

「もう、最後なんだろう？ だったら、最期ぐらいカッ」

そんな事を、困ったように言う。

だって と言いつけて、

ああ、

そうか。

そう、気付く。

俺は全部失って、直は俺を失う。

モヤモヤするのは俺だけじゃない。
それは直も同じ。

…そうなんだよな。

直だって今まで一緒に過ごした兄貴を失う訳で、

辛いのは俺だけじゃない訳で。

独りでへこむのは、ズルいんだよな。

「分かった」

俺は立ち上がって、バッグを持ち上げた。

超重い。

「…今悶々悩んでも意味ないしな」
「そーそ。そーいう事」

時計はてっぺん12時。

シンデレラじゃないんだけど、
12時っていうのはキリがよくて、何となく区切りをつけたく
な
る。

「…じゃあ俺、もう行くよ」

直が柔らかく笑った。

「…うん」

辛いんだけど、

これはもう、どうにもならない。

「他の奴には家出したって言っといてくれ」

「了解。にいちちゃんの悪口も交えて言いふらしとく」

なんだコイツ。

俺は苦笑するしかなかった。

「お前なあ」

「その方が自然じゃない？」

しれっと言われる。

「まあ…何でもいいや」

出来れば夜明けギリギリまでここにいたいんだけど

そんな事したら、決心が鈍ってしまふ。

今行かなくちゃ、きつと、ずっと行けない。

「…じゃあ、にいちゃん」

直は笑って

もう、この顔も思い出に変換されるだけなのか、なんて

「次はいつ帰ってくるのかな？」

古いリアクションでずっとこけそうになった。
ムードぶっ壊し。

…コイツ…鬼畜だ。

「次はって…」

「また帰ってくるでしょ。いつぐらいいっ…」

「…無理言つなよ」

それには人間に戻らなくちゃいけない。

きっとそれは不可能なことなのだろう。

…っつか、実家に帰省する訳じゃないんだから。

「何で？」

「…はあ？」

何でこうかなコイツは。

「どっつして無理なのさ」

知らねえよ。

ただ無理だと思う。

きつと、無理。そんな気がする。確信と言っても良い。

「だっつてさ…」

「無理じゃないでしょ？」

…俺の話とか、聞く気あるのかな。

「いや」

「無理じゃないよね。にいちちゃんだもん。出来るよね」

…ええっと？

強引にも程があると思うんだけど。

「うんうん、それでこそにいちちゃんだ」

「いや、あのさー！」

やっと、耳を貸してくれた。

「無理だから。たぶん絶対」

やっぱり、ニッコリ笑って言う直って奴は鬼畜なんだよ。

「だいじょぶだよ。無理じゃないから」

こっぴゅって、強引で強情。

「…何で」

「直感」

俺に、それに頼れと？

「…だからさ」

「無理だなんて言わせないよ」

…返す言葉がない。

「無理なんかじゃないんだよ。だってちよつと家出するだけなんですよ？すぐに帰ってくるんだよね？」

「…。」

「無理じゃないよ。むしろ当たり前じゃん。当然、帰ってくるに決まってる」

こいつ鬼畜だよ、…ホントに。

「いつてらっしやい。にいちちゃん？」

わざわざ『努力する方』を選ばなくちゃいけないんだから。

楽な方は選ばせてもらえないらしい。

… だけど

何故か、失望感は和らいだ。

目標が出来たっていうのか…判らないけど。

とにかく、果てのない闇、みたいのは見えなくなった。

俺が吸血鬼になって全部失っても

また人間に、戻るから

全部なくしたら、全部、取り戻せばいい。

「 良いよな、言うのは簡単で」

重たい荷物も、ちょっと持ち出すだけ。

すぐに、帰ってくるから。

「俺は苦労するんだぜ？」

「だいじょぶだよ。にいちゃんだから」

「…その根拠のない自信は一体何なんだよ」

直はしれっと言う。

「いつもそうじゃん。無理無理ってぼやきながら、結局上手くいっ
ちやう」

だから今回もだいじょぶだよ。

「 そうだっけ」

「俺はそんなにいちゃんを尊敬してたんだから」

…何だって？

「ソんケー？」

「尊敬。」

俺を？尊敬！？

「なんだそりゃ〜。笑える冗談だな〜」

「そうだね〜」

目の前のイケメンはけらけらと笑う。

デジタルの文字はどんどん秒を刻んでゆく。

「…じゃあ、直」

「…うん」

それでもニコニコしてる直は、どこか悲しそうで。

きっと俺もそんな顔をしてるのだろうと思った。

「…『また』ね」

帰ってくる。

「…ああ。『また』な」

「」の場所に。

俺は、帰ってくる。

俺は重いバッグを持ち直して、

階段を下りて、

ドアを開けて、

空気が冷たくて。

振り返ると、直が2階の窓から手を振っていた。

ちょっと照れて俺も振り返し、

ずり落ちてくるバッグを担ぎ直した。

俺は生まれた時から慣れ親しんだ弟に、自宅に、背を向けた。

…縁を切る訳じゃない。

ちょっと出掛けるだけだ。

… すぐに、帰ってくるから。

そう、何度も言い聞かせて、

俺は歩き出した。

あの廃ビルに。

あいつに会うと思うと腹が立つけど。

あいつに聞かなきゃ解らないことが沢山ある。

… そういつ訳で、

あの全ての元凶の所に、俺は自らのこのこと向かっちゃったのであった。

吸血欲 発覚

全身から嫌な汗が滲む。

頭の中は血の事で一杯で、それ以外は考えられない。

「…つく…つく」

苦しい。苦しい苦しい苦しい苦しい

耐えられない。堪えられない。

日中の日差しを浴びたことも響いた。

日光は一種のアレルギーに近い。日焼けが酷くなるか、アトピー
性皮膚炎の症状に酷似した炎症が起きる。

幸か不幸かそれはまだ起きていないが

ベッドで独り悶え苦しみ、首を皮膚を頭を脳を心臓を掻き毟る。
そんな事はどうでも良い。そんな事より苦しい。

誰か…などと祈っても分かっている解りきっている誰も来ないな
んて。

…いや、来る絶対来る。来ない筈は無い。分かっている。来る。
彼奴は来る。

来るからもう少し、もう少しだけ 堪え忍べ。

あと1分あと1秒 あと10分、あと、あと

「…はっ…あ、…ぐっ…っ…」

立ち上がれ。

平衡感覚は麻痺してしまった。
色彩も定かでない。

音は齧して信憑性が無くなった。

何もかも、鈍化して、劣化して、苦しみの中に飲み込まれた。

何も解らない。

矛盾だらけ。脳内は氾濫し停滞。

気休めに喉を潰して叫んだ。気休めにもならない。何の意味にもならない。

苦しみと苛立ちに任せ、机に拳を叩き付けた。木くずが飛散する。椅子を蹴つ飛ばす。壁に当たって大破。

「…は…ああッ！」

寄り掛かった壁を殴る渾身の力で。コンクリートが砕け錆びた鉄筋がへし曲がったのが見えた気がした。

… 私は、

… 私はどうしてこんなに苦しんでいるのだったか

何故いつも通り狩りに行かないのか

そんな事を、鈍って麻痺した頭で考える。

私は何を待っているのだろう

何に助けを乞っているのだろう

… いったい

じっとしていると正気を無くしてしまいそうだ。

… 尤も、既に正気などは保ってはいない存在すらしていないだろうが。

この部屋の事など知らない関係ない。

気休めになり得なくても八つ当たり。そうでなければとても耐えられない。

破壊と引き替えにこの1秒を買う。
崩壊と引き替えに小さな希望を捜す。

待つ本来の目的も忘れた。そんな事を考えすらしない。目的などあるだけ無駄だ。

待てばいい。次の1秒を待つ。それを迎えたらその次の1秒。永遠に繰り返す。次が来たら次を待つ。

『何か』を考えるな。今の1秒が長くなる。次の1秒が来なくなる。

耐えろ、まだ壊れぬように。今の1秒でいい。次の事は次になったら考えればいい。

今は、今だけを耐えればいい。

ふと、鼻腔を僅かな芳香が通り抜けた。

ドア… あのドアの先

ギギギギ…と、酷く緩慢にドアが

「…あの」

来た！！

走った。

木片に躓^{つまず}いた。

気にしない。構^{かま}ってられない。来た！！来たのだから！

「！！」

すぐに私はその甘い首筋に　！

「…っあー!!」

倒れた。気にしない。離さない。ついて行く。吸血は続行。鼓動が治まってゆく。息が落ち着いてゆく。脳が透き通る。麻酔が切れる。

痺れが、苛立ちが、辛苦が、全て全て、満腹感とともに霞んで溶けてゆく。

ある程度、まともになって

正常な思考を取り戻した。

牙を抜いて、ふたつの穴を舌先で舐める。

…しかし、

とても残念な事に

… 私は、気付いてしまった。

「…お前」

「…？」

呆然と見上げる私の虞属。

「誰かの血を、飲んだのか」

彼の血の味が、微妙に変わっている事に。

私は、気付いてしまった。

…それは、私以外の血を愛したと

私ではいけなかったと

いや。

此奴はまだ私の血を口にしていない。

正式な契約は結んでいない。

少し脅えたように、少し呆然として、私を見上げる三白眼。

綺麗な新月の夜空色。

これは、私の物だ。

私は、軽く笑った。

帰って来てくれた事が無性に嬉しい。

…この先には血塗られた争いが在るが

今すぐ始まりはしないだろう。

それまでの間、今の自分と向き合い、よく理解すると良い。

私の存在についても

深い夜空は、何も知らなかった。

知る由も、無かった。

混乱ハテナ（前書き）

最近本文が長くなってしまつのに困ってます。

どうにかしないと僕の労力と時間が…。

混乱ハテナ

俺は、暗い階段をのろのろ上がっていた。

アイツに会つのはすんごく腹立たしーし、ムカつくんだけど…

だって…しょうがねえじゃん。それ以外どうしようもないんだから。

徐々に近づく錆びかけたドア。

と、

…？

つい、首を捻った。

数段先のドアの向こうから、何かが碎ける鈍い音がした。

…見えない敵と戦ってたり…するわけ無いか。

ボロっちいドアを開けようとドアノブを掴む。

…さあ何て言おうか…。
気まずくてしょうがない。

…まあ、とにかく開けないと意味も何も無い訳で…。

ノブを回して、ドアを開けた。

古い蝶番は、うるさく軋んだ音を出す。

「…あの」

困ったときの『あの』と『どうも』だ。

大抵どうにかなる。少なくとも今まではどうにかなった。

開いたドアの向こう側

を、前を見ると、

嫌いな筈の金髪がなぜか俺に迫っ

「　　っっ!？」

な　っ!？

声が出ない。

脚が動かない。

首に衝撃。

… 何より

必死の形相は怖いくらいで

何だか心配で、面食らって呆然としてしまって
『あ』も出なかった。

乱暴に服を剥がれ、いきなり首を咬まれる。

「…っあー!」

…ってエ…! !

突然すぎて、思考がフリーズ。

貪るように、食らいつかれる。

乱れた鼻息が首筋をくすぐって、俺を抱える指は皮膚に、その奥の肉に食い込む。

血液が体外へ排出されてゆく。噴き出すみたいに。それは飲むなんてスピードじゃない。

溜め込んでいた何かが勢い良く抜かれる感覚。

疾走する 勢いのある快感。

…それと、驚愕のあとの反動で腰が抜けて

爽快感も伴って、すっと膝が抜けた。

その場に座り込んでも、固定された顎は離れない。

しばらく、がちりと咬まれたままだった。

何で…何が起きてんの？

やがて、肩の筋肉を挟んでいた顎が離れ、その痕を念入りに舐められる。

ぞくりと筋肉が痙攣した。

理解できない分からない。

…ああ、俺は今血を呑まれたのか…。

なんてことも、今気付いたくらいで。

「お前」

訳の分からぬまま、間抜け面で眼前の金髪ロン毛を見上げる。

「誰かの血を、飲んだのか」

俺はとうとう日本語まで分からなくなったらしい。

…というか、半分も聞いていなかった。

なので、何を訊かれたのかが分からない。疑問系なのは分かったけど。

「
…？」

何だ？

何があつたんだ？

…つか何でこんな事になつてんだろ。

どうしてこいつはそんなに切羽詰まつてたんだ？

許可取れよ。…いや、許可取つてもダメだけど。

頭の中で疑問符が決壊して、洪水になって飽和する。

收拾が付かず、氾濫した脳内に、俺は馬鹿みたいにぼけつとす
しかなかった。

…注がれる視線は冷酷で、憂いが含まれていて、

なんだろ、何考えてんのかな、…なんて、頭の片隅のどっかで

思った。

…金色の瞳は深く謎めいていて

俺に情報のひとつも覚えさせない。

こいつは、ずっとこいつやって、

何を思っているのか、全く分からせてくれない。

そして俺に何も解らせない。

憎くて、ウザくて、嫌い、で、

嫌い、で

…コイツは俺をさんざんガン見した挙げ句、

ふっ、とポーカーフェイスを崩して、見下したように、笑った。

放心状態だった俺も、何だか徐々に頭の中が整理できてきて

…コイツの態度には、心底あつたま来た。

「…っテメーなあ　！！」

突然、妙に機嫌良さそうに言われる。

「で、どつなんだ？」

……はい？

「私以外の血の味は、さぞ美味かったのだろうか？」

え？

……………えっと、何の話？

放心状態に逆戻り。

「私では不満か？」

それには、無条件に賛同。

「つたりめーだろ！！」

「そうか。…なぜそう思う」

何でそんな事ばっか訊くんだよ。

答えなんか一個しかない。

「お前が 嫌いだからだよー！！」

怒鳴って、

そう、口に出した瞬間、

急にそれが軽々しくなった。

頭から声に出して現実になった瞬間、急に虚勢とせきくさくなって
…

…この感じは初めてじゃないけど。

…今回は、今の今まで確信してたのに…何でだよ

俺の吐いた言葉が

…それが嘘だって 言いたいのか

「嫌いか」

ああ嫌いだよ。大ッ嫌いだ！顔も見たくないね！

…大ッ嫌い、なんだよ

… 幾らでも、何回でも

『言う』だけなら易しいことだ。

d a i k i r a i、ダイキライ、台記雷、墮移飢羅威、、だいき
らい大嫌い

単なる、母音と子音の組み合わせ。

単なる単語の集団。

漢字の塊。空気の振動。声帯の揺れ。

「…きらいだ」

なんでその言葉が嘘臭いのか、わからない。

俺は、基本的に嘘は嫌いだし吐きたくはない。

…けど、理由が分かんないんだから…ウソにはならない…と思う。

「そうか。それは残念だ」

微塵も残念そうじゃない。

現在進行形で悩んじゃってる俺が馬鹿らしくなるほどに。

金髪のポーカーフェイスは小さく息を吐き、くるりと背を向けた。

「…イヤよイヤよも好きの内…と言っしな」

「違っ！…そして古い！」

いらねえよ。そんならしくないポジティブシンキング。

「いい、分かっている。お前が素直になれぬ事も、皆把握しているぞ」

「違ああアう！…！」

知ったかすんじゃねえ！

「お前に俺の何が分かんだよ…！」

「…いいや…」

は？

…何だよ？調子狂っ。

「そうか。…そうだな」

…はい？

何？どつたの？

「そうだ、…タクヤと言ったか」

「今度は何だよ何のよ」

タクヤ、拓夜。

俺の名前。

直夜よりどこかダサイ、俺の名前。

「 ……でええええええええええ！！？何で俺の名前知ってんのぉお！？」

普通の人に言われても『あれ、お知り合いですたっけ』位の感覚
なんだけど

得体の知れぬ吸血鬼に名前言い当てられたら目玉出るだろ。…い
や出ないけどさ。

「 いいか、私と 」

「 シカトすんなぁあ！！ 」

迷惑そうにストーカー疑惑が視線を向けた。

「何で俺の名前知ってたよ!? どこで知った!? 住民票か!
!保険証か!!それとも学校か!」

「五月蠅い落ち着け。無意味に騒ぐな」

「うるせエストーカー紛い!! どこで情報を手に入れた!!!吐
け!!!吐けよおお!!!」

肩を揺さぶろうと手を伸ばしたが、カウンター。

両手首をがっちり掴まれる。

「ぐっ!!!」

「なぜ私がお前の名を知っているはならぬのだ?」

見た目に合わない力で、手首を締め付けられる。

細い指が食い込んで痛い。

「っだってキモいじゃねえかよ!!!知らねー奴に名前覚えられてる

なんてよお！！！」

「『キモい』：か、下品な言葉だな。私の下に居るからにはその様な品の無い言葉遣いは慎まねばならんぞ」

「知るか！　つてか干渉すんな！離せ！！」

「離しても、構わないのか？」

「つたりめーだ！！」

「…と腕を思い切り引い

「なら離してやるっ」

「…どうわっッ…!?!?」

急に手を離されて

俺は後ろにぶっ倒れた。

ケツで床に激しくスライディング。

「…っっ…!?!」

睨み上げた先でヤツは不敵に笑った。

「離してやっただろっ?」

…日光に焼かれて死んでしまえ！！

「デメエ！ワザとか！？ちよつとツラ貸せや！！ やってやるうじやねえか！張ろうじやんか！！タイマン！」

と、軽く暴れた所で、
脚に何かが当たった。

「…は？」

見ると、木の破片。

よく見ると…ってかよく見なくも、部屋には似たような木の破片が散らばっているようだ。

所々コンクリが砕けて芯の鉄筋が剥き出しになっている。

机は真っ二つにへし折れ、在ったはずの椅子は見当たらない。

……え？

ええ〜？何で〜？

この部屋模様って一体？？

「…この部屋ってどしたの？」

…と、見上げる。

「……いや、どうもしない」

「ぜってーどづかしてる」

ウソ超下手。

バレバレだよ。もーちょっと上手く偽れ。

「…ただ、妖怪が来たただけだ」

「ぜぜぜ絶対どうかしてる！…！」

妖怪って！？

助けて鬼太郎！！！！

「何だ。妖怪などとてもポピュラーでありふれた存在ではないか」

「んな訳有るか！！妖怪が溢れてる世の中なんか終わったも同じじや！！…！」

其れが許されるのはマンガだけです。

「…私達は吸血鬼という『妖怪』なのでは無いのかな？」

「あ、」

そうか。

吸血鬼って西洋妖怪か。

「尤も、立派な霊長類としての生物だから妖怪とは異なるがな」

「そう言えばそんな事言ってたな」

大昔に人間と分岐したとか。

「何だ覚えていたのか。」

あ、むかつく。

「お前は阿呆だから忘れたと思っていたぞ」

「テメエ喧嘩売ってんのか!!」

マジ性格悪いコイツ。

どーにかなんねーのかな。この先、摩擦熱で発火爆発しない自信がない。

てか絶対無理。

何なの？俺が嫌いなの？

「話が替わって仕舞ったな」

そうだったけ？

…ああ名前のくだりか。あの辺で俺が曲げたんだな。

「私はお前と正式に契約せねばならない。だから」

じくり

とんでもない言葉が繰り出される気がして、俺は粘度を増した唾を飲み込んだ。

…だから？

だから、何？

「…いや、…いい」

「言わねえのかよ!」

…緊張させといて言わねえのかよ。

ホントもう、抜けてる。色んなネジとか。大事な所とかが。

どっしりよ。…疲れる。

「言うまでもない。いつかは叶う事だ」

「あーそーかよ。お前にはガツカリですよ」だ」

挑発にも素知らぬ顔。

そっぽを向いた顔と、浮いた首のスジ。

その白い首を、何気無く鋭った爪で搔く。

「あれ？」

引かれて滲んだ赤いラインはすぐに消えるが、そこじゃなくて

「…その首どした？」

メラニン色素なんて持ってないみたいに白い首には、赤い発疹がポツポツできていた。

そんな事を訊かれるとは夢にも思わなかったように、ヤツは俺の方を向く。

「ヴァンパイアにもアレルギーってあるのかよ？」

いつだったか、クラスの奴が食品アレルギーで、給食のエビトアタってるのを見た。それに似ている。

ちなみに俺に食品アレルギーは無い。

ハウスタストはあるけど。

くしゃみが出て目が痒くなるくらい。軽いから気にした事なんて無い。

「…」

男は無言で、手の甲を見た。

そこにも若干ながら発疹が見える。

「…ああ、いよいよ出たか」

当たり前のように言った。

「アレルギー…か。…そうだな。…ヴァンパイアは皆太陽アレルギーなのだろうな」

…太陽って吸血鬼の弱点だろ？

「どーゆこと？」

「日光には人間で言うアレルギー反応を示す。私は日中に太陽の下を通った。だから今更になってこれだ」

心底嫌そうにコイツは言った。

「…弱点って程弱点じゃないのな」

灰になるとか、もっと激しいのかと思った。

「じゃあ十字架は？銀は？」

「…お前は固定観念を捨てる」

首の辺りを気にかけてながら、かったるそうなお説明。

「十字架に弱いというのは迷信だ。中世にはキリスト教と対立した
がな」

「銀は？」

「人によっては金属アレルギーがあるが…それは人間も同じだろう」

何だ、結構フツー。

…ツマンネ。

「じゃあ…俺は昼間はヤバいのか」

「お前は人間の特性の方が強いから大した問題は無いだろう」

…なあ〜んだ。あんまり変わんねー。

へこんだのがバカみてえ。

「…で、さあ？」

男の視線だけがこつちを向いた。

「ハイレギュ？」

さつきから尿意が…。

…ん？なんだこの空気。

「… 最近は一 日中営業している便利な店ができてな」

「…コンビニかよ!」

コンビニにたかってんのか!

やべー…想像したくねえ…。

「水洗便所が完備してあるのだ。何でも売っているしな。良い時代になったものだ」

「どこのジジイだよ…」

…仕方ない…。

「…じゃあ行くよ。ここには無いんだろ?」

行くしかないなら行きますよ。仕方無いじゃないっすか。

「じゃー行ってくっから」

返事がないのが癪だ。

…ドアを開けて、木片の散乱した部屋から出た。

…吸血鬼がコンビニに出るってさ…結構ポピュラーじゃん。

実は近所にいたりしないのかな。なんか弱点らしい弱点って無いみたいだし。

…あゝ、もう小遣い貰えないのか。バイトしなきゃな…

夜勤じゃなきゃダメかな。やっぱりコンビニかな。

その近くにできたって言うコンビニ、バイト募集してないかな。

だったら立地条件最高なんだけど。

……そんな上手くはいかないか。

ビルから出て見回すと、通りを挟んで1キロも行かない所に、確かにコンビニがあった。

立地条件、最高。

爛々と蛍光灯の光を放つコンビニエンスストア。
オッサンがしまりのない顔でエロ本を立ち読みしてる。

自動ドアを抜け、眩しい店内に目を細めた。

店員は二十歳くらいのおんちゃん。

俺に向けた、いらっしやいませの笑顔から、人間がデキてる印象を受ける。

きつと、色々な事情があって深夜のコンビニなんかで働いてんだろーな。

…なんてゆーのは俺の勝手な想像。

…どうにもトイレだけを借りるのは気が引ける。

適当に何か買ってからついでを装って借りることにしよう。

ドリンクのコーナーからノーブランドの安い緑茶を取って、レジへ。

感じのいいあんちゃんはやっぱりとっても良心的。

「500円からお預かりします」

アイツもこれ位性格良ければなあ…。

「402円のお返しです。…あ、そつだキミっ？」

予想だにできなかった声に、反応が遅れる。

「は、…へえ？」

間抜けっぽい声に自分ながら貶したくなった。

「キミ、ヴァンパイア…だよな？」

…えっ!?

「あ…は ハイ…そうっすけど…!？」

はは、と、笑い方まで爽やか。

「俺もなんだ。よろしく」

「…は、はい…」

何で分かった…!?

「キミはこの辺に住んでるの？」

「近くの廃ビルに…変な金髪と一緒に」

「…この辺にいる金髪って…まさかアイツの愚属!？」

アイツってアイツのことか？

「…はあ」

愚属って何？

「…アイツとんでもないよな。最近ここに入ったんだけど」

最近できたコンビニなんだからそれは当たり前だ。

「トイレだけ借りて帰ってくんだよ。…こっちは相手が上級ヴァンパイアだって分かってるから口出しできないし…」

…危うく俺も仲間入りするところだった。

つか階級なんて有ったんだ。

…相手が同族ってゆーの、何で分かんのか？

「アイツ性格超最悪ッスよ。やってらんねーす」

「大変だねー、ガンバレ」

癒やし〜…。

…ああそつだトイレ。

「トイレ借りて良いですかね」

「? いいよ?」

エロ本オヤジの後ろを通ってトイレへ。

…こいつの事忘れてヴァンパイアとかぺらぺら喋っちゃまったな。

…幸い、エロ本の袋とじを覗くのに必死で聞いてなかったみたいだけど。

やだな〜、こんな大人にはなりたくない。

ドリンクコーナーの脇のドア。トイレマークが男女2つ並んでる。

まあ、その向い側のトイレを貸してもらつわけですが。

ドアを抜けて、用を足して、手洗つて、さあ帰りましょう…つて所で、ケータイが鳴つた。

「は？誰だよこんな深夜に」

…直じゃん。

「…はあ？何だよお前」

『…あゝ、にいちゃん？』

何の用だ。

『あんねゝ、絶対困る忘れもん見付けたから』

「はあ？んな訳あつかよ。ぜってーナイね」

『充電器』

「…あつ！…」

そう言えばそんな気がする。

『あとチャリ。移動手段は大事にしなよね』

「…あ、あれはいいや。メンテナンスだけよろしく」

充電器つってもあそこ電気通ってないんじゃないの？

つかコンセントあんの？

取りに行ってもしやーないかな…。

「いーよ、充電器は電池のやつ買うから。電話ありがとな」

『わぁにいちちゃんがお礼言うなんて気持ち悪い。…じゃーまたねー』

プッ。

「…何だあいつ」

何っーか…

締まらねー…。

ケータイ持ってちゃ外界との遮断なんて出来ねえのか。

とりあえずトイレから出て、まだエロ本見てるオヤジを横目に、レジのあんちゃんに挨拶。

「じゃー俺行きますんで」

「うん、退屈だからまた来てよ」

また来よう！

俺を癒やしてくれ…。

「あ、いらっしやいませ〜」

「？」

前を向くと、自動ドアが開いてお客が来たみたいだ。

明るい金の短髪に、金の瞳。

…あれ、アイツと同じじゃん。

タオル地の白いパーカーの下は素肌で、ジム帰りな空気を醸している。

あいつも…ヴァンパイア？

パーカーのチャックは全開けで、贅肉の無い腹筋が露わになっている。

やっぱり色素の無い肌。

左の胸に、でっかいバラのタトゥーがある。

童顔とそれはあまりにミスマッチで、逆に頷けた。

「…っ！？ お、前は…っ！！」

レジのあんちゃんが怯えたように後退った。

タバコの箱が幾つか落ちる。

「…おっと、キミみたいな雑魚に用は無いだ。ソコに居てもいいけど、邪魔だけはしないでくれるかなあ？」

にっこり笑った笑顔は曇りもなく純粹。

「ハジメマシテ、チエリーの愚属？」

「…へ？」

チエリーって誰だ？

愚属って何？

「……うーん……わっかんないなあ……、何でアイツはキミなんかを選んだんだろおネエ。別にクリステイに似てるわけでもないしねエ？」

…何言ってるかわかんねえ。

クリステイ？

外人か？

「…まあ、んな事はどーだって良いンだよね。ボクはキミという戦力を削ぎに ってか消しに来ただけだから」

「…???」

英語の授業並みに何言ってるかわかんない。

戦力うんぬん以前に戦わないし俺。

「人間の血の方が大分濃いみたいだね?…じゃあ美味しいかもなア」

「は…?」

まさか…と思った時には既に

そいつは、俺の目の前にいて

「え
」

俺より背が小さいそいつは背伸びをして

牙が僅かに皮膚に

俺は咄嗟に目を閉じた。

助けて

なんて、どこかで思ったのかも知れない。

アイツに助けてもらえるなんて、都合の良い事を。

拒絶したくせに。

曇空月 独占

勝手に、すれば良い。

その末にどうなるうとも、私の知った事では無いのだ。

…
なのに。

「あの阿呆が…!!」

…私も、随分と行き過ぎた過保護だと思う。

全く心配性の親馬鹿で、自分でも嫌になる。

…現に

…こうして、後を追っているのは他ならぬ私な訳で

少し便所を借りてくると行ったきりだが…

…どつにも、胸騒ぎがしてならない。

奴ら、…純血種の奴らは、私をマークしている。

私 及び私の愚属を。

まだ本格的な争いにはなっていないが、静かに戦争は始まっているのだ。

無警戒にのこのことその辺を歩き回っては、いつ、何が起るかわからない。

特に ああいう平和かぶれした奴は

「……私とて、満身創痍という訳では」

痒い。痛痒い。

顔や首などの日光に触れた部分は、先程よりも発疹が酷くなってきた。

…今後、水膨れになって皮膚が剥がれなければいいのだが。

私はかなりヴァンパイア寄りで …、…いや、既に、純血に均しい程人間からは遠ざかっていて

…だから、吸血鬼としての利点も、弱点も大きい。

それでもあいつらには及ばないし、及ぶ筈も無いが。

彼奴等は純血だ。

亜種との混血の師匠の愚属 私は、精々、真似事位程度しかあい

つらに近付けないだろう。

尤も、これ以上自分が化物に変わってゆくのはこちらから願い下げだ。

自分が望まない方向へ変化してしまうのは、誰だって苦痛だろう。

…きつと馬鹿な彼奴も

少し走ればすぐに着く明るい照明の店。

たしか、『コンビニ』…とか、言っていたか。

「…っ、やはり」

方向は掴めないが、敵としか言えないにおいが空気に混じっている。

不愉快な、あの蔓薔薇。

毒々しくて、色素の存在しない肌に浮き立つ。

師匠の左胸にも、咲き誇っていた。

…巨大な傷の為に分断されていたが。

正面から入っても

きつと、また激しく拒絶される。

『嫌いだ』

…そう、吐き捨てて

それに奴に鉢合わせするのも好ましくない。
攻撃するなら不意打ちの方が、奴には適している。

……………全く

…こんなに、考えてやっているというのに

彼奴の態度は、まるで変わらない。

もしこれが私からの馬鹿げた一方的な好意なら

…これほどなら、馬鹿馬鹿しい事は無い。

店の裏口からカラフルなエプロンを着けた店員が、大きなゴミ袋を持って鼻歌交じりに現れた。

これまた大きな深緑のダストボックスに、其れを放り込む。

…あの裏口から中に入れるのか。

様子を窺っていると、彼は制服のポケットから煙草の箱を取り出し、一本の煙草にライターで火を点けた。

「星のない空を見上げて、煙を吐き出す。

のんびりと一服始めた店員の後ろを、足音を忍ばせ通り抜ける。

彼は全く気付かない。

…一体、何の為に備わった五感なのか…。

だから昭和から平成に掛けての人間は、平和かぶれいると言っているのだ。

警戒心がまるで無い。平和なのは当たり前。

自分の身に危険が訪れるなんて、多分思い付きもしないのだろう。

倉庫のように物が積まれた部屋に出る。

プラスチックや段ボールのケースが高く積み上げられている。

…まだ小さかった頃の仕事を思い出した。

『……………』

…！

聞いた事の無い声だ。

耳を澄ました。

『…ミという戦力を削ぎにつてか消しに來ただけなんだよね』

…『キミ』とはもしか彼奴の事か？

「キミ、人間の血の方が濃いみたいだね？」

これは

まずいかも知れない。

「じゃあ、美味しいかもなア」

咄嗟に走った。

白い半開きのドアを蹴り開ける。

レジの前には、彼奴 … 拓夜と、見覚えの無い金髪の少年。

において分かる。奴は

純潔の、ヴァンパイア

少年が背伸びをし、

屈んで、拓夜の首に

…っ！！

ふざけるな

それは私の物だ

触れるな

それに、触れるな

強く

床を蹴る。

商品が落ちた。

走る距離じゃない。

そいつは気付かない。

知った事か

迫^{せま}った身体を、力任せに蹴^せつ飛ばした。

丁度、横腹に踵が入る感触がした。

「…くっ！あゝっ！！！」

予想以上に吹っ飛ぶ。

ごろごろと床を転げ、摩擦で停止。

苦しげに脇腹を押さえて、顔を上げた。

「…っ、…お、前はッ！！！」

私は此奴を知らない。

しかし好まざる者だという事に違いは無いだろう。

「私の下僕に近寄るな」

ふざけるな

それは、私のだ。

誰にも ましてや、こんな奴になど 渡してなるものか。

其れに触っても良いのは私だけだ。

許されるのは私だけだ。

指一本でも触れたなら即刻死刑にしてやりたい位なのに。

「……く、」

まだ苦しいらしく、身体を2つに折った。

「…へ…?? ……はり？」

遅れて状況を知ったのは当の本人。

きよろきよろと辺りを見回し、私を見た途端、顔を歪めた。

「…!?!? ……何でテメーがここにいるんだよ」

「…助けに来てやったのに何では無いだろうか」

私は寝ていたかったのに。

こいつの恩知らずは相変わらず、相変わる筈も無い。

「そつだ！そいつ」

拓夜が指差したとき、丁度少年が身を起こした。

「…つきいたなあ…。痛いじゃん？ チェリー、だっけ？桜助？」

彼の薄ら笑いは、余裕という暗示。

こいつら純血は無駄に丈夫で、手強い。

「全く…、ボクじゃあキミには敵わないからさあ、帰ってくんないかなア？ ホント、やめてよね？喧嘩はやだからさあ」

喧嘩は嫌だ？

どの口がほざくか。

「そつちから私等に『喧嘩』を仕掛けたのでは無いのか？」

「あれまあゆーねえ？…間違いじゃあないけど」

羽織ったタオル地の上着から、真紅の蔓薔薇が覗いている。

「…見覚えの無い顔だ」

「やだなー、老けてポケちゃったんじゃないのお？ ポクって、めちやくちや長老のレギュラーメンバーだよ？嘘だけど」

新入りか、

それとも、新手か。

どちらにせよ、大差は無いが。

「…なぜ我が僕しもへに手を出す。」

訊いておかなければいけない。

「あつは、『我が』 だつてさー。さっきからやだねえ。すんごい
独占欲」

「…私が言うのも何だが、そいつはヴァンパイアになって2日も経
っていない。価値は無いぞ」

少年が笑う。

嘲笑じゃなく、妖笑。

「僕の意志じゃないよ」

私は目を細める。

「リーダーの意志か」

彼はにこっと笑った。

「そ。キミの愚属を殺れ、だって？」

案外さらりと答える。

つい、と。

視線が拓夜に流れる。
温度の無い眼。

「キミは、なま」

先程までの愛想は影も形も無い。

「邪魔なんだよ。ボくらにとっては」

声は冷え切って凍える。

「ボくらが必要なのはその桜助くんだけ。キミは不要ない。…キミが居るとき、そのキミの御主人サンがこっちに来ないんだよ。…消えてよ？ボくらの種の保存のために」

ほざけ化物が。

「なら貴様にも消えて貰いたい物だな。私達の種の存続のためには、お前等純血は只の天敵にしか成り得ない」

分かり合えない。

天敵に成らざるを得ない。

私達は、対立する以外無いのだ。

何より

無条件に

私の下僕に危害を加える奴は咎人だ

私の、敵だ。

「…今日は消えれないかなあ。僕にだって目標…ってか夢はあるし」

お前がこちらの事情を気に掛けない様に、

こちらもお前の夢などは何の障害にも成らないが。

「…あゝあ、も、台無し。ボスのお願ひも聞けないし…奇襲攻撃、見事に失敗」

お手上げという風に両手を上げた。

「…ま、こんな時もありますよって事で」

腹立たしい程楽天的に、少年は括る。

「じゃ、お望み通り。ボクは消えると思いますか」

思わせぶりに言って、

踵を返した。

緊張と不安と、正体の知れぬ期待が立ち込める。

レジにいる知りもしないヴァンパイアの青年も、怯えと期待の入り混じった表情で成り行きに身構えていた。

全ての視線と意識が薔薇の少年に集中した。

一歩、踏み出す。

ウィイー

自動ドアが開く。

何の捻りも特別性も、ましてや面白味も危険度も無くごく普通に、彼はてくてくてく歩いて、通常で正統の入り口即ち自動ドアから立ち去っていった。

「……って普通に帰んのかい！！！」

天性のツツコミが堪えきれずに声を上げる。

レジから安堵と僅かな失望の溜め息が漏れた。

「ええ？だってここ出入り口じゃないの？」

「そうだけど違えだろ！！ 凄そうなおーラビンビンだったじゃん！！ 壁壊すとかいきなり消えるとかそれらしい事しろよ！！」

「弁償できないもん、ボク。いきなり消えるとか無理言わないでよお、立派な哺乳動物なんだからさー。マンガの見過ぎだつてエ」

「ヴァンパイアの存在が既にマンガなんだよ！！」

「それは違つぞ拓夜。私達は人類が漫画を発明した遙か昔から」

「お前は黙つてろ！！」

「何？ ヴァンパイアは突然消えたり空飛んだり、炎出したり霧呼び出したり、魔法チックな事出来ると思つてた訳？ 無理に決まつてんじゃない。キミって馬鹿？」

「ああ思つてた！！思つてたさ！！お前が思わせぶりな態度取るもんだから！！ まさか堂々と礼儀正しく出てくなんて思つてもみなかったよ！！ガツカリだね！！」

「やだなあ、ボクだって出口から退散するっていう位の最低限の常識は持ち合わせてるよお。変な期待しないでくれる？桜助はちゃんと分かってると思うけど」

「分かっていたからこそ間抜け共を煽ってみたい。人の心理などその様な物だ」

「そんなのお前だけだ!!」

「せーかく悪りいねえ。やっぱこっち来なよ。その方が向いてるよお？きつと」

「断る。こいつを連れて行く事は出来ないのだろうか？」

少年が蔑む様に笑う。

「当ったり前じゃあん。不要ないよ？そんなの」

その言葉が、気に入らなくて

私の顔が険しくなるのを感じた。

「……じゃー、今度こそボク帰るからあ。……キミが言う通り、」

そう言って、そいつは拓夜を見た。

先程とは違い、とても友好的に。

「礼儀正しくね」

シルクハットでも有れば脱帽して会釈していたかも知れない。

悪戯好きな子供のような目が、何かを企んでいる様に見えた。

後退りして、開きっ放しだった自動ドアから外に出て行った。

そっぴ、

一瞬だった。

「っ!？」

拓夜が目を見開く。

もう、少年はいなかった。

「っき、消えたっ…ッ!？」

「上だ」

早速天井を見上げる。

…違う。

「馬鹿か。違う。天井じゃない」

「…った！テメエ！！人のこと叩くんじゃねえ！！」

後頭部を軽く小突いた事を咎められる。

「屋根の上だ。さっき飛び上がった」

「…は…？ …デマ流してんじゃねえよ。なんでんな事分かんだよ」

…こいつは…。

「嘘じゃない。見えなかったのか」

「見える訳…！つてええっ！？ み、見えたの！？」

目玉が出かねない勢いで叫んだ。

「何だそうか。やはりまだ戦闘能力が…」

「何の話だよ！？ 何！？ じゃあセロのマジックも見破れるのか
！？」

「何だセロって」

人名か？

「…しかし、貴様の戦闘力の皆無さには目を見張る物があるな」

「ああそうですか、化け者共と一緒にしないで頂けますか」

ズクリ、と心臓が痛む。

「……お前には、見えただろう？」

聞かなかったふり。

レジの青年に話を振った。

「……へ！？俺ですか……！？……ああ……まあ、はい、残像ですけど……」

「え……！マジっすか……！」

「見えないお前が大した事無いのだ」

むっと押し黙る顔は不服だと物語っている。

「不満そうだな」

「……貶されて上機嫌になるかってえの。俺マジじゃねえし」

拗ねたように述べる様子は可愛らしい。

「貶す … か。 … 確かにな」

つい言った言葉、私には他意も悪意も無かったのだが、どうやら気にしたらしい。

吸血鬼としての能力なんて一朝一夕に変わるもんじゃない。

拓夜の身体能力がシヨボいのは仕方無いというか当たり前だ。

「不満も不満、大不満だよ。ふざけんなよ。無理に決まってるんじゃない」

「… 今のお前には無理かも知れないな」

「は？何その言い方。…もう良いよ…お前に気の訊いた事期待した俺が馬鹿だった」

…気の訊いた事？

「何の話だ？」

「もういい。何でも無えよ」

……解らないな……。

「帰る」

吐き捨てて、踵を返す。

状況が解らな過ぎて、追うことも出来なかった。

自動ドアが機械的に開き、奴の背中が遠くなる。

澄んだドアの向こうで、不機嫌そうな横顔が早歩きで消えていった。

「
…？」

首を捻る。

全然、訳が分からない。

私はこういう事に疎くて仕方がない。

悠二なら分かるだろうか。

あいつはこういう事に関しては結構達人じみているから。

…また、明日にでも行ってみることにしよう。

何だか謂われの無い憂鬱感に取り巻かれながら、後を追うように私もあの部屋に向かった。

…しかし、

もう手を出してくるとは、思わなかった。

予想以上に、展開が早い。

焦っているのか…？

無限に近い寿命を持つ彼奴等が？

…それとも 内部で何かが起きているのか…。

…何がどうであれ、面倒なことに変わりはないが。

それに、どっちみち拓夜に苦難の道を強いてしまう。

…やれやれ。

深い深い深い溜め息を、雲の掛かった月に愚痴ってみた。

彼は何を言う事も無く、

200年前と同じ顔で私を見下した。

シラナイトコロノ、シラナイハナシ（前書き）

ありがちな敵キャラ登場編です。

キャラ視点ではなく、客観目線になってます。

シラナイトコロノ、シラナイハナシ

「あら、キース」

そう呼んだのは赤いドレスの女。

無残にもスカート裾を膝上で切り落としている。

呼んだ方も呼ばれた方も、鮮やかな金髪と、揃いの金色の瞳を有していた。

おおよそ色素の存在しない肌。

さらけ出された左胸には簡略化された真紅の蔓薔薇が、眩しいまでのコントラストで刻み込まれている。

キースと呼ばれた少年は、不機嫌そうな視線を投げた。

「…なに」

「失敗したのね、貴方」

そう言つのは女。口調にはどんな温度も感じられない。

「……ひるさいよ」

「結局、主あの役には立たないゴミって事でしょう？存在意義なんて有るのかしら」

少年は口を噤つぶんだ。

女は口調同様、一切の表情を持たない。

「主に尽くす事が私達の役割だわ。こうして組んだからにはね。役に立たない手足は不要ない」

女の刺すような視線に、少年は頭かぶりを振る。

重たい口を開いた。

「…確かに…ボク達は忠誠を誓った。互いに、一つの目標のためにね」

「…じゃあどつて」

「やめなよお、ロス？」

少女の声。

「いつくら主が大好きだからってえ、キースに八つ当たりしちやあ可哀想だよ」

怠そうに間延びした声。同様に半開きの金の瞳。

鋭利な爪に仕上げのトップコートを塗りながら足を組み直した。

「…あたし達はあ、そもそも忠誠心から行動してるわけじゃないの！。忠誠心は派生しただけえ」

グロスの照る唇。

それが、大きく湾曲した。

「あたし等はあ… 邪魔なあいつらを、滅ぼさなくっちゃあ」

少年も、

伝染った様に、歪んで笑った。

「…そーだね。それはとっくの昔に決まっていたことだし」

彼の瞳が女を捉えた。

「…それを宣告しに行ったのはー？ …ロスヴィータ、他ならぬ
キミなんじゃないかなあ？」

少年を睨んだ。

やっと彼女の顔に表情が宿る。

「それも主全ては主の為よ。私は彼の為だけに存在する」

侮蔑の意で少年が鼻を鳴らした。

「主、…そお、主ねえ」

女の額にびしりと血管が浮く。

「…何が言いたいの。彼を侮辱するつもり？」

「いや。ぜんぜん」

肩を竦め、首を振った。

「ボクだってロスとおんなじさア。…同じ目標を持つ、仲間じゃないか」

少女が視線を上げた。

女も不服そうながら、彼に目をやる。

「なんか違う?」

諦めたように軽く息をついて、女は踵を返した。

「いいえ」

少女は爪の塗料に息を掛けた。

「全然せーかい」

彼は裕笑した。

「ボクらの存続の為に、奴らは邪魔なんだよ。消えて貰わなくちやー……」

どこか遠くを見ながら、少年は呟く。

しかし、どこか上の空。

「…キースう？」

呼び戻したのは少女だった。

「…ん？」

「あたしはあ、いつでもキースに協力するからね？」

「…、」

彼ははにかんで微笑した。

「分かってるよ、リラ」

彼女もにっこり笑う。

「うん、知ってる」

少女の濃いピンクの爪が光を反射して光った。

ロス、リラ、キース、

知らない所の、知らない話

無成長 口癖（前書き）

先週は大変申し訳ありませんでした…。

資格試験があつたので…。

それに、今回は（も？）とんでもなくぐだぐだです（笑）

次回からは定期更新に努めたいと思います、まる。

無成長 口癖

まだ夜は明けない。

仕方無いので私はまた友人の元に居る。

予定は変更だ。

帰ったって結局追い返されるだろう。

そんなのは無視して素知らぬ顔でやり過ごせばよい話なのだが、
気になる消化不良は早く処理してしまいたい。

全く…、何故私が私の家に帰る事を躊躇わねばならんだ。

「…で？何でお前は悩んでるんデスかー？」

面倒くさそうに頬杖をついて話を伺う悠二だが、間違い無く私の所為なので文句は言えない。

「……拓夜が」

一言目に奴の名前なんて、惚気ているようですごく不快だ。

「あいつが、急に不機嫌になるから」

私には理解できない。

あれこれ考えてみたが、やっぱり解らなかつたのだ。

「……あのさ、一概には言えねえけど、たぶんそれおまえが悪いぞ」

「一概に言えないならそう簡単に原因を特定するな」

悠二のブロンズのピアスが照る。

「相談してんのはお前じゃ無えのかよ」

…それは、そうだが。

反論が出て来ずに黙ってしまった。

「お前は鈍感で人の気が分からない所があるからなあ…」

その実感を掴めないところが鈍感なのだろうか。

「何か空気読めなかったとかさ、いけないこと言っちゃったとか、そういうのじゃ無えの？」

心当たりなんてないから訊いているのだ。

「分からない」

あゝあゝと、悠二が呆れたように溜め息をついた。

「…ちゃんと考えた？」

「…自分を省みずに人に尋ねるほど私は愚かな人間ではない」

だよなあなんて、もう一度溜息。

ざっと辺りを見回して、初めて気付いた。

「お前の愚属はいないのか？」

「え？ …… ああ、優太？」

あの背の小さな華奢な少年。

引け腰で、気弱な性格だった事を覚えている。

「出掛けた。 …… どこにいるかは知らねえ」

「 …… 随分と自由なんだな」

「 …… はあ？」

そんな怪訝な顔をされる意味が分からない。

「お前、束縛し過ぎだろ」

「そんな事は無い。恐らくは」

「そうなんだよ。だから嫌われちゃうんだって」

嫌い

…あいつは、私が嫌い

例え私がどんなに想っても。

届かない。

届く気がしない。

好きだ。大好きなんだ。

だから何処にも行かないで欲しい。ずっと手元に居て欲しい。

私の知らない事が有ると不安になる。行動も思想もすべてを知っ

ていたい。

だから、自由にさせるのは怖くて強わない。

それで私が嫌われるというのならば

そんな分かり易い悪循環、どうして解消できないものか

「……ふ、」

自嘲して、笑った。

解消するのは容易い事だ。私が縛らなければ良い。

そんな『簡単な事』が出来ないのは、私が根性無しだからだ。

結局は、私の所為か。

…滑稽だ。

…ああ、なんだろうか。…もう、面倒臭い。

…考えるのが嫌になった。

私に自覚がないのなら、考えたとしてもそれはただの情報としての結果にしかない。

実感と反省を伴わないならば、結果は意味を持たない物だ。

諦めた。

次にでも、原因が分かる時が来るだろう。

その時に究明すればいい。

「…そーだ、お前。その拓夜って愚属はさ、いつになったら顔見せてくれんの？」

「…は？」

思ってもみなかった間に、思わず間抜けな声が出た。

「は？じゃねえよ。何その連れてくる気なんてさらさらありませんけど？…みたいな態度は」

もちろん更々ありませんでしたが。

「連れて来いよ。気になんじゃん」

「一体何故気になるんだ」

「……んな、理不尽な……」

その言い種おくは無えんじゃねえの?…と、悠二は整髪料でセットされた髪を掻いた。

言い種も何も、連れてくる気なんて端から無い。

受け答えは適当な言い訳だ。はぐらかせばいい。

…のだが、はぐらかせなかった様だ。

「いーから連れてこい。はい、決定」

「決定も何も私はもともと ……」

「聞こえない聞こえない聞こえない。おーすけ君？ 往生際が悪
いんじゃないの〜？」

…コイツ…。

殴り飛ばしてやろうか。

一発くらいなら構わない気がする。

「…つつうのはアレなんだけど、とにかく連れてこいって。悪いよ
うにはしねえから」

「…何故そこまでして紹介を強請^{ねだ}るんだ。…自分のことでもあるま
いし」

悪戯小僧のように笑う。

「おめーの愚属だぜ？てめえのことなの。俺が気になるんだもん」

…それは

…それは…は…

……。

「待ってますよ、さぞかし心待ちにして。

まだ平和な内にね」

平和な内に

つまり今直ぐにでも…連れて来いと言うのか、…お前は。

「……拓 ……彼女は、友達を欲しているだろうか」

悠二がしたり顔でほくそ笑んだ気がした。

「そりゃー、お前にだって俺っていう友達が居る訳だし？…寂しいんじゃないの？」

彼奴がそんな珠だろうか。

「家族や学校とも縁切ったんだろ？だつたらよけーにそうだよ」

… ああ、そうだ。

家族からは引き離れた。

私には親も兄弟も居ないので想像に頼るより他に無いが

家族と引き離されるといふ事はとても辛い事なのだろう。

想像の域を脱せはしないが。

そんな事が薄ぼんやり判るだけ。

「……ここでなんやかんや言っても何も変わらないだろう。…
…そうだな？」

さあねー、と、とぼけた態度。

懐中時計を忘れた。

どうにも急を要する時には、ああいった小物を忘れっぽくて仕様が
がない。

… まあ、時計など見るまでも無く、夜なんて明けているだろう。

…もう火傷は御免だ。

「…明日まで此処にいる。気は進まないがな」

「うっわ！桜助が！？…どうした、腐ったモンでも食ったか？」

「…私は正常だ。腐敗した食物などに手を出すほど餓えても居ない」

「こないだハラペコだったじゃん」

「……………」

「こいつが言うことは的を射ていて腹が立つ。」

とにかく、決定事項だ。

正直すごく嫌なのだが仕方あるまい。

「……で、泊まるのは良いとして、ハラペコ桜助君はいつ帰るの?」

本当に殴りたい。

「日が沈むなら今すぐにでも」

「太陽は敵だからなあ」

悠二くらいになると既に太陽には弱いらしい。

死にはしないが、後で大変なことになるのは目に見えている。

「帰ったらまた喧嘩すんじゃ無エの？」

「…ここに連れて行くということを伝えるが」

友人関係を許可するのだ。

…感謝して欲しい。

「……………知らねーぞ、俺ア…」

「？」

悠二は目を逸らして呟いた。

「…そっというのがダメなんだよ」

何の事が判らないが。

「まあ…、…分かったから。気の済むまで泊まっけてけ。」

お前なら何でもいーや、と、悠二が椅子に仰け反った。

…全く。

何故私がこんな苦勞を。

……駄目だ、彼奴と一緒にしてから『何故私が』が口癖に成っている気がする。

彼奴が居ると調子が狂ってしまふ。

自分で手元に置いておきながら……本当に、自分勝手。

今頃何をしているだろうか。

何をしても良い。……そのくらい自由は渡してやるつ。

…だから、どこか私の知らない所に消えたりしないでくれ。

我が侷な私の見えない所にだけは行かないでくれ。

…この手元から、

逃げないで。

狂った独占欲を満たさせて

間違いは分かっている

だけれど

それ以外に答えが見付からない

目的も無く生きるだけ生きて

気が付いたらこんなにも時間が経っていた

私は変わっていない

昔のままだ

もしかしたらお前よりも幼いかもしれない

こんな形ナリでそんな事を言うのは可笑しいか

そんなにも私は変わってしまったのだ

外見そとだけが

お前もそうなる運命だと知ったら

お前は自分の境遇に悲観するか？

耐えられるか？

自分を残して何もかもが朽ちて変わっていく事に

…だから言えない

言わない

いつか、

そんな全てにお前が気付く時が来るまでは。

奇立ラビリンス(前書き)

初の恋愛くさい内容です。

言うまでもなく下手くそなのでご容赦ください。

奇立ラビリンズ

畜生！！

畜生畜生ちくしょー！！

何なんだよアイツツ！！ スカしたツラしやがって！！

見下すのも大概にしやがれ！

つたく…いい加減 ！！

「いい加減に ！！」

いい加減…ツ！！

…いい加減…何だ…？

何が言いたいかなんて分かんねえって

「…あああーッもう…！」

そんな自分に苛立つ。

だつてさ！？

俺はあん時助けてなんて思っちまって

ヒーローみたいに現れたオマエに格好いいなんて思っちまってさ、

あの訳分かんねえジム帰りみたいなよりも大分^{だいぶん}上手^{うわて}みたいな感

じだったから…また格好いい、って……

…ああああッ!!

俺の馬鹿ああ!!

違う!違うから!!

そうじゃない!!

とにかくそれでちよ〜っと思直したなあ〜…なあ〜んて思ってたらさ、

何だよあの態度!!

優しいなあなんて思った俺が馬鹿だなんて分かってるよ!!

だけど…けどさあ!?

アレは最低だろ!!

……冷たすぎるんだよ……。

……っじゃなくて!!

「っああッ!もおおオッ!!!!」

顔が熱い。血が上っている。

買ってきた安い緑茶を呷った。

「不味いし!!」

前通りの味覚な筈が無い。

キャップも開いたまま床へぶん投げた。

パカン！！ と、

床で小さくボトルが跳ねる。

同時に澄んだ緑の水飛沫が飛び散った。

転がったペットボトルは緑茶を垂れ流し、コンクリ剥き出しの床に静かに染みを広げて行く。

流れる緑茶はへし折られた机の残骸にも到達し、滲みていった。

「……………」

何だか俺はクールダウンしちゃって。

ただ何をするまでもなく、乾いたコンクリを浸蝕する緑茶を眺めていた。

…あゝあ、

……何やってんだろー、俺

バカみてえ

勝手に頭来て暴れて八つ当たりして

…それもくっだらねえ理由で

そっぴゃこの部屋は誰がこんなにしちゃったのかな。

…アイツしか居ねえか

自分の部屋こんなにしちゃったアイツも大概バカだね

まあ、あの時のアイツは余裕なんて無くて、尋常じゃあなかった。

今の俺はただのヒステリックだったけど。

多分俺の癩癩かんしゃくなんかと一緒にしちゃいけないんだろーな…、…
なんて

「ああ、また…」

何で気付くとアイツを考える。

腹が立つ。

自分の思考回路なのに。

…やる事なんて元々無くて。

手持ち無沙汰な俺は汚い部屋もそのままに、後ろのベットに倒れた。

埃っぽいベット。アイツに見下されて、

抱き付かれた

…と、突然。

「…！！」

心臓が、

狂ったみたいに血液を押し出す。

…帰ってくる、ここに。

そう思うだけで緊張したみたいに手足がガタガタ震えて。

苦しくなる。

何だよ俺。

こんなの

こんなのって

本気で恋しちゃった時みたいな

…その上、それがかなり末期だった、みたいな

「…つえ、気持ち悪…っ」

ありえない。

…だって 絶対ありえない

理論なんて抜きだ。

なんやかんや言ったってそんなのは…

だってアレは生粋の男だし…

紛うと無き男だし

その上不審者だし

俺の仇つつつても過言じゃ無え奴なんだぜ

何？

俺はアイツに惚れちゃったの？

おかしいんじゃないの？

俺の頭。

絶対おかしい。ぜええつたいにどうかしてる。

じゃあ今までの恋愛は何だったわけ？

あれだってかなり本気だったんだけど。

…なに、俺ってゲイだったの？

…じっわっ…

冗談だろ？…？

…何かもう…死にたい。

大きく、寝返りを打った。

「…あゝあ…腹減った。」

もうその空腹が求めている物は血だって解ってる訳で、

そして何故か浮かんでくるのはアイツの顔な訳で。

…好きじゃない。断じて好きなんかじゃない。

俺はガシガシと頭の映像を掻き消した。

それなりにシヨツクだ。

もう俺の中には『俺』の証拠なんて残っていない気がする。

ぜんぶぜんぶ無くしてしまった。

ああそうだ、人間に戻るんだっけ？俺。

それってどうやるんだよ。

簡単に言っちゃったけどさ、方法なんて無いだろ

これって感染みたいな感じなんじゃないの？

感染症って治るんだっけ……

「……ダメだ……眠くなってきた……」

最近……泣き寝入りが多い……

ふと寝ぼけ眼で見た枕元に、いかにも古そうな懐中時計が落っこちている。

ずっしり重たいそれを持ち上げると、繋がれたチェーンがジャラリと音を立てた。

……何だこれ……

「アイツの、…か…？」

って言うかそれ以外有り得ないだろ。

裏面を見ると、アルファベットで文字が書いてある。

「…お、う、す、け」

…桜助？

そついえばアイツがコンビニでそう呼ばれてたよつな…。

……アイツ私物に名前書いてんの？

幼稚園生かよ。

……ふーん……、アイツ桜助つつんだあ……

「後でイジメてやるー……」

言っつてすぐ、俺は強烈な睡魔に襲われて、

言っつまでもなく眠った。

最悪な事に、

ネーム入り懐中時計を握ったまま。

奇立ラビリンズ（後書き）

気まぐれにキャラ紹介でも始めようかと思えます。

…不定期です。

〔名前〕

藤堂拓夜

〔性格〕

男

〔髪色〕

青がかった黒

〔瞳色〕

新月の空色（桜助談）

〔趣味〕

ノーマル（自称）

〔種類〕

吸血鬼（感染）

〔国籍〕

日本

〔武器〕

空欄

〔戦闘力〕

空欄

〔主人〕

桜助

〔愚属〕

不在

〔得意〕

リフティング（一応）

〔所属〕

無所属

〔身体的特徴〕

特に無し

まあ、一応こんな感じで。

今後の存続は不明です。

思考ループ

夢を見た。

抜け出せない息苦しさの中、何を求めるでもなく

ただ足掻いてはその手足を絡め取られる。

其れの果てなど想像もできなくて。

抱えている物を捨てれば楽になる

そんな事は分かっていた。

それでも抱え込んだそれを捨てきれない。

そして沈んでいく。

…そんな夢。

首まで沈んで泥沼にはまって

もう無理だつて。

ありつたけ叫んだとき

「つぶはッ!？」

…目が覚めた。

「は……、あ……息……」

あんなに苦しかった呼吸は正常に戻って、無意識に空気を貪っている。

汗だくのデコを抱えた。

「…らしくねえ…暗え夢」

案外それも俺の頭ンなか通りなのかも。

正直すぎる自分に嫌気がさした。

片手の中に硬くて重い物。

「…ん？」

見ると、古暈けた時計で、

英語綴りで、OSUKE。

「……そういえば寝ちまったんだっ たな」

何かこんな寝方してる自分がオトメンみたいで、すんごく最悪。

時間が気になる。

丁度良かったんで懐中時計を開く。壊しやしないかとビクビクする。

あ、開いた。

「あゝっと、3時」

…3時だと？

それって夜中の？それとも昼間の？

俺の腕時計もアナログだから判別がつかない。

寝ちまったのが夜だったから…

多分、昼間。

「…寝てばっか」

学校でもそうだったけど。

ここまで寝まくつてると寝坊助とか言う次元じゃ無えよな。

笑えねえよこの冗談。

「ウケる〜…」

眩いてはみたが誰かが応える筈なんて無い。

…なんか…寂しい。

「…アイツ…どこ行っちゃったんだろ…」

目覚めたら居ると思ってた。

それはそれは確信済みで。

…そんなの、自惚れだ

「…帰ってくるよな」

確信は嘘みたいに揺らいでくる。

もう既に、帰って来ないかもなんて嫌な想像が膨らみ始めてて。

時計を無意識に握りしめた。

帰って来ないのは今が昼間だからだ。

日が暮れたら来てくれる。

「…嫌いだからな、一応」

一応ね。

やる事も無い俺は、何も考えず真上の天井を見ていた。

コンビニでのアイツの言葉が蘇った。

…身体能力…か。

そんなもん上がんのかな？

つか…何か気づいたけど、本格的に吸血鬼な奴らって色素が薄い気がする。

日光に当たらないから？
モグラみたいなモンなのかな。

…しかも身体能力のアップに、人間の血も薄れていくって…

一世代にして進化と退化してないか…？

…何でそんなダーウィンをハブったような生き方を…。

頑張つて考えたのに。進化論。

…っにしてもこの時計古りいよな…

何でも鑑定団とかに出したら高値が付きそうな…

いつ頃のдарー…。

「…あゝあ
」

…俺も変わっちゃうのかな

それは…いやだな…。

「……言っても…俺一人じゃあどーにも」

出来ないんですよ。

どっちみちアイツが帰って来なきゃ…

「……ん？」

がばっ、と身を起こした。

「…足音だ」

頭を掠めるのはアイツのことで

嬉しいんだか嫌なんだか、複雑な気持ちになる。

…もしアイツだったら…

……どうしようか。

急いで時計を投げ捨てた。

何をするでもなくて立ち上がってアセアセしてしまっている。

分かり易い俺に大嫌い。

ギギ…って、蝶番が軋んで、

今度は焦ってベットに腰掛けた。

一体何がしたいのかも分からない。

「…あのう」

「テメエ！今更どのツラ下げて　！！…って、え？」
「ひゃあっ！！」

咄嗟に怒鳴り返してから、相手がアイツでない事を知る。

「…わ…！！わわわ…！！　起きてた！！　どうしよう」

「…は…？　誰だ？お前」

「うう…！ごめんなさいっ…！！」

そこにいたのは、背の小さい短髪の少年。

…少年？

同年かな…？

「お…起きてるとは思わなくて…！」

「…いやいや、寝てたら入っても良いってのかよ」

ついッッこんだ。

「…そ、そう言う訳じゃないです。…そ、そんなですよね、本
当に…」

…あれ、何だか本気^{マジ}。

「…何か…どうしたの、お前。ガッコーサボって真っ昼間の肝試し
？」

確かに地震になんかひとたまりもないビルだけど。

悪かったね。
人住んでて。

「…ち…！違います！ ……学校には…行ってない、です…」

…プータローですか？

高校浪人？それともまだ中学生なのかな。

「……あの……僕……悠二さんに、拓夜さんの様子を偵察に行けって……」

「……偵察？ってエと……」

ユージって誰だろう。

……あれ？これって結構由々しき事態って奴なんじゃないの？

うーん……叱れない。

「あ……、言っちゃった……」

わあぁ可愛い。

……どっしりしよう叱れない。

「……なに、偵察？ 何だってそんな事」

「……あ、の……。桜助さんが……」

「桜助！？」

過剰反応している俺がいた。

「…あ…はい。…それで…あの…悠二さんに行って…」

「悠二って誰？」

知らない人間がいっぱい登場すぎて状況が読めない。

それに、俺は少し苛立っていて、

「誰だよ、そいつ」

「あ…おんごのあ主様です。僕の…」

違う。

「そうじゃない。悠二って奴はアイツの何だ」

「…し、親友…だって言っていました」

親友？

……友達の所で遊んでるわけ？アイツ

俺のことはほったらかして？

「で？ お前に頼んだんだ、アイツが」

「ち、違います…、僕にお願いしたのは悠二さんです」

「『親友』だろ？」

何だろう、コイツが悪い訳じゃないのに。

どうしようもなく苛々する。

「…あのう…誤解してません…か？」

はあ？

そう、最悪の態度で言ってから後悔した。

「桜助さんと悠二さんはそう言う関係じゃない…です、」

何でそんな事言えんの？

「…その……」

そう言っつて、そいつは顔を赤らめた。

「…ゆ…っ悠二さんが好きなのは…ぼ…僕、なので……」

…うん？

ああ、うんうんうん。

……なるほどね。

「……な……なので……、桜助さんと悠二さんが、う……浮気とかは……、
ナイ、です……」

「あ……いや、うん。何か……ごめんね？俺ちよつと勘違いしてた
みたいで……」

自分の笑顔が張りぼてなのが分かる。

だってアレでしょ？

…悠二って男でしょ？

……そう言うことなんでしょ。

「…っでも！」

目の前の少年は勢い良く顔を上げた。

「桜助さんも拓夜さんが大好きですよ！！！」

…は？

「心配してました！何してるんだろっつて。
られないって言って、…僕が来たんです」

居ても立っても居

ちゅっ…っ。

嘘、しそっしそっしそっしそっし

顔が熱くなつていくのが分かる。

制御なんか出来ない。

…馬鹿野郎

収まれよ…俺　！！

今赤くなつたりなんかしたら…っ！！

「反則だ…」

「は…はい？」

「…ばかやるー…」

どづしたらいい？

上辺だけの罵倒しかできない。

「…っそんなに心配なら!」

俺は少年に向き直った。

「そんなに心配だっ言うんなら自分で来やがれってんだよ!」

明らかにこいつは困っている。

…けど、無理。

「何で分かんねえの!？ 俺が本気で嫌ってるわけ無えじゃん!」

……そうだったのかな。

きつと、

そうだったから、嘘くさかったんだろっな。

「俺を連れていけ」

気が付いたらそう言っていた。

「直接話してやる!」

「…っ、連れて行きますか…」

「ああ行ってやるよ!言っただ話してやるよ!」

…俺は後悔することになる。

だって話す事なんて無いんだもん。

喧嘩スレイヴ（前書き）

桜助が情け無いです。

そして悠二がお兄さんです。

喧嘩スレイヴ

「…ついに来ちゃった」

こんなにドア開けんのを躊躇ったの、初めてだ。

何だって俺はあんな事ほざいちゃまったんだらうか。

…勢いだけで喋るからだ…俺の馬鹿。

「な、今帰りたいてって言うても…ダメ？」

「…え…！？ い、今更ですか」

今までの会話でこいつの名前が優太だという事が分かった。

「…いや、冷静になればなるほど後悔しか募らないって言うか…」

「だ、大丈夫ですよ多分」

ここに着くまでに色んな事をグチャグチャ考え過ぎて、陽向に怯えることすら出来なかった。

この優太って奴も一応日陰を選びはしていたが、それほど拘こたわってはいないようだった。

今のところ何の支障も出ていない所を見ると、俺には問題無いようだ。

「…じゃ、あの…開けますからね？」

「え、ちょ 待っ」

俺が居たとこのドアに負けず劣らずボロい金属のドア。

が、耳障りな音で

…開いた。

「悠二さん…？ 今帰りましたー…」

小声で優太が言ってから、目を丸くした。

「…あれあれ、起きてたんですかあ？」

「桜助が寝かしてくんねえんだ」

…や、…やっぱりいるんだ…。

「……………優太？」

その声に、戦慄にも似た緊張が走る。

このどっかの俳優みたいな声はアイツしか居ない。

恐る恐る上げた視線が

「連れてきたのか、其奴^{そいつ}」

ぴったり、合致した

こいつ笑ってやがった。

「……っっ」

どっしりおっす。どっしりしたらいい？

「わざわざ自分から来るとはな」

「……っ違う！……」

…何がだよ。

わざわざ自分から行ったくせに。

「一晩も留守番が出来ないとは思わなかったな。寂しくて来てしまったのか？」

「ば、ばっかじゃねーの！！ 何で寂しがらなくちゃいけねんだ
よ……」

寂しかったくせに。

「…あの、桜助さん。拓夜さんがあなたに言いたい事があるって」

「ちえすとーおー!!!」

いつの間に知らない誰かに寄り添っていた優太に右ストレート。

ぱしん!

その誰かに止められたが、それ所じゃない。

432

「ゆ…ゆゆ、ゆーた君？ そーゆー事言っちゃう訳？ おまえって奴は」

緊張と焦りと驚きで変な汗が滲む。

「だ、だって…『行って話してやる』って言ってたから」

言ってたよな、俺。

「だけどさあー、そう言うのは何っーか俺が覚悟決めてからじゃないっ?」

「覚悟って…何の覚悟ですか？」

覚悟…か

…何だろう。

だって言うことなんか無いのに。

何を言おうとしてたんだ？

何に覚悟決めようとしてたんだ？

「よう拓夜」

「？」

俺の振り下ろした拳を受け止めた人が、笑う。

「会いたかったんだ。どんな奴か。…お前が拓夜だろ？」

右手を離し、ニカッと笑う。

これがアイツの友達？

「あ、あー…」

何と答えたら良いのか分からなかった。

「…ってか、お前らホント合わねーな」

そう言う2人はべったりだ。

桜助の友達だった話の…悠二だかなんだか。は、アイツと違って現代人っぽい感じがした。

髪もブリーチじゃないし、放置したロングなんかでもない。

赤気味のブラウンの短髪をワックスか何かでセットしている。

ピアスや指輪とアクセサリも何気に身に付けていて、その時点でファッションって物に無頓着そうなアイツとは大違い。

レザーのジャケットに黒のタイト気味なズボン、裾はブーツイン。

…で、無意味なベルトやチェーンが多い。

…よく言えばロック調。…悪く言うと中2病…なのか？

「……あの、えっと」

訊くまでも無さそうな事だが、こんな人が …… いや、悪い意味ではなくて。

こんな普通そうな人が吸血鬼だなんて思えない。

「…悠二さんもヴァンパイアなんですか？」

俺が言うつと可笑しそくに悠二さんが笑う。

「何で？威厳無いから？」

「あ、いや、違います。何っつーか、ヴァンパイアって皆あんなだと」

「あんなんとは何だ」

「あんなんばっかじゃ精神保たないって。アイツ俺等ん中でも異質なんだぜ？」

「悠二、お前まで言うか」

「そうなんすかー…。俺はてっきりああいごとんでもないのばっかだ…」

「お前、とんでも無いとか」

「まあ…初めてがアレじゃあなあ…」

どうしよ、この人とは仲良くなれる気がする。

「髪とか 染めてんですか？」

「ん？ ああ、ほっとくと白髪になっちゃっから」

…へ？

「し、白髪？」

「俺のレベルじゃ中途半端に色抜けててさ、格好悪いから染めてみた」

…色、抜けるのか。

あれ？

じゃあ…何であのベットでふんぞり返ってるのは金髪なんだ？

「んー？ アイツ？」

視線で言わんとすることを察された。

「アイツは」

そこで悠二さんはアイツをチラリと見て、言葉を区切った。

「…いや、…やっぱ本人に訊け」

「…何で」

俺も視線を向けてみるが、目線が合った瞬間に目を逸らされた。

…「」のくそ野郎が

「…つの野郎…」

…くっそ、何でコイツはこんなに神経を逆撫でる天才なんだよ。

無駄に腹立たしい。

「…ホント仲悪いいな、お前等は」

仲良くなった事なんて無かったと思う。

俺は最初からコイツが嫌いだった。

…きらい…

「…そうだ、その拓夜」

「この拓夜以外に誰か居るかよ、拓夜が」

「せつかく私のために来たのに残念だが今は帰れないぞ」

「はあ？お前の為じゃねえし。つれて帰ろうとか思っても居な」

上げた視線の先にはにやついたヤツが居て。

意地っ張りな俺の頭は一気に沸き上がった。

「…つてめエ　！！　何だよその顔は！！　何が言いてエ！！」

「いや？　素直さの無い奴だと思ってな」

すなおさ？

お前相手に成れるかなモン。

「…っメエなア…。　人に言う前に自分を省みてはいかがでしょうかねえ？」

「私のことを言っているのか？　…ふん、私は素直だぞ」

「確かに素直かもな！」

言いたい放題だもんな。

「じゃあ遠慮とか覚えるよ！…何でもズカズカ言う事は素直とは違
うぞ」

「私は同じ事をお前にも言いたいがな」

…はい？

…俺はある程度考慮してる……のかな…。

「気を使えなどとよくもその口で言えたな。その無自覚さには敬意すら表するぞ」

「テメエ…！ 大人しくしてりゃあ好き放題 …！」

「む、また喧嘩か？ 全く、そんな有り余る体力があるなら体でも鍛えたらどうだ？ 今よりは増しに成るだろう」

「ふざけんな…！」

あのスカしたツラを一発…

…いや、取り敢えず気の済むまでぶん殴ってやろうと胸ぐらを掴み、拳を振り下ろす。

スカ。軽く避けられた。死ね。

ヤツが妖美に笑う。…と、思ったら

「だ…わっ!？」

振り下ろした腕と胸ぐらを掴んだ左手首を掴まれ、かと思つと世界が反転する。

耳元でスプリングが激しく軋み、背中に柔らかい感触があった。

「な…何…」

目を開けると真上から見下ろすアイツ。

両手はがっちり掴まれている。

腹の辺りが重たいのでこれはつまり…乗っかられる。

「だから鍛えろと言っただんだ」

再び頭が沸騰した。

「つめエ…!!」

膝を振り上げアイツの背中に膝を入れ

られない。あっさり受け止められた。

諦めないぞ俺は。

開いた左手でヤツの後頭部…正式には後頭部の髪を掴む。

初めてコイツがハツとしたような顔をした。気分が良い。

そして思い切り腹筋で起き上がり、

「ッジャア!」

頭突き。

そればかりは予測できなかったらしく…と、言うよりは両手が塞がっていて回避出来なかったようで、見事に額に直撃した。

……平等に俺も痛いんだけどね。

ただどこの際コイツにダメージを与えられれば何でも良い。例え

「ッつあ つぐ……」

「っ……！ ……貴様……頭突きとは馬鹿か。どこなら痛くないかも知らぬくせに」

……俺のダメージの方がでかかったとしても。

「ふ、弱い割に私に挑むからだ愚か者」

負けない。負けないぞ。

そうだ、これをひっくり返し

「ストップ……！」

「うひっ！？」

悠二さんだった。

一瞬怯んだ俺をヤツは再びベットに押し付ける。

「ぎゃっ!」

「…全く、その無謀さは直した方が良い。命が足りんぞ」

「…ふざけんな…!!…つてか…離せ…!!」

「ストップ!! 聞こえてんのかこの野郎!!」

「でっ!!」

「…!!」

各自一発ずつ殴られた。

「…何だよ、お前らずっとそんな調子なのか?」

…返す言葉が無かった。

「…桜助。そんなんじゃ、そりゃあ拓夜も怒るよ…」

は?何で?って顔でヤツが悠二さんを見上げる。

「お前挑発しかしてねえぜ。拓夜も十分ケンカっ早いけど」

今度は俺が見上げる番だった。

「…ほんと反り合わねーなー…お前ら…」

呆れたように溜め息をつかれる。

…それってさあ…。
それって、合わないって事でしょ…。

再び俺はヤツ…桜助を見上げる。

桜助は俯いて何やら考え込んでいた。

あれ、この体勢って…

クールダウンした俺は、今更な状況にやっと気付く。

…この体勢って、…うわ…これってこれって…。

「……こ、これは…」

「…む？何を赤くなっているのだ」

「は、は、離せよ…」

目を丸くする桜助。誰の所為だと思っただよ白々しい。

「…………お前」

神妙な声で呼ばれて、直視出来ないながらも横目で顔を見上げた。

「…いやらしい奴だな」

「うるせエー！！ 誰の所為だ！！！！！」

も…何なんだコイツ。

「…いいから退けよ！！ つかこの手を離せッ！！！」

暴れてみるが何気に力が強く、びくともしない。

「嫌だ」

「はあ！？」

「手を離したらまた私に襲いかかってくるだろうが。」

…うわー。確かにぶん殴ってやるつもりだけど。

「それとも、私を一発殴ればお前は気が済むのか？ ならば構わないが」

いや、それ以前に退こうよそこを。

この体勢じゃあその台詞だったただの被虐趣味者ですよ。

……しかし、退いてくれてなおかつ通常なら無理臭い一発を許してくれるなら ……結構良い話じゃね？

「……わーったよ。一発で済ますからとりあえずそこを退け」

「そうか。なら退いてやるっ」

「……ちょ、待てよ桜助。それ本気で言ってるのかよ？」

悠二さんが心配そうに止めに入る。

……そーだよな、そんな上手く行くわけ無いって。

「それで納得するならそれ位訳ない。こいつに後々まで騒がれるのも面倒だ」

あれ？…ウソ。

………コイツ、以外にバカなんじゃねえの？

あれ、チヨロいぞ？

ウソウソ、ほんとに？

桜助はすんなり跨っていた俺の上から退いて、変わりにベットの
上に腰掛ける。

自由になった体を起こし、飛び上がりそうに嬉しいのを堪えなが
ら冷静を装う。

「身構えんじゃねえぞ」

「私はそんなにみみっちい男ではない」

格好を付けているのかはたまた本物の天然なのか、静かに目を閉
じて言う。

俺は、大きく深呼吸して、

げはははははー！！

油断したな勇者よー！！

この時を待っていたぜ！！

この時とばかりに、俺は桜助の鳩尾を思いっ切り殴り上げた。

「は…！？ つぐ、あ…ッ…！」

…あ、あれ？

…うそ…マジで…？

コイツの事だからメチャメチャ腹筋固めてると思ったのに。

…すごく…完全に入った…。

さば…び…し…し…。

ぐらりと倒れかかった上体。

と、突然腕が伸び俺の肩を掴む。

……も、持ち堪えた……。

「……き……様……！！」

呻くような声が絞り出される。

それは、俺にとって冗談なんかじゃない声。

「誰……っが……！！ 急、所を……狙っ、ても……良いと言った……！」

すげー、喋れてる。……とか思う余裕なんか無くて、

桜助の苦痛の中から滲み出る激怒の感情が、俺のいつだかの意味不明な心理を呼び起こす。

それは、底知れない 恐怖。

「……いっ、いじめ……なれこ」

口が勝手に言っていた。

それ位、…理由もわからずに怖かったのだ。

思わず手を引き、後退りをしていた。

「…貴様！！」

「…つごめんなさい」

語尾が弱くなってしまう。

そうだ、これはコイツと初めて会話したとき起きた。

命令に逆らったとき。

無条件に、理性とか理論とかそんな表面的な事を超越しての恐怖。

あの時は直ぐに冷静になれた。

でも、今は

現在進行形で発される怒りが怖くて、まるで

奴隷の主人に対する恐怖の様な

これは、怯え？

「 っのー! 」

両足で挟むように捕まえられ、ベットに引き戻され再び倒される。

さっきの様に両手首を捕まれて。

「 ひっ
」

引き撃った様な声が出た。

…怖い、怖い…止めて…。
「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。」

…許してください。

「お前な」

「桜助!?!」

誰かがびしゃりと言った。

「止めるよお前!」

そう言いながらこの人を引き剥がす。

「……そう本気では無いのだが」

「知ってるよ。別に怖くもないし。……でもちよっとマジだっただろ」

恐る恐る身を起す。

恐怖は少しずつ遠のいていき、変わりには疑問符が残る。

「では何故」

「なぜ？ 分かんなかったのかよ。今カンペキ怯えてただろうが」

まだ指が小刻みに震えている。それを強く握り締め、そんな原因を考える。

「わかってんのか？ お前ぐらいすごい奴になると暗示の効果も半端じゃないんだからな」

アンジ？

何となく聞こえた単語の意味。

…アンジって…あの暗示？

「……お前はもう少し自覚を持て。もうヴァンパイアの階段なんか登り詰めてるんだから。お前は俺達とは違うんだし」

…暗示の効果？

…???

「頭冷やせ馬鹿野郎」

そう言って悠二さんが桜助をベットに突き飛ばした。

溜め息をつきながらこっちへ来る。

「お前、拓夜」

「…なんすか」

手を引っ張られ立たされた。

「…お前、何も知らされてないんじゃないのか？」

…何の話だろう。

基本的に何も知らないから何の事だかわからない。

「まったく、とんだご主人様だな。厄介で自覚も無え」

「悠二、私は、っ！」

「お前は黙ってる」

悠二さんは桜助の顔をベットに押し付け、黙らせた。

…すげー手練れてる。

「本当は主人に教わるのがベストなんだけど…この調子じゃ無理そうだからな」

「…ちよ、ちよっと待て！！ 悠二」

「あ？ 俺が待ったらお前はどつするって？」

珍しく焦ったようなヤツの声。

「大丈夫だ！ 私が一から十まで」

「教えてなかったからこうなってんだろ」

…友達って本当なんだ…。

「なあ、桜助。何でなんにも教えなかったんだよ。お前の『師匠』はそうだったか？」

「……違った」

話が読めない。

そんなに重大な事か？ 教えるって 何のことだ。

「…もういい。しょうがねえ、このへっぽこ主人サマの変わりに俺が基礎知識ぐらいは教えてやるよ。こんなの見てらんねえ」

…もしかして同情されてる？

「 待て。 … 待て、 悠二」

桜助が悠二さんを止めた。

「 私が言う。 … もう分かった」

「 本当に？」

「 …… 分かってはいたんだ。 いつか言わねばならないと」

それを聞いて納得したのか、 悠二さんが身を引いた。

ベットにうつ伏せに倒れていた桜助が起き上がる。

その目はいつもの百倍くらい真剣で、

綺麗だった

何でだろう、緊張する。

ふと突っ込んだポケット。指先に硬い物が当たる。

それはこいつの懐中時計だ。

…持ってきちゃった。

…渡すタイミング完全に逃した。

綺麗な唇に魅入られたように凝視する。

何故か、その唇が開かれるのが

少し、怖くもあつたから。

喧嘩スレイヴ(後書き)

〔名前〕

藤堂直夜

〔性格〕

頭が良く素直 強引

〔髪色〕

淡茶

〔瞳色〕

濃茶

〔趣味〕

ノーマル？

〔種類〕

人間

〔国籍〕

日本

〔武器〕

空欄

〔戦闘力〕

兄と五分程度(自称)

〔主人〕

空欄

〔愚属〕

空欄

〔得意〕

柔道

〔所属〕

藤堂家次男

〔身体的特徴〕

取り立てて無し

∴特に需要は無いプロフィールでした。

御話バスタイム

そもそも、吸血鬼には階級が在るそうだ。

俺みたいに感染した場合、噛まれてから時間が経つごとにヴァンパイアの特徴が濃くなっていく。

…っていうのは前にぼんやり聞いた。

その後。それについての詳しい説明。

そのヴァンパイアの血が濃くなる過程で、どうやら本当に進化しちゃうらしい。

日光に弱くなり銀にアレルギーができ、吸血量が増え、徐々に血液以外では栄養が取れなくなる。

身体的な変化は、身体の仕組みが変わってくるために人間とは比べ物にならない身体能力を手に入れる。

その一環で同族を匂いで感知できるようにも成るらしい。

外見的には、日光を浴びないためか色素が抜けてアルビノになってく。

「…ちょ、ちょいストップ！」

「何だ」

カコーン、と、どこかで桶の落ちる音がした。

「お前はアルビノじゃ無えじゃん。何でだよ」

「……」

「な、何で黙るんだよ」

この場に似つかわしくない溜め息をついて、桜助が顔を濯いだ。

…俺はなるべく下を見ないように奴を見る。

そもそも何で俺がそんな事に苦心しなくちゃいけないかというところ…

…ここが銭湯だからだ。

そして富士をバックに湯船に浸かっているからだ。

「ヴァンパイアには、その種を感染させて繁殖する感染種と、他の動物の様に交配をして繁殖する純血種がある」

…うん？

何か急に難しいぞ？

「な、何だつて？」

「だから、お前のように噛まれたからヴァンパイアになる種類と、生まれながらにヴァンパイアという種類がある」

…ああ、成る程。

血統とエセつて事か。

…二種類あるんだ。吸血鬼って。

「純血のヴァンパイアは種を感染させる事は出来ない。…それを踏
まえた上での話だ」

「ああ」

「私の師匠は二種の混血だった」

「…し、師匠って？」

「お前で言う私の立場だ」

「…うーんと…、つまり噛み付いて感染させやがった野郎の事？」

「その師匠に噛まれたのが私だ」

「お前じゃあクォーターなの？」

「…クォーターとは何だ…。まあ…、確かにそうなるか」

「ふーん？…で？」

「純血は生まれながらに色素が薄い。また、感染よりもヴァンパイアの要素が濃い。
金の瞳も暗闇に順応したためだ」

…猫みたいなか。

「師匠のその特性を強く受け継いだ私もまた、こんな外見と言っ
訳だ」

…ふーん…。

そう言えばコンビニで会った奴も金髪の間眼だったかな。

「じゃあ純血ってエのは金髪で見分けんのか？」

「いや。他にも特徴はあるぞ。耳は鋭っているし、瞳が二日月形だ。
それと」

おもむろに桜助が指を突き付けた。

「…な、何だよ」

「爪が鋭く鋭ってくる」

言われてみれば確かに。整えたようにキリツと鋭っていた。

「引っ搔かれたら怪我しそう。」

俺は自分の爪を見てみた。

若干伸び気味で、無頓着に放置された爪。

「俺もそうなるかな」

「ならないだろうな。クォーターの次は既に原型が残っているとは
言えないだろう。普通に白髪だ」

…そうか。白髪か。

…いや、別に良いけど。

「…そうだ、愚属って何だ？ 何であのコンビニで会った野郎は俺
が邪魔とか何とかほざいてやがったんだ？」

「 愚属とは自分が噛んで仲間にしたヴァンパイアを主人側から見
た呼び方だ。つまり私の愚属はお前だということになる」

ほづほづ。それでやたら連呼してるのか。

「コンビニで会ったのは純血のヴァンパイアだ。お前が邪魔だと言
うのは私をあちら側に付けたいからだろうが… 行きはしない」

…行くって…

…そうか。コイツはクォーターで、ハーフの感染主の子供みたい
なモンで、

…だから、仲間に付けたい…のか？

…いつとしては…どうなのかな。

何で行かないんだろう。

「あの純血の左胸に、薔薇の刺青があったらどう？」

…あった。幼げな外見にそぐわない、でっかいバラのタワー。

…ちょっとかっこいいと思った。

「あれは私達 いや、お前達感染のヴァンパイアを滅ぼそうとする者達の紋章…とでも言うべきか」

「は…？　なな何でそんな」

「純血種のヴァンパイアは絶滅に瀕している。もう大して残ってはいないだろう。　そんな奴らにとって感染の亜種ヴァンパイアは邪魔な存在だ」

邪魔…って…。

「…何でだよ。何が邪魔なんだ？」

「繁栄にそれ程支障はない。ただ 思想が違う」

思想…。

宗教や経済の主義が違うと国家間で争ったりする。…よな。

アメリカとソ連の冷戦とか。

…そんな感じなのかな。

「感染種はこうして、愚属の血を吸血し糧として生活する。人間との共存を前提とした集団、社会を種として作っていると見え

るだろう」

多くを救うには小さきを見捨てよ…とか何とかって聞いたことがある。マンガかな。

感染のヤツらは、そういう方式で生き残る戦略を組んだのか。

純血の進化は、生き残るのに適応しなかった。
だから、絶滅に瀕した。

確かにどんどん繁殖してどんどん人間を狩ったら…人間なんてすぐに滅びてしまうだろう。

「だが純血種にヴァンパイアを感染させる能力は無い。便利に食料をストックする術がないために 人を狩る」

… 何だって？

人を…狩る？

「そんな両者の思想が合う筈も無いだろう」

…合わない、…って…。

…まあ、そうだろうな。

「こうして戦争になるのは 不可抗力というものだろう」

「…せつ！？ 戦争！？」

な、何だそれ！！
限り無く初耳だぞ！

「今 純血が私達に戦争を仕掛けている。…回避は不能だ」

「…か、回避不能って じゃあ…！じゃあ俺はどうなるんだよ…！」
正直戦争するのがどんな物なのか、平成不況生まれの俺には分からない。

だが、少なくともともんでもなく危険な事なんだってのは分かる。

「…ああ、心配するな。私や他の上級ヴァンパイアが正面切って戦い、何らかの奇跡で勝てば全滅されはしない」

「奇跡って言うっちゃってる時点で全滅決定じゃん…！」

「…私は裏切らないぞ」

…え？

「私がこちらを裏切る事は無いと言ったのだ。私だけが戦いを避けることは簡単だ。」

しかし、それで一体どうしようと言っただ」

…あつちの奴はこいつを必要としている。

行つて欲しくは…無いと思う。

「…何で行かないんだよ？」

これは、ただの知的好奇心。

何でそこまで断固として断るのか。

その強い意志の源は何なのか。

…何だか、俺とかの世代には無い強さを感じて。

気になった。

「…か、簡単な事だ」

「うええ！お前が照れるかあ！？」

「私、は」

風呂の所為か、照れてるのか。若干頬を染めて咳払いをした。

「いや。別に大した理由など」

「あるだろ！絶対ある！！」

バレバレなんだよ、いつだって。

何でそう分かり易いかな。

カタい奴演じてる癖に案外ピュアなんだから。

「無い。無いと言ったら無いのだ！ 逆上せた、もう出るからな！」

く。
隠もしないで突然立ち上がり、色々丸出しでずかずか歩いてい

俺も後を追った。

「なあ、何なんだよー。気になるだろ？ 言い掛けたなら最後まで
言えよー」

「言い掛けたがもう終わりだ。その話は終わった。終了、もう話さ
ん！」

ちなみに今は夜だ。日が暮れてすぐここに来た。

それまで寝てたので結構元気。

「なああ〜!!」

「五月蠅い奴だな。良いからお前は黙っている！」

怒ったように向き直る、

ヤツの身体が…すごく、格好いい。

…何つうか…主張しない筋肉で締まってて、すごく綺麗。

「ふん、そうして黙って居れば良いのだ」

不服ながら裸に見とれていた俺を、どうやら言う事を聞いたと勘違いしたらしい。

……ジジイばっかの銭湯の風景には相当似合わない白い肌が、黒服に飲まれていく。

俺もいつまでも素っ裸で居るわけにはいかない。

着替えを持ってこなかったので着てきた服を着た。

…それはコイツも同じだが。

とつとつ着替えて番台を通り過ぎた… 所で、知らない人が桜助を呼び止めた。

「おーすけ〜！おっひさー」

…呼んだのは、更に銭湯に似つかわしくない、ピンクゴスの女。
白とベビーピンクの畳んだパラソルを持っている。

「…。」

かなり嫌そうな顔で、桜助はその女を見る。

「…え、誰？」

誰だコイツ。

髪と肌が完全に白く、瞳が純粹な赤。

多分、感染ヴァンパイア…？

「小梅…、…今度は何なのだ…その格好は…」

桜助がドン引きで言う。

こいつが引いてる所なんて始めて見た。

「小梅じゃなくて今はプラムとお呼び…！」

…え、え〜つと…？

「…それで、その恥曝しは何だ」

「恥曝しじゃあ無いしい〜。これがあ、今の、ト・レ・ン・ド！」

うぜっ。

つか…何でギャル語？ それにさ、別に流行ってないし、ゴスロリ。

「…いい加減にしたらどうだ。…見ていて痛々しい」

それは確かに、イタい。

「イタくない！これがカワイイんだもん！！」

…かわいくないとは言わないけど。

「可憐ではない。けつたいだ」

「けつたいじゃない！カワイイの！！」

「……………。…確か…、20年前も同じ事を言っていなかったか…？」

「年増扱いないで頂戴！！ アタイはオバサンじゃ無いんだからね！！！」

アタイ…？

「誰も年増だとは言っていない」

「…あら、ほんと？ …じゃ、なくて。 …はあ…」

溜め息をついて、女が顔を上げた。

「やっぱり難しいわねえ、…現代語は」

「うわ、ギャル語じゃない！」

何だよこの不審者二号は。

ちなみに一号は桜助な。

「あらまあ、だれかしら？」

ピンクゴスは俺にずっと近づいた。

見た目は、きれいな、桜助と同じ年くらいのお姉さんだけど、中身は…結構…古い。

「それは私の愚属だ」

「…アンタが愚属作るなんて珍しいわね。赤い雪が降るんじゃないの？」

「失礼な。少なくともその文明開化時代に酷似した服よりは幾分マシな現象だ」

「ひどいわね、誰がちぐはぐ日本人よ。私はあの時だって時代の最先端を行っていたんだからね」

「…あの時も小梅はけっただったな…」

…な、何か…すごく次元の違う話をしてる気がする…。

文明開化って…あの文明開化でしょ？

本気？…冗談？

ってか…お前ら幾つだよ…。

「ねエ、桜助の愚属さん？ アタイの格好、どう思いますかねえ？」

「…え、…え〜っと…ああ、ハイ…。……………良いんじゃないっすか…。」

悪くはない。とっても可愛い。

…けど、…口調に戸惑う。

俺の言葉に、小梅と呼ばれた人はにっこり笑った。

「でしょう？かとは思いましたわあ。…なーんて！」

何か一人で盛り上がってるし。

「それで！どうしたの？桜助、こんな所に現れて！」

何なんだこのハイテンションは。

「…拓夜と大事な話をしに来た。もう帰る所だから邪魔するな」

「重ね重ねひどいわね！別にアンタの邪魔をしに来た訳じゃないわ」

「結果的に邪魔なんだが」

…何だろう。何で2人共こんなに中良いんだ？

…何か…気に入らねえ…。

「でも そうねエ。アタイがアンタらの乳繰り合ってる時間を邪魔しちゃう無粋かな？」

ちちくる……？

……って、何？

「……な、何だ……、人をからかうな」

「な、なぜ照れる！？」

ちちくるってそういう意味なのか？

「お熱くて羨ましいですわあ。それじゃあねー」

女湯の暖簾のれんの向こうに消えていく小梅さんを、桜助が厄介そうに見送る。

「……な、……あの人誰？」

面倒そうに、ヤツは長い濡れた金髪を払った。

「……一応、旧友だ」

「いちおうって……」

バリバリ友達っばかったんだけど。

でもまあ…悠二さんといいあの小梅って人といい…案外友達居るんだな。

あんな性格だから孤独な奴かと思ったのに。

類は友を呼ぶって言うのか、変人が多いと思うけど。

…俺も友達欲しいなー。ヴァンパイアの。

優太は友達かな…。

「何を呆けている。行くぞ」

「あ、ああ…」

桜助の後を追いながら、ケータイを開いた。

8時ちよい。だいぶ長風呂だったらしい。

…あ、電池が、

『充電してください』

「…切れた……」

「？」

桜助が画面を覗き込む。

「…真っ暗の画面に向かって、一体何をしているのだ」

「たった今真っ暗になったんだよ」

…最悪。

帰りにコンビニ寄って充電器買わなきゃ。

「俺コンビニ寄るけど」

「私は帰るぞ。…むっ？」

何かに気付いたように、コートの上から全身をぺたぺたする。

「…無い」

顔を真っ青にして …いや、暗くて顔色なんざ分かんねえけど、とにかく形相を変えて一言呟いた。

かと思ったら急にダッシュで走り出した。

「…私は悠二の所へ行く！！ 買い物が終わったら帰っている！」

「…え？ちよ、待っ…！何が…！！」

言い捨てて走り去ってしまった。

「…何なんだ、アレ」

忘れ物か？

まあ…良いけど。

……懐中時計なら俺が持つてるぞ？

…何か違うもん忘れたのかな。分かんないけど。

よく分からないが仕方ない。充電しなきゃケータイは使えないし。

…と、言う訳で、俺は単独で廃ビル近くのコンビニに向かった。

…段々と、

…あの、不審者一号にして変質者の、

桜助という名の金髪の吸血鬼に対する嫌悪が、淡く薄れてくる事に

小さな焦りすら感じながら。

微告白 歴史

「つ悠二!!」

私は友達の部屋 いや、友達の住み付いている部屋の扉を、思い切り開け放った。

「…な…何だよ、血相変えて。拓夜と何かあったのか？」

「私の時計を知らないか！」

あれはとても大切な物だ。無くすわけにはいかない。

大切な割に忙しい時などはすぐに忘れてこられる可哀想な代物である。

探すのは結構慣れた。

行動範囲はここと銭湯と家しかない。

気付いたのが銭湯なら、二こと家どちらかに有るはずである。

「は？ 時計って…クリステイさんから貰ったアレか？ あの名前入りの…」

「うるさい」

「アレ、お前家に忘れたとか言ってなかったか？ だから拓夜に見られちゃうかも。いやあ〜ん。って」

…そう言われれば、確かに。

ここでそんな会話をした記憶がある。

在処あじかが分かって良かった。

「……そうか、そうだったな。あと私はいやあ〜んとは言っていないぞ」

悠二の言い分が癪に障るが今日の所は許してやろう。

そつだ。そついえばそつだったのだ。…一体何をとちっていたのか。

…なんだかこれは恥ずべきだな。
…汚点というより、…素直に恥ずかしい。

「あの後どうした？拓夜とは和解したか？」

銭湯での事か。

「む。嘘のように素直だったぞ。可愛い奴め」

「…アレが可愛い、…ねえ…。…まあ、人の好みは色々だしねえ」

「何だお前、何が言いたい。お前の趣味とて理解出来んぞ」

「何だって！？ 優太はこんなに可愛いのに！！」

…くつつくな。鬱陶しい。

「…んで、何を教えてあげたの、裸の付き合いで」

…とりあえずは、満遍なく全体的に。

私は 出来るなら教えたくはなかったのだ。
もつと彼奴が落ち込むと思っていたから。

しかし意外と平気だったのは 私が思う程、
…彼奴は馬鹿では無いのかも知れない。

とつくに整理など付いている のかも。

…しかし、言わなかった事もある。

「…ヴァンパイアが老いないと言う事以外は、ざっと教えた。漏れがあるかとは思うが」

…いや、言えなかったのだ。

『私』なのに、臆病だったから。

「…やっぱり、言わなかったか…」

随分と知ったような口を叩く悠二を、軽く睨み付けた。

「…いや、そういう意味で言ったんじゃ無えよ。俺も暫くは優太に

「言えなかったからさ」

初めて耳にしたと、隣の愚属が顔を上げた。

「そうなんですか？」

「あゝ…。…ああ、…そうなの。意気地無しでしょ、俺。チキンなの」

「いえ、違います！きっと、悠二さんは優しいので僕に言えなかったんです」

「…いや…本当にさ…、怖いんだよ。…それ言うの」

珍しく神妙な顔をして、悠二が言った。

「お前とかさ その、自分の愚属？…とかが、人間をやめる事になったのは、本人が望もうが望ままいが主人の責任なんだよ。」

…老いないのも同じ。

世間が変わっていく中、自分の老化は酷く緩慢で 家族も友達も死んでいく。それすらいつか忘れて、…自分はどんどん化け物に変わっていく。

…それでも、死ねない」

長々語ったが、優太も私も口は挟まなかった。

「分かってるんだ。愛して配下に置いた奴がどうして、どうやって苦しむのか。」

「言わなくちゃいけない、分かってる。…でも言えない、こんな、…こんな弱虫なんだよ」

最終的には自嘲だったのかも知れない。

悠二は皮肉気に笑った。

私は浮き世という物に未練は無かった。

…だが、それでも少しばかり辛く感じた。

友人と呼ぶような者は居なかった。それでも、知人や顔見知りとの老化の差が激しい。

年号が変わり、文化が変わり、人間が変わり、常識も言葉も変わっていく。

まるで時間から切り離されてしまったような錯覚。

誕生日など直ぐに祝わなくなり、時間の感覚が麻痺して壊れて、自分の年を数えるにも計算が必要になる。

…それと同じ道を辿ると知りながら、そんな残酷な宣告 どうして出来ようか。

「悠二、生まれはいつだったか」

「昭和16年、。…第二次世界大戦が始まった2年後に、糸川裕二が生まれたよ」

悠二の本名は糸川裕二。
平成に年号が変わったときに字を変え、名字を伏せた。

私は幾ら経っても…過去にしがみついて変えられないままなのが。

「お前は？優太」

悠二が話を振った。

「ぼ、僕ですか？…僕は平成5年です」

今が平成21年…だったか…、だから、18か。

「随分若いな」

「やだもー優太可愛い」

「…見た目には全然似合わないんですけどね…」

確かに…18の男には見えない。

だがそれは悠二も私も同じだ。

ゆうに150を越した悠二も、外見は二十歳位に見えるし、私も多分二十代には見えるだろう。

つまり、こういう事だ。

外見年齢と精神年齢がずれていく。

そして、分からなくなる。

自分が幾つなのか。幾つであるべきなのか。

「桜助は？」

「…は？」

「は？じゃ無えよ。この流れはお前もカミングアウトだろうが」

「…いや、何も気にする事はない」

「はあー？…んだよ一番年寄りなの気にしてんのか？」

ビクッ！と、目の下が引き攣るのが分かった。

「…年寄りじゃあない。ベテランなんだ。」

「…あれ、言っちゃったな。こりゃあ大失言だー」

軽快に笑う悠二だったが、その裏など見え透いている。

…お前は確信犯だ。

「誕生日は忘れた。以上」

「嘘だ。絶対嘘」

「…うるさいな。お前のように最近生まれた訳じゃ無いんだ。暦も見ないから正月も分からん」

「嘘だよー。だって寒くなるじゃん」

…まあ、確かにそれは言い過ぎた。実際は除夜の鐘で分かっている。

しかし、今年齡を訊かれて答えられないのは事実だ。

…計算すれば分かる。

「言いやがれよ、チエリー？」

「その名で呼ぶな！」

「可愛いじゃーん。チエリ…」

「黙れ!!」

……全く……。

「…帰る」

「は？ 何だよ怒った？」

「違う。時計の在処が分かった以上、ここに居る意味は無い」

「つまんないな、帰っちゃうのか。…ま！俺には優太が居るから良いけど!!」

…見ているだけでげっそりしそっだ…。

「…そっだそっだ、其処で仲良くしている」

「言われなくてもねー」

本当に鬱陶しい友人を尻目に、私はもと来たドアをくぐった。

「また来いよー！」

それも無視した。

答えなくても読まれている気がした。

思い出してしまった。

あの人

私が愛し、敬愛した人。

遠くも近くも思える過去。

それを振り返り、

想う。追悼の意を込めて。

過去に消えたあの人を。

恋愛ドレイン（前書き）

題名通り砂吐きそつです。

何か2人でイチヤイチヤしてます。

恋愛ドレイン

とりあえず帰っては来た。

充電器は買った。電池も買った。

…財布は軽くなった。

と、いうことで、暇になった俺は嵐の後みたいな部屋の片付けをしているのであった。

「…腹減った」

…そう言えばアイツ、『徐々に血液以外からの栄養がとれなくなる』…とか言ってたな。

じゃあ今の俺は普通に食べるって事か？

…おいしくないんだけどな。

真つ二つのテーブルとか粉碎した椅子とかを部屋の隅に集めるわけだが、それが結構重労働。

だつて重いし。

ホウキも無いんだもん。

一番重かった最後のテーブルの左半分を片付け、遂に全てが終わった。

「終わった…けど、」

すっからかんになった部屋を見回す。

「…ホントに何もねーな」

どこから調達してくる気なんだ？

…まさか…このままじゃ無えよな。

「いや、有り得るかも…」

アイツならやりかねない。絶対に。

催促してみるか…。

「腹減った！」

どうしてこんなに遅い！

悠二さん家ってそんなに遠くないぞ。

「早く帰ってこいよバカああ！！」

「何だ、そんなに私が恋しいか」

「ギヤス！！！！」

背後のドアからアイツの声がして、急いで振り返った。

腕組みをして、ドアに凭れる様に佇んでいるのは金髪のアイツ。

「な何でお前はそう神出鬼没なんだよ!!」

声が裏返った。

「神出鬼没に感じるのはお前の尺度で私を計るからだ」

「じゃなくてぐうああう!!」

余りの苛立ちに身悶える。

「じゃあ…!!じゃあ!! お前が俺の尺度に合わせるよ!!俺はお前の丈なんか知らねえ!!」

「生意気な事を言う奴だな。傲慢に私に要求するのか?」

だって…それはそうだよ。

俺にはお前の事なんて何も分からない。

「そつだ、俺腹減ったよ」

ペッコペッコだ。

「…それは当然だろうが。お前は丸2日間絶食状態だからな。むしろ良くここまで保ったものだ」

…ああ、そう言えば家出てから何も食ってねえや。

どうにも、コイツに咬まれてからは時間の経過が分からない。

家にいたのが遠い昔の様に感じる。

短期間に沢山の事があり過ぎた。

でも 振り返ってみるとやっぱり2日位しか経ってないんだろう。

「…と、いう事は」

下心丸出しな顔で、桜助がにやりと笑った。

「私の血が欲しいか」

…不服ながらそういつことだ。

「…そうだよ」

「欲しいのか？」

「っ、そうだよ！！」

何の謂れか恥ずかしくなって叫んだ。

何で何回も訊くんだ！！

「そうか、欲しいか」

至極楽しそうに、最早にここに顔で訊いてくる。

…前言撤回。ここにここじゃなくてニヤニヤ。

「馬鹿！！ な、何で何回も訊くんだよ！！ 欲しいっ言ってんだろが！！！」

何で恥ずかしがる、俺！

「そうか、素直でよい子だな。よしよし」

「あ、あつたま沸いてんじや無えの！？ い、一体何がしたい！」

頭なんか撫でるな！！

「って、っえあっ！」

そのままの勢いで髪を掴まれる。

でもヤツの顔は妙に優しいままで、もう訳が分からない。

「ちょ…！？なんだよ！！何が　っむっ…！！」

急に顔を引き寄せられた。

むっ、

…と、唇に知った事のある感触。

「ふうんっ！？」

驚いて吸った息。鼻からのそれが生暖かくて。

見開いた先の視界がぼやけてるのは……近すぎてピントが合わないから。

吸う息が苦しいのは、新鮮な空気が手に入らないから。

唇があっただかくてぷにぷにしているのは、

……しているのは、……もういっしょ、合わさってる唇が有るから。

「これは

「……あ………？」

…俺から離れた瞬間の、桜助の顔があまりに色っぽくて、

「…、…よっよっ」

…それで、また妙に優しく頭を撫でた。

俺は…思考が凍結しちゃって呆然とするしかない。

…だって…この顔は、可愛い孫を溺愛するおじいちゃんの顔だ。

「わ」

それで、抱き寄せられて、

「召し上がれ」

頭を首筋に押し付けられた。

鼻尖にあるのは白く筋張った首筋。

息が乱れる。

欲しい。
これが欲しい。

堪らず、かぶりついた。

「……く、」

しょっぱくてあつたかい血。

舌が満足感に溺れる。

「は…、うあ
」

喘ぐように、桜助が俺の服にしがみついた。

いへい、

一口飲み下す度に、味わった事の無い幸福感が込み上げてくる。

幸せだと

何でか…そう噛み締めた。

確実に腹に溜まっていく質量。

胃が重たくなる。

何故か気分が良くなる。

感覚的にも精神的にも十分満足した俺は、口に啣えている物を離した。

「、っ…」

途端に垂れてくる鮮血。

それが凄く勿体無いような気がして、俺はそれを舌で嘗め取った。

幾度か繰り返していると、俺の咬んでいたもの 桜助が、不意に俺から離れる。

陶器みたいに白い頬を僅かに上気させ、首筋を押さえて俺の方を見る。

それで、いつも通り 嫌味に笑った。

「お粗末様で。」

…俺は一体どんな顔をしているんだろう。

きつと、とんでもない程のアホ面に違いない。

…だって、余りにも目の前の男が色っぽかったから。

桜助は艶めかしく首を傾けて、甘そうな息をゆっくり吐いて、

「…私は、寝る」

俺の脇を通り抜けて、ベッドに寝転がった。

壁際を向く形で、俺に背を向けて。

……うわぁ、どづしゅ。

今更になって状況に実感持ってきた。

お、俺……コイツとキスしちゃった……。

別に……、別にキスでビビる程、俺だってピュアじゃない……と、思
う。

でも俺、今ドキドキしてる。

……どづしゅ。

何で男とキスして、こんななってる？

……いや、それは俺がコイツに惚れてるからだけ。

どーやら脳だけじゃなくて、脳髓の内の更に中心部まで、完全にイカれたらしい。

だって、好きなんだ。

「…寝たかよ」

「いや。」

俺は桜助の寝ているベットに寄り掛かり、下の床に座った。

恥ずかしすぎて顔なんか見られない。

「…こ、この部屋、俺が片付けたんだ」

「そっか」

「大変だったんだぞ、ホウキも無いし！このすっからかな部屋模様、一体どうするんだよ」

「そっだな」

重いポケットの中身を取り出す。
ベットの上に居る奴に渡そうと、少し手を伸ばした。

「……じ、れ」

ずっと返そうと思っていた物。

今返さないと永遠に返せない気がした。

「部屋にあつて、その…成り行きで持ってた」

重たい、金属の時計。

「それは」

「…オウスケって、お前の事だろ？」

どんな顔をしていたのかは見ていないので分からない。

とにかく、手の平が軽くなった。

「…そうか、持っていたのはお前か」

代わりに、そんな重い声が返ってきて。

「…うん」

「…この名前、見たんだな」

…そりゃあ見たなくとも見えるだろう。

何か見ちゃマズいんだろうか。

「…見たけど」

大きく溜め息をついて、桜助は寝返りを打った。

「あれは別に私が刻んだんじゃないぞ」

「え、違うのか？」

「違う！私はそんな自分を溺愛したような真似はしない」

「……そ、そうか」

「…あれは師匠が書いたんだ」

…師匠？

…えっと、こいつに吸血鬼を伝染うつした奴か。

「どんな奴？あんたの師匠って」

「……それは…凄いなだつたぞ、…色々と」

心無しか声音が違う。

…何だ、変人だつたのか？

「どんなどんな？」

興味をそそられ、振り返る。

「大概奇天烈な人だつたな。…本当に、何とか予測のできない人だつた」

…え、分かんない。

「話せ！」

「はあ？」

思いつ切り嫌そうな顔で見られた。

それで、目が合って、

やっぱり気まずくて恥ずかしくて、急いで逸らした。

「…何だいきなり」

「べ、別に…別に何でもないぞ。別に別に、ホントに別にとんでもなく平常状態。」

「別に…何か在るんだな」

「無えから!!」

…つてか気付けよ。

どんだけ鈍感なんだ、コイツは。

お前の所為だよバーカ。

「…其処まで言うなら追及はしないが」

面倒そうに、桜助が溜め息をついた。

「では今度こそ本当に寝る。何があっても、どんな事があっても絶対に私を邪魔するな」

…そんなに念を押されても。

「…へいへい、解りやしたよ、二度と起こしてあげません！。随分寝てばつかですnee、桜助サーン？」

だつてさつき起きたんだぞ。

どんだけ寝るんだよ。睡眠時間長すぎだろ。

俺そんなに寝たらアタマ痛くなっちゃっただけぞ。

「…あーあ、つまんね」

本当に退屈になってしまった。

俺はベットに寄り掛かったまま、天井を見上げた。

ひび割れたコンクリート。剥き出しにぶら下がった、電気か何かの配線。

俺がヴァンパイアになって、初めて見たのはこの天井だった。

思えば、

俺はあの時から、こいつが好きだったのかも知れない。

初めて触れた。抱くように覆い被さられた時。

この匂いを綺麗だと思った。

麻痺した頭で、心地よいと思った。

初めて見たこいつの笑った顔を、

妖しく、嫌味に笑った。そんな笑顔を、美しいと思った。

…今更じゃんか。

ずっと熱を上げて、浮かされて、

でも、人を、今までの生活を失った恨みが先に立った。

嫌い嫌いを連呼した。…こんな色は、それに塗り潰されてた。

だから、今更になって気付いたんだ。

俺はもう恨んじやいない。

人に戻るって決めたから。なんとか実行してみせるんだ。

…こいつと居るのも、悪い気はしないし。

確かに嫌味な奴だけど、俺が反発ばっかしなければ…まあまあ良
い奴なのかも…とか、…最近思ったり。

「あゝ…じゃなくて…」

………此処にいとつまんねー事ばっか考える

「…どうせなら、わざわざ考えてみるか？つまんねー事」

どうせコイツが起きるまでは暇なんだ。

考えてやるよ。つまんねえ事を。

俺は振り返って、

そこにあつた桜助の寝顔を眺めた。

いつもの厳しさが無い寝顔は、普段よりも幼く見える。

もし夢が覗けるなら、是非とも覗いてみてえモンだな。

…もっと知りたいから。あんたの事。

あなたは何も教えてくれない。

…さつきは少しでも教えてくれて、嬉しかったんだ。

いつ生まれたのか、とか。

どんな人生を送ってきたのか、とか。

…もっと下らない事でも良い。

血液型？好きなもの？好みのファッション？

何でも良いんだ。

両想いなんて言わない。望まない。

ただ側に居られれば。

…人に戻るといふ事は、こいつから離れる事だけだ。

それまでの時間、ここに居ても良いかな。

…俺、もしかしたら無能だから。

ここに居るだけでも。

夢回帰 睡眠（前書き）

最近のぐだぐだ感を変えようと思ひまして、桜助過去編スタートです。

夢回帰 睡眠

拓夜に血を飲まれた。

私などの感染型ヴァンパイアにとって、吸血は生殖行為の様な物。

それでいて食事であり、コミュニケーションでもある。

…兎に角、通常の吸血行動にマイナスの効果は無い。

そして、生物というのは不思議なもので、プラスの行為には快感が伴うように出来ている。

満腹が心地よいように。

愛情に満足するように。

…つまり、私は恥ずかしながら拓夜に飲まれて『そういう』モードになってしまったのである。

それを誤魔化し、自己を抑制するために睡くもないのに寝た振りをしている訳…だったのだが

どうやら私は幾らでも眠れる種類だったらしい。
…数え切れないほど生きている癖に今更である。

それで、夢を見た。

悪夢なのか否か、それは古い古い最古の私。

そして私の知りうる最古の師匠の記憶だった。

夢の中。

それは鮮明で忠実。

私の記憶の中の師匠は、なんにも変わらずに笑って怒って励まして

この長い夢は続く。

飽き飽きするほどに。

『僕』は甘味屋に売られた小姓だった。

小姓だと思っていたのは『僕』だけで、実際普通に考えれば只の下っ端だったのだろう。

頭は固いし、本当に使えない奴だった。その自覚はあった。

だから、恐らく『有効活用』されたのだろう。

ある時主人に犯された。

そんな事が僕には異常に衝撃的で。

心の弱い僕は逃げた。

別に行く宛も頼りも無い。

ただ、独りになれば死んだって良いと思った。

…そんな時、『彼』に逢った。

入り組んだ路地裏。

栄えている大通りから外れた、治安の悪い地域。

何を求める訳でもなかった。

ただ記憶に灼き付いたその悪夢を払拭したくて

前も見られず歩いていたら此処に居ただけ。

何の因果か運命か、そんな事は振り返っている身だから思いつく。

当時はただ、怖くて

金色の髪をした、白い肌の異国の者。

いろいろと弱った精神は些細な刺激に怯えた。

まさか、

彼が『僕』の世界の全てを変えろとは思ってもせずに。

暇潰ルービック(前書き)

…と思ったんですが、それではつまらないと思い直し平行して現在の拓夜です。

いつまで続くかは分かりませんが(笑)。

暇潰ルービック

この野郎、本当に起きやしねえ。

… 暇つつうけど、この暇はそんじょそこらの暇とは比べ物にならない暇だよな。

てか、比べて欲しくない。暇を持て余す俺に失礼だ。

だってケータイは省エネ中だし？

本やマンガなんかこの部屋には有りもしないし。

… せめて教科書でもあれば勉強じゃなくて落書きに勤しむんだけど。

… ん、教科書か。今それで思い出したぞ。

「っと…俺のバッグ」

あのパンパンのバッグ。

なんか忘れたけど色々入ってた筈だ。

そう、具体的には…

「ルービックキューブ！」

何処ぞの青いロボットが無限空間の中から秘密道具を取り出す勢いで、俺はカラフルなオモチャを取り出した。

しかし…何でこんなモンを入れた、俺。

必要か？…いや、絶対に不要ないだろう。

何で荷物削減に引っかけからなかったんだお前。

「…無いよりマシ、…だよな…」

余りの退屈さに、もうルービックキューブに夢中になるしかない。

思い出すのも嫌気が差すぐらいの昔に揃えた3面。

それを一旦崩し、この際だから4面にチャレンジする。

…どうにも無理くさい挑戦に必死になっていた俺は、
踏み鳴らされていく、
無防備に

そんな簡単な筈の足音にも、…気付けずにいた。

忘れていた

桜助が言った『戦争』。

俺の存在についてのあちらの認識。

…こんなオモチャにうつつを抜かす俺は馬鹿だった。

ばん！ と、ドアが開く。

「よう？ たつくんお初だねい」

何の躊躇もなく開け放たれたドアに、

…ちっこい箱に夢中になってた間抜けな俺が驚いた。

「っ！？ な、なん」

「おーすげが寝てるんでしょお？ 起きたらマズいしー、一旦外出なあい？」

まず第一に、

…誰だこの女。

金髪の髪、眠そうな金色の目。

…純血で遺伝性の…ヴァンパイア？

「ってか…不法侵入だつつかの！」

俺の悲痛な叫び。

「ええ？ だつてエ、それって人間の法律でしょう？ あたしにはなあんの関係もないもーん」

うわ、正論かも。

…じゃなくて！

「たつくんで…何で俺の名前…」

「ん？ 簡単簡単。盗み聞きしたから」

うわ…。

もう、何なのコイツ。何その『キラッ』みたいな感じは。

「…っっっ…」

「うげっ！？」

桜助の寝返りに、必然的に俺はビビってしまった。

だつて起こすなつて言われてるし。

これがばれたらヤバそうな気がするし。

…ああ、俺なんも悪い事してないのに…。

「いーのかなあ？ おーすけ起きちゃうけどー」

畜生。…コイツ、分かつて言つてやがる。

歪んだリップグロスの唇が、心中を醸し出す。

「……っつゝ…!」

「まー、じいつくりと迷いなよお？ おーすけ起きちゃつたら色々面倒だけどねえ？」

あたしはあ、すぐ逃げるしい何の問題も無いんだけどー」

いいつつ、マニキュアの塗られた鋭利な爪の様子を見る。

…ちくしょー。

…ああもう!!

行くよ！ 行ってやるよこのメス!!

「望み通りにしてやるよ…。それで良いんだろ？」

「たっくんのその苛立ち百パーのオーラからするとお、だぁいぶキ
してるみたいだねー？」

けらけら笑って、踵を返す。

「まあー、そおんなのはどーだっていいの。たっくん連れ出しセー
コー！ 付いて来なよオ」

俺はその小さい背中について行った。

これが愚行だなんて幼稚園生でも分かる事。

…でも、俺は付いて行った。

付いて行ってしまったのだ。

…大事な事なので二回言いました、これ。

暇潰ルービック（後書き）

それにしてもルービックキューブのルービックって一体何でしょね。

気付いてからは単純に気になってしょうがない…

夢回帰 出逢

「…ん？何だお前」

目の前にいたのは金色の髪をした 西洋から渡来した…らしい人。

…それにしてもあまりに言葉は流暢だった。

でも、『僕』は未知の者が怖くて
怯えて後退した。

「Wait！ 俺は怪しい奴じゃない！」

「っ！？」

肩を掴まれた。

屋敷：及び店での、嫌な記憶、恐怖。…それが、瞬間的に蘇る。

体の震えが止まらない。

夏だと言つにも関わらず、奥歯がかちかち鳴った。

それに 十分怪しいだろう。

外国人と言うだけで怪しさは無条件に添付されるのだ。

「…いや、すまない。まだ言葉に馴れなくてな。…不自然じゃないか？」

「…す…すみま、せ…」

それが精一杯絞り出した最上級に必死な応え。

質問内容なんて理解できなかった。

「……。…何だかよく事情が分からないんだが…。俺って嫌われちゃったみたいなのかな？」

溜息の気配がした。

「Okay. わかった、俺だって不審者にはなりたくない。…
いや、もうなってるか？」

夜に出歩くんじゃないかった。

あわよくば人斬り等に出会って斬り捨てられれば…などと、心の

隅で願ったりしていたのだが。

…最悪だ。

『僕』は鬱に似た自分の心情に、心底嫌になった。

「…それにしても こおんな時間に出歩くなんて随分とお前もf u n k y だな」

茶化すように言われて、少し緊張や恐怖が解けた。

言っている意味はまるきり分からなかったけれど。

「嫌な事でもあったかー？」

「うっ…！？ っそ…それは…」

「really!?! ……もしかして、これって凶星？」

「……………」

…嫌なことしかない。

むしろ、良いことなんか有っただろうか。

…普段から落ち零れの足手纏いの無駄飯食らいで、生きてい
るだけで鬱々とした気分だった毎日。

嫌な事は続くもの。

居場所のない日々、止めを刺したのは今日。

…御主人様に、きつと悪意は無い。

『僕』は怖くて、普段の僕が申し訳なくて、人形のようにされ
るがままだった。

この感情の遣り場が分からない。
誰が悪いのか。誰に当たればいいのか。

誰かに当たっても解消されないのは百も承知。
だから当たりはしない…けれど、心の許容範囲はそろそろはち切
れそう。

「…死にたいです」

「Why?」

何故か何かが可笑しくなってきたりして、笑えてきてしまっ
て、

ふふ、と鼻の奥で笑った。

自分を嘲って。

「もう、私は死にたいです。浮き世は辛く嫌な事ばかりです。…あなたを私を、殺してはくれませんか？」

「Will、I…まさか、こんな子供が」

「おかしいですか。…そうでしょうね。私のおかしな憂鬱を分かってくれる御仁など…きつとないでしょうから」

とつくに確信していた。

『僕は存在することが間違いだ』と。

卑屈で嫌な奴だろう。それでもいい。

美しく有ろうという精神など、とうに擦り切れていた。

「…こんな世界に生きていたくありません。…もう、死んで消えてなくなってしまうたい」

「 Yes that's, light...それは常にこの世の真理だ」

予想外の言葉が返ってきて、思わずはっと見上げてしまった。

真剣な金色の瞳は、綺麗な満月みたいだと思った。

「...いろんな事全部、嫌になったり逃げたくなったりするさ」

知ったような口を利く見ず知らずの外国人に、やたらに腹が立つ。

「俺にはお前に何があったかなんて分からない。...だから俺は頑張れとも、弱音を吐くなとも、ましてや励ますようなことも言えないよ」

「...」

怒りが、一瞬にして浅葱色に冷めた。

「...まあ、俺なんかひとつ言えるのは...今の内って事かな」

「...え？」

「死のうと思つて死ねる。お前はそんなんだろ？ それに何も今死ななくても、後半世紀も経てば何時の間にか逝つてるさ」

「…そ、それは…些か乱暴では」

「ひひひ、俺はそういう奴なんだよ」

と、その男は笑つた。

気楽そうな人だと思つ。

「…この先の五十年に耐えられる気がしません」

明日すら危ういと言つのに。

…怖いのは先の人生じゃなくて、…明日から始まる『僕』の日常。

「ここで逃げちまつたら一生後悔するぜ」

「死んでしまえば先はありません」

ふう、…と男は溜息をついた。

「分かった。…さあ、go！子供は家に帰れ」

この方は話を聞いていたのか。
若干啞然とした。

「とりあえず行ける所まで行ってみる。
…それで、どうしても堪えられなかったらもう一度ここに来い。
お前を違う現実に逃がしてやるから」

「……？」

「ただ、その逃げた先がお前の居る現実よりもマシかどうかは保証
しないぞ？」

俺は違う道を提示するだけだ」

意味の分からない『僕』の背を、男が押した。

「…頑張りすぎるなよ」

「と…！？ わ！」

つんのめる形で転びそうになって、着物越しの手の温かさが肌の中に残って、

振り返ってみても、…もうその暗がりには誰もいなかった。

「
…僕」

夢のように去った時間。

空の月は丁度満月で、

あの人の髪と瞳によく似た色だった。

夢回帰 出逢（後書き）

桜助の師匠って人の喋り方が笑える。（オイ

月光ガール

「さー、鬨^やろーか、たつくん」

明るい月をバックに、それとおんなじカラーリングをした女の発言。

軽い逆光でシルエットが浮いて見える。

ピンと尖った耳なんかも、鮮明に。

「…マジですか」

「あたしがそーんな低級な冗談、言う訳ないじゃあん。つくならもつと上級な嘘付くつてエ」

…心意気だけは認めるけどよ…。

現在、近所の公園に進入中。

市民プールも付いてる公園なんだが、今プールはちょっと寒いん

じゃないかな。…って季節。

入ろうとは思わないけど。

つか闘るって何だよ、…まさかな。只のケンカだろ？

…ケンカだと良いな。

…ケンカであって欲しいです。

「たっくん？」

「うっせえ、たっくんて呼ぶな」

金色の少女が、何が可笑しいのかけらけらと笑う。

「たっくんがたっくんって呼ばれて怒ったア」

「……………」

…何だろつか、凄く疲れる。

もう呼び方なんて何でも良くなってきた。
俺だって識別できる名詞なら何でもいいや。

「もおー！ たつくん たつくん、考え事ダア〜メ。イイからア、あたしとばとるしなさいー」

ぷくりと頬を膨らます。リアルでやる奴初めて見た。

「…そんな緊張感の無い喋り方されたら緊張出来ねえって」

「別に緊張感とかあるし〜。…しっつれいなあ、たつくんは」

どっちがだよ。

「…あ〜も、闘るならやろつぜ。とつとと終わして帰りたい」

「わあお。い〜ねい、乗り気ー。かんげーするよ」

んじゃア、そっちからー。

…と、やはり緊張感の持てない声で言われた。

何だろ、ケンカ？女相手だろ？
手加減した方が良いのかな。

…良く分かんねえや。

「いいよ、お前からやれ」

「あ！そーだ名前忘れてた！」

…なあ、話聞いてるか？

「あたし『リラ』あ。純血のヴァンパイアだよお」

……コイツには…話を合わせた方が疲れないんじゃないかな…。

「…名前は初見だが純血つてのは分かってたぜ」

「あゝ、やっぱりしい？香水付けてもニオイって消せないんだよねー」

「？ …いや、俺は外見で」

「へエ？」

眠そうな半開きの眼が、眠そうなまま見開かれた。

…一応驚いているらしい。

「な、何だよ…」

「たっくん、もしかして超人間？」

意味分かんない。ノーコメント。

「……ふうん」

無害そうだった、金色の瞳。

その眼に突然 凶暴な光が差した。

ぺろっ、とグロスの唇を舐める。その赤い舌。

「それは ……イイかもねエ」

まずい、今動揺した。

この反応は決まりきってる訳で。

「……負けたら俺は餌な訳？」

やな汗。

だってそんなのフェアじゃない。

「うん。遺伝ヴァンパイアの血は飲めるんだあ。……人間に近いなら、それだけオイシイしー」

……同種の血は飲めないのか。
なんだか違いを感じる。

「たつくん倒すだけじゃつまんなかったしいー。……ちょーどいい動機づけができたねー？」

「……ちつとも良かねエよ」

俺は強がりで呟いて、この状況に腹を決めた。

やっぱり、コイツに付いて来た事に激しく後悔しながら。

月光ガール（後書き）

季節設定が連載開始から殆ど動いていないという…。

本当にやっかい。

夢回帰 感染

あれから『僕』は店の方に帰った。

…けれど、相変わらず『僕』は役立たず。

いや、前にも増して身は入らなくなっていた。

あの人の事でいっぱいになってしまって。

気付いたのだ。無理でも可能でも、『僕』はあの人の所へ行きた
いのだと。

どんな世界でも、ココよりはましなんじゃないかと。

…それでも、ズルズルと一週間位は堪えていた。

…でも、いや、それで『僕』は決意し、決意した夜にあの場所に行った。

『……………やっぱり来たんだな』

小さく頷いた。金髪の方は、溜め息のように息を吐く。

『…後悔しないか？』

『しません。…だから此处へ来ました』

彼が頷いて、『僕』の肩に手を掛ける。

首筋に息が掛かり、ぞくりと身震いした。

『分かった。なるべくサポートはしよう。』

期待と、嫌な記憶との現在の照合に 身体が震える。

金髪の外国人は、そんな『僕』の身体を抱き、膝を折って背を合
わせた。

『後には戻れない。分かったな』

『…はい…』

『いただきます』

ズ、と、身体の中に

小さな異物が射し込まれた。

月光バトル

「よし、殺そう」

リラの眼は完全に据わっていた。

…いや、もしかしたらこれが正常の通常なのかも知れない。

現に、間延びした口調は軽減されている。

「…こいつを殺さないと、何にも始まらない」

…怯むな、俺。

大丈夫、大丈夫だから。

無理でも勝てるって信じとけ。

「キースもそう言った。あの男の命令を聞くななんて腹が立つが、
……キースなら別だ」

『あの男』と『キース』は別物らしい。

…ヤバい、手加減する余裕なんか無いかも。

「今は桜助を仲間に入れ、形だけでも従って置かなくてはいけない」

うわああ無理無理、やっぱり怖いよ独り言。

口調全然違うし…。

むしろお前誰だよ！！

…と、心中俺が泣き言を吐いたところで、

ぶつぶつ言っていたリラが、消えた。

「ッ!?!」

いや、違う。

消えたように『移動した』んだ。

咄嗟に周囲を見回す。が、見当たりはしない。

「後ろ」

間延びしない声。

「…うあ がっ…！」

振り返ると同時に、側頭部をフルスイングでぶん殴られた。

その衝撃に軽くぶっ飛ぶ。

…あ、頭碎けたかも。

「…！！！！」

ホームレスのお宅に突っ込んで、鉄パイプやら段ボールやらが弾け飛んだ。

幸いご主人は居ない。どうやらディナーの調達中か何からしい。

「…げほっ」

奇跡的。俺は痛いだけで無事だった。

しよっぱい。口の中切ったらしい。自分の血って何とも思わなくて、鉄臭くてマズイ。

「……………」

青いビニールシートで染まった視界。再起不能なフリして考える。

…思えば勝てるわけ無えんだよなあ、純血だもん。強いつて話だもん。

こつこつキャラって中ボスじゃないの？

冒険初期で出会う奴じゃないよ、絶対に。

…てか、何で怪我してない俺？

アイツが消えたんじゃないって事も分かった。それってつまり目で追えたって事。

あれ、…ちょっとレベルアップしてね？

「あゝ逃げたい」

でも無理。

じゃあ戦わなくちゃ。

月の光で薄く剥ける青に、人の影が映った。

「いつまで寝てる」

青い視界が突然消えた。ビニールシートの向こうから、リラ。

「」

右手。熊手みたいに構えた鋭ったネイルの爪。

それを大きく振り翳し

「ちょ…冗談キツいっしょ…」

手近にあった、お家の残骸。

「！！！」

リラが右手を振り下ろした。同時。

「っらア！！！」

残骸 鉄パイプをぶん投げた。
槍投げみたいに。

「ガフツ！！！」

それは顎下に直撃。

やりすぎた感はないが気遣ってたら俺が殺られる。

その隙に鉄パイプをひっ掴んでその場を離れた。

「あゝ痛エ…くそっ、」

口の中の粘度の高い血唾を吐き出した。

打ち付けた背中が痛い。打撲した？

「…タク、ヤア…」

地を這うような声に、ハッと目を上げた。

その惨事に、思わず目を逸らしたくなる。

顎が砕けたらしい。

俺の口の中の傷なんか比べ物にならない血を流し、それは鼻にも逆流している。

いくらなんでも、やっぱりやりすぎた。

「痛いじゃア…たっくんのいじわる…」

…前言、撤回

その顔で笑いやがった。

「…きよーは、月が出てて良かったよお…」

ネイルの指で赤く染まった顎を掴み、形を整えるように動かす。

「……っ！」

直視するのは、それなりに大変だった。

「じり、じり、と骨の擦れる音。」

と、手を離し、ニットの袖で血を拭った。

かちかちと噛み合わせを確認し、再び唇を舐め上げる。

「一応痛いんだからさーあ？」

「さ、再生した…のか」

「したよお。あたしら純血はー、伝染タイプの脆い亜種とは違うのー。だからこそ、このゆーしゅーな種を絶やしちゃいけないでしょお？」

…やばい。

勝てる気がしない。
さっきから笑いつぱなしの膝。

あのコンビニで、純血に鳩尾キック程度じゃ大して効かないってのは学習した。

だから手加減なんか無用だと、殺す気で攻撃したのに。

瞬間回復って…。
しかもあんだだけ重傷でもしちまうのかよ。

「一体どんな身体してんだ…」

「人間とはまるっきり違う身体！。そもそもオ、進化の系列が違うしい。」

…その辺の基準ずらしとかないとさあ」

次の瞬間には、

目の前にリラの顔があった。

「アッサリ殺られちゃうよ？」

「…」

俺が反応するよりも早く、リラが鳩尾に膝を蹴り込んだ。

学習したのか、飛ばすような事はしない。

「うゝあ…ッッ!」

「あんまり出血させたくないなあ。飲む分が減るからさっ!」

あくまで、無邪気に。

「あー、でもあ、たっくんの死骸連れてった方が良いかなア？
だったら生殺しにしないとー」
だ

二発目。

ひゅん、と、風を切る音がして、
刹那、内蔵を抉られるように。

「お…あ、ッ!」

嘔吐感と緋い交ぜになった鈍痛。

やばいつて。

「…たっくん人間に近いからー、手加減しないと死んじゃうよねエ」?

様子を窺う様に耳元で言語が囁かれた。

「…あ……………」

なんていうか、死にそうってよりかは痛すぎて苦しすぎる。

死にはしないだろう。

だけど、吐きそうだし苦しいし、暫く復活出来そうにない。

どうしようか。

逆転しないと死んじゃうだろ。

右手が辛うじて引っ掛けている鉄パイプ。

ここはRPGの世界じゃない。鉄パイプつついたら人なんか簡単に殺せるそれこそちゃんとした凶器だ。

…ああもう、だから自信持てって。

頑張れってば俺。俺なら出来るって。無理とか言ってるなって。

もう、アレだ。どうせどうにも成らないなら足掻いてみようか。

疼くような、内臓に直接響くような苦くて渋い痛み。

それを圧してパイプを握る。

痛みも苦痛も全部乗せて、殴れ。

「おオっと何のつもりかなあ？」

「おうあー!!」

…あ、やっぱり無理。

吐いた方が絶対に楽になれるんだが、生憎血液ってのは液体で消化が早いらしい。

既に胃袋の中には何も残っちゃいない。

吐きたくても吐けない。

「……！！」

リラが無言で、俺を蹴り飛ばした。

「あ……！！」

またぶっ飛んで、中が空洞で半球の、ホールみたいなのに突っ込んだ。

ちゃっちいプラスチックが砕け、その中でぐったり力尽きる。

「……………あ……………」

パラパラと落ちるプラスチックの破片が、ひどくゆっくり落ちた。

スローモーションみたいに。

…何だよ、無理に決まってんじゃないよ。

このままなぶり殺し？

何て不幸に塗れた人生だ。

……いや。

…いやいや、待て。

待て、待て俺。

諦めるな。

今出来ることを尽くせよ。

そしたら死ねるぜ？成仏できるぜ？

考える。何にだって弱点は有るんだ。

ライオンは木に登れない。フクロウは眼球を動かさない。スズメ
バチは色彩が見えない。

同様にヴァンパイアにだって弱点は有る筈だ。

太陽光は却下。今は真夜中だから。

銀…なんて持ってないし。

清水は…それがなんだかすらよく分からんよ。
杭とかは ああ、ありませんね。まず心臓に撃ち込むなんて無理
っぽいし。

後は…何か無かったっけ…。

ああ駄目だ。思考を止めるな。脳を休ませるな。

…だけど、眠くなる。

白くかすみ掛けた視界のスクリーンに、一瞬、あの金色の瞳が映
った。

「…ッ!」

猫のような三日月の瞳孔。

夜にはまん丸くなる。あの、金色^{きん}の眼。

…あれ、何だ…何か思い出しそう。

気持ち悪い、喉の奥でひっ掛かっている知識。

あ、そうだ。

目の前でドームが破裂し、粉碎した。
粉塵の中に、爛々と光る金色の眼。

「もう死んだア？ たつくーん？」

「…それが」

そうだよ、猫の目だ。

暗いところからいきなり明るいところに出ると、目が眩んで開けられなくなる。

人間の瞳孔は精々大きさが変わる程度。
でも猫は、線から丸へ、激しく収縮、拡張する。
昼間の瞳孔が線のヴァンパイアも同じだ。

…だから、

きつと瞬間的な光にも弱い筈だ！

「誰が死ぬかああ！！！」

ライト機能。
ケータイの。

側面にあるボタンの長押し。開く必要もない。

「！！！！！」

「っのやる！！！」

リラが光に怯んだ。

思いつ切り、鉄パイプでリラを突く。
パイプは捨て、直ぐに脇を抜けて離脱した。

「……っ！」

「ああ う…！！ クソッ！ 拓夜！！ なんっ」

どうやら効いたらしい。顔を覆い、その場にうずくまる。

…しかし、鉄パイプでの刺突の方は微塵も効いていない。先行きが不安すぎる。

とりま俺はもう一本、先の曲がった鉄パイプを拝借して、がたがたの身体に湯を入れた。

「ぐ…う…、あああ…！！」

「っ…！！？」

やばい、復活した。

どうしようか。どう戦う？

俺だって満身創痍だぜ？

「るな…ざけるな ふざけるな …！！」

うわあああ、怖いよう。
大層怒っていらっしやるリラさんは、恐ろしい形相でこちらに駆け出して参りました。

「汚れた亜種の分際で!!」

「っツ!?!」

ああ、もう。

だから無理だって言ったんだ。

こんな化物に勝てる訳無かったんだ。

「!?! 拓夜サン!?!」

ほら、居るはずの無い声まで聞こえて…、え？

「どゅっらああア!!!!!!」

「っ
「!!!!」

目の前の金髪が、吹き飛んだ。
それも見事に、プールの方へ。

濁音と共にフェンスに激突し、どしゃりと落ちる。

…それよりも、俺の視線は蹴った本人へ。

「…小梅さん？」

「拓夜サン！ 何で純血なんかと戦って!？」

ピンクのゴスロリをひらめかせ、小梅さんが其処に立っていた。

白髪とピンクゴスって言うのはスゴく似合う。

「いや…その 色々」

「相手が悪過ぎよ！ 勝てる訳無いじゃない！」

…分かってるけど。

「分が悪い。ここは逃げましょう」

「な…!!ダメだそんなの!!」

「分かってないわね。勝ち目があるとも思っているの!？」

「…っ…!」

プール近くの草むらがガサガサと動いた。

「しづとい…怪物…」

小梅さんの赤い瞳が忌々しげに歪む。

踵のないペタンコな靴が、そこに向かって歩み始めた。

「拓夜サン、先に退散してて頂戴？」

「そ…っ、そんなには訳いかねえよ！」

「これは俺が起こした問題だ！ 小梅さんには」

小梅さんが、強気にニツと笑った。

…が、その白い頬からは一筋の冷や汗が伝っている。

「…平成男子にしては良い根性じゃないのさ。」

…でも任せておきなさい。オバサンのお節介は聞いておくものです
よ」

と綺麗なお姉さんは歩いてゆく。

俺は迷っていた。

ここはヴァンパイアとしても先輩の小梅さんの言う事を聞いておいた方が良くないのか。

俺は、また誰かに助けられて逃げるのか。

「早く行きなさい!!」

俺は、唇を噛み締めた。鋭くなった犬歯が唇を貫く。塩辛い味の味がした。

またフラフラと起き上がるリラ。

小梅さんが走り、それを殴り飛ばした。プールの塀が碎ける。

瓦礫と共にリラが水面に叩きつけられた。

「アタイの為に早く!!」

クソッ!!

また俺は逃げるのか!!

「ごめん小梅さん!! 絶対に帰って下さいね!!」

「まだアタイに死亡フラグは立ってないわ!!」

俺はその場を逃げ去った。

背中では時折、激しい戦闘の音がする。

俺は無力を噛み締め、ひとまずその場を去ることに尽力した。

夢回帰 名前

最初は、一体何が変わったのか分からなかった。

ただ、空腹の対象が信じられない物に変わって。

金髪の人が、唇を舐めた。

『さて、…残念ながら、お前が払った代償は人間という種だった訳だが』

『あの…西洋の人、』

『…西洋の人は勘弁だな。俺はクリステイって名前なんだが』

『く、くり…?』

『christy』

『くりすてぃー様?』

『……いや、もう良いや。好きに呼んでくれよ』

『僕』は少し考え込んだようで、その後顔を上げた。

『…分かりました。師匠様と呼ばせていただいても…構いませんか？』

『…し…？ 何だって？』

『師匠様。その道を極め、教え導く人の事です』

かなり分かり易い説明をしたつもりなのだが、その人は難しげな顔で頭を掻いた。

『master…って事なのかな…』

『僕』は首を傾げた。

彼の言語はたまに分からない。

『…で、あの、師匠様』

『ん？ 何だ、訊きたいことがあるなら答えてやるぞ』

『ぼ … いや、私は、一体何が変わったのでしょうか』

『いや、僕で良いよ。この国は面白いよな。一人称が幾つもある』

また言っていることが分からなくなった。そんなのは当たり前じゃないか、と。

『祖国では一人称は状況によって変わる程度で、人によって…とかは無かったんだ。』

I、M Y、M e、W e…』

…不思議な言語だ。難しそうで、『僕』では覚えられそうにない。

『…ああすまない。続けてくれ』

『…で 僕は一体何が変わったのか分からないんです。』

…ただ、僕の頭はおかしいのかも知れない と』

師匠様の召し物の襟から覗く肌が、どうにも魅惑的で。

性的な意味ではなく、…なぜだか本能的に、欲しくなる。
…噛み付いてそれで

『っ ……！ ……僕は、おかしくなってしまったのですか？』

『…いや、正常だよ』

頭を抑えた『僕』の手を、師匠様が首筋へ導いた。

其処は、先程師匠様が噛み付いた その牙のあつた場所。

ひとさし指となか指が伝える、僅かな…凹凸。

『さつき俺がお前の血を飲んだ。それで、お前にヴァンパイアを伝染したんだ』

…そうだったんだ。

そんなおぞましい行為を簡単に。

…しかし、何故か『僕』はその行為に抵抗が無かった。

『ば、ばんばいあ…って、それも外国語でしょうか』

『vampire…血液を食料、糧として生きる種族だ。人間とは大分違うかも知れない』

『…吸血鬼…』

「ん？」

「…血を吸う鬼、吸血鬼。…あなたは、鬼…なのですか」

「鬼、か…。人外の化け物、恐ろしいモンスターの事をこの国ではそう呼ぶな…」

訊いてはならないことを訊いたのかと予想してしまつて。

「僕」はそろそろと顔色を窺つた。

「うん そうだな。ヴァンパイア＝吸血鬼！ 良い訳じゃないか」

「え」

「そうだとも。俺は吸血鬼。化け物で、人外だ」

本当に分からない人だ。

…だけど、何だろう。

胃の中に針の刺さる様な疲れや苛立ちが、この人相手だと起こらない。

「…ん、何だよ。お前の嬉しそうな顔なんか初めて見たぞ」

『 いいえ。』

……あなたに会えて良かったと……思いまして……』

師匠様が驚いた顔をして、その顔は微笑みに変わっていった。

『 案外かわいい奴だな。お前は』

不名誉なご褒美から身をよじって逃れ、師と仰ぐ彼を睨んでみる。

『 僕は男です！！ 男たるもの勇ましくあらねばなりません』

『 ん、じゃあ漢の君。名前を教えてください』

『 桜助です』

『 意味を教えてください？』

それは、渋々。

『 ……桜助のオウ、桜とは、薄紅色の花のことです。春になると空』

を覆い、川の水面を花卉が流れます。
綺麗な花ですよ』

『…じゃあオースケってお花の名前？』

『…いえ、スケは助けるという字です。』

…間。

『…やっぱりかわいいじゃないか！！　ぶすつとしてるのは恥ずかしがり屋さんだからかぁ！？』

『どつしてそうなるんですか！！　からかわないで下さいよ！…！』

じゃれついてくる師匠様をかわして、後はひたすら逃げ惑う。

『じゃ、last質問！　サクラの花って、cherry tree
e eで間違い無い？』

『僕は捕まって息苦しい腕の中で叫ぶ。』

『し、知りません!』

『ま、多分品種は違って間違いは無いよな。じゃ、お前チエリ
ーって呼ぶから』

『…は、はあ!?!』

『かわいいじゃないか。チエリー。オースケって呼びにくいんだよ』

『そ、…そんな…!』

『良いだろ、お前だって呼んでるんだぜ? シシヨーサマって』

『それは違うでしょう!! 言語は理解出来ませんが何だか違う気が
がします!』

『へーき。一緒一緒。多分一緒だって。ね、チエリー。
これから長いんだ。仲良くしような』

『……どうして』

基本的な全てを諦めて、『僕』は深く溜息をついた。

その呆れの中に、実感を伴う嬉しさ 幸福感。

そんなモノを小さく噛み締めて。

その腕の体温に、一人で舞い上がって。

夢回帰 名前（後書き）

僕の苦手教科Ⅱ 英語。

待受ツイントーク

俺は走った。

走った。走った。

口も喉も目もカラカラになった。でも走った。

…逃げている訳じゃない。俺は、助けを呼びに行くだけだ。

そんな風な言い訳を 自分自身に言い聞かせて。

桜助を起こすなんて考えはハナから無くて、呼びに行ったのは悠二さんだった。

纏れる脚で階段を駆け上がり、乱れた息で必死に叫んだ。

「 っ悠二さんッ! 」

本気で呆けた顔で悠二さんが振り向く。

「…はい？ …あ、何よ拓夜じゃん。 ってうわ！！ 何だよそのキズー！！」

「ヤバいです悠二さんー！！どうしよう！ 小梅さんが 俺の所為でー！！」

とうとう完全に足が纏れて、それに逆らう力も無くて、…俺はズルズルとへたり込んだ。

「…おい！」

「れの所為で…ああ…どうしよう…悠二さん ！！」

「落ち着け、拓夜。ちゃんと説明してくれないと分からないだろ」

俺は悠二さんの言う事もやっと理解して、おずおずと頷いた。

「…いま…今…小梅さんが戦ってるんです…。…俺を、…逃がすために」

「誰とだ。小梅は誰と戦ってる」

そうなんだ。それがいけないんだ。

どうしよう。逃げ出した俺はどうすればいい？

「小梅さん、は……。小梅さんは、…純血の、ヴァンパイアと…。
…リラ…リラっていう…!」

「!」

「やっぱり俺行かなくちゃ!」

立とうとした俺の肩を、悠二さんが抑え付けた。

「悠二さ…!」

「お前は待ってる。小梅は必ず無事で来る」

何を言われても、多分俺は首を振ったと思う。

「拓夜!」

「って…だって」

「信じてやれ」

信じる?

誰を?何のことを?

俺は、…だって、だって

「優太、拓夜と一緒に居てやれ」

「…え、悠二さん まさか!？」

「ちよちよいつく様子見てくるだけだよ」

そんな、

「……本当に、行っちゃうんですね？」

「小梅は友達だからな。妬くなよ優太。優太が一番だよ」

優太が少し笑う。

「当たり前ですよ。早く帰ってきて下さいね？」

悠二さんが困ったように笑って、開きっぱなしのドアの向こうに消えた。

俺は、

…俺はまた、何も出来ない

待っているだけ。見ているだけ。
行動を起こせず、起こしても役立たず。

結局俺は無力なまま。

「…拓夜さん？」

「…ごめん、優太…。悠二さんを危険な目に遭わせちゃって」

「大丈夫ですよ。悠二さんだって、小梅さんって人だって、僕らみたいに簡単に死んじゃったりはしないだろうし…」

「…俺は、力には成れないのかな…」

俺が人間に近いから？

…だとしたら、俺は早くヴァンパイアになってしまいたい。

自分勝手だけど、小梅さんや悠二さんみたいに 桜助が危険に晒されたときに、こんな無力じゃないように。

「…僕は、ここで待って少しでも癒しになればら　って、思っこと
にしていますよ」

つい、優太を見やってしまった。

優太は愛らしく笑う。

「僕も思いました。戦争が始まるって聞いた時に。

…僕は力になれない。僕はどうしたら良い？…って、ね」

俺より小さい身体に、きっと俺より深い年月を詰め込んでるんだ
と思った。

「それで、僕には悠二さんを癒すことしか出来ないって…気付いた
んです。

だからずっと待ってて…帰ってきたら、少しでも悠二さんと楽し
く幸せに過ごさなきゃ」

割り切って考えた、その答えが優太はコレだったのだろう。

…俺には出来ない。じっと待っているだけなんて。

「それに、信じてますから」

また、信じるなんて

「信じるって、…何を？」

「戦いに行く人達、みんなを。そしてみんなの帰還を。です」

信じる…。

小梅さんを、信じる。

悠二さんを、信じる。

信じて、待つ。

「戦争が起きたら、優太も戦うのか？」

「もう起きてるんですよ。…ただ、表面化していないだけで」

その一角が、俺が襲われたこと…か。

「僕は…わかりません。もし、悠二さんが死んでしまったら…僕は生きている意味なんか無い…」

悠二さん…

そう、優太は呟いた。

信じると言いながらも、心配が滲み出ている声で。

その時、

ドアが開いた。

夢回帰 淡々

師匠との生活は楽しかった。

血液を飲むという行為には抵抗が有ったが、どうしてもか直ぐに慣れてしまった。

『唐突ですが師匠様、その喋り方は変ですよ』

『：Why? : 変って何が』

『それです！ その外国語が変です』

『：え、そうなの? : : じゃあ直そうかな』

『それは妙案ですね。是非』

月日は自分を残して過ぎていった。

顔見知りの人間も、元の主人だった男も。

何時の間にか老い、何時の間にか消え去ってゆく。

『師匠様ー、長髪の放置はだらしがないですよ? 纏めたら如何でしょう?』

『んー、そうかな? : : ああ、チェリーは一つ縛りだもんな』

『僕が結びますから、少し屈んでください』

『チェリーは小さいからなー』

『放つといてください!』

吸血鬼には二種類あって、師匠はそのふたつの混血なんだそうだ。

『チエリー? ちょっと色薄くなった?』

『…?、いや、分かりませんけど』

『ちよつと赤毛になったよ。かんわいー! 似合うよ』

『ああああ…そんな露骨に愛でないでください…』

その頃、桜助という少年は、小梅という少女に出会った。

『なあに? アンタもばんばいあなの?』

『そう。お前もそうなのか』

『そーよ。…もとは遊郭に居ただけだね、師匠に拾って貰ってね。

…アンタは?』

『…私は甘味屋で働いていた。名は桜す』

『チエリー! 悪い悪い置いてきぼりにしちまって!! …ってあれ、彼女はガールフレンドかい?』

『違いますから! それと他人の前で僕をその名で呼ぶのは』

『あれまあ、随分甘ったれなんだねエ。『僕』だって』

『ああ…違くて、…はあ…』

二種のヴァンパイアは元来仲が悪く、大昔から争いを繰り返してきた。

戦期は人間間の戦争と被ったようだった。

それに、私も参加した。
…何より、私の意志で。

「戦…ですか」

「ああ。…悪い、止められなかった」

「…其れにしても何故戦などを」

「ん〜。よく解らんが昔っからだよ。ま、互いに邪魔なのさ」

「…それは大規模になりそうですか」

「多分な。…大丈夫だ。ストップ掛けられなかった責任は果たすよ。

俺、ちゃんと戦うから」

「…無論。師匠様が戦うなら僕も」

その時から居たのはロスヴィータという女。そして彼女が慕っていた男。

現在のあの少年は知らない。恐らく、新人か何かだろう。

当時の奴らも、シンボルマークに薔薇の刺青を彫っていた。

「クリステイ、私達を裏切ったのね。…そんな外道な種族に味方を
する為に」

「ふん。所詮愛には何者も勝てないって事さ。オーケイ？」

「I don't , no!」

…当然、全力を尽くした。

だが、師匠は戦いの最中 … 帰らぬ人となってしまった。

ギリギリ、勝ちました。だが、私は少しも嬉しくなんか無かった。

私は沈んだ。

あの人の居ない勝利になど、意味がなかった。

何年、そうして居ただろうか。

どうでも良い世界で、どうでも良い様に自墮落に生きていた。

人間の戦争も何時の間にか終結していた。

『なー、あんたオレらとは違うよな？ 何てエの？』

『五月蠅い糞餓鬼。気安く話しかけるな』

『わりーなー。オレ偉いと偉くないとか良くわかんねーの。しん
いりだから』

『 …… 』

『なあ、何でお前金髪なんだよ。… アメリカ兵 とか ？』

『お前とは違う種のヴァンパイアだ』

『の割にこっちに居るよな？ オレ祐二ってんだけどオマエは
『黙れ』』

その後。国の中がある程度安定してきた頃。

感染ヴァンパイアの中で、師匠を馬鹿にした奴が居た。

だから、殺した。

そうしたら、当然の事ながら、私は彼等の『敵』になった。

攻撃だつてされた。

『…注意だけはしておく。死にたくないなら素直に帰れ』

『誰が、帰るかよ…。ここにいる奴らに、そんな脅しが通用すると思つてんのか…』

『一応言つたからな』

『!?!? な止め!?!?』

私は孤独になった。

何度か討伐隊を返り討ちにしたら、面倒事は来なくなった。

…祐二もとい悠二だけは、しつこく『友人』を続けていたが。

『私に構うなと何度いったら解るんだ』

『多分一生わかんねーからいい加減諦めろって、一体何回言ったら分かるんだよ』

『……分かった。諦める』

『いいい。勝った。』

何時の間にか悠二もでかくなり、何時の間にか年号が昭和から平成に変わっていた。

…そして、私は

拓夜に出会った。

落着アフター（前書き）

薄いGL的内容が含まれています。

でも含有量はごく微細なものです。安心してお召し上がり頂けます（笑）。

落着アフター

「わああああ！ はわわわわっ！？ あてっ！！」

「「は………？」」

耳鳴りがするくらいの緊張感を突き破った、とてつもなく間の抜けた声。

突進してきたそいつは、爪先で独楽コマみたいに反転し、べしゃりと倒れた。

「……いたい………」

黒髪をツインテールにした、ゴシックな服を着た幼女。

…本物の、ゴシックローリータ。

…じゃなくて。

いや、何で？

呆気にとられ、啞然とした俺と優太。

と、ついさっき開いたドアの向こうから、

「もう、駄目な子ね。気を付けなさい？リト」

声。

その声は、あまりにも俺の想像した調子とはかけ離れていて、

「リト、」

だって、どうして

こんなにも飄々と、こんなにも颯爽と

まるで何事もなかったかのように

「小梅さん……！」

俺の前に現れるんだ

「…あらま、拓夜サン？ どうしたの、そんな顔して」

「はれねえ？ 知り合いですかあ？ プラムさあん」

ドアを通して見る小梅さんには、何だか現実味を持ってなくて、

それより何より、小梅さんのゴスロリはボロボロな上に血塗れ
で、

なのにこの人は何ともないようで、

俺の頭じゃ付いていけない。

「小梅さん、小梅さん！！」

色々感極まって駆け寄ると、ちっちゃい方のゴスロリが通せんぼ
をした。

「だめ、だめです！ 小梅さ じゃなくて、プラムさんはリトとラ
ブラブなんです！！」

「…あゝ、リト。あんたはあんたで愛してるから、ここは感動の再
会を許して頂戴よ？」

「いやですっ！ だいたいいい！！ なんですかプラムさん！！
リトのことは放ったらかしにして、うわきしてたんですか！？」

普段、余裕綽々との表現がぴったりな小梅さんが、珍しく困った
ような顔をした。

と

「はは、愛されてるじゃないかよ小梅」

「ひよえあつ！？ ちょ、降ろしてください！！ せくはらで訴
えますよー！！」

これまた何でもないように、幼女は担ぎ上げられた。

片腕に口りを抱え、ドアに寄り掛かっていたのは

「悠二さん」

「おう優太。…待ったか？」

「…いいえ。全然？」

出て行ったときと何ら変わらない、悠二さん。

通せんぼのロリが居なくなって、早速小梅さんが口を開いた。

「アタイが帰ってきたのがそんなに意外かい？」

軽く片肩をすくめ、余裕気に赤い瞳で笑う。

…格好いい。

「…違、そんな…だって無事で帰ってくるなんて」

「だから言ったじゃないのさー。アタイに任せなさいーって」

自慢気に小梅さんが胸を張った。

…ただ、さあ…。

…その胸のあたりは布が破けて、いやぁん、あはぁん、セクシィ
ー！！…な、状態になってまして…。

目の遣り場に困る所存でございます。

「…でー…小梅さん、何でそんな格好なの」

「うん？ 何でしょうか、一回怪我したからかな？」

それは血塗れだから何となく分かってましたが。

…ん？

「あれ、それなのに今は無傷じゃないですか」

「それはリトが助けに来てくれたからね」

…??? ???

え、何で？
分かんねえ。

悠二さんの腕でぐったりしなびていたロリが、急速に水気を取り戻した。

「そうですよね！… やっぱりプラムさんはリトがヒツヨウなんですよね！…」

「そうよー、必要よーリト」

「えへへへ…」

分かりきった棒読みの台詞に、幼女は照れて笑う。

「ま、リトを呼びに行ったのは俺なんだけどな」

「ちょ…つ悠二さん！？ ソレさえ言わなければリトの手柄だったのにい！…」

「あー、大丈夫よリト。ちゃんと分かってるから」

「そ…っ、そうですよね！… プラムさんですもの！分かってくれますよね！…」

「まあ、色々な角度でね」

…なんだこの会話。

それに、冷静になると結構異様ってかシュールな光景だぞ。

血塗れの女と幼女抱えた男が平然と喋ってる絵面って。しかも幼女は大した抵抗もしないし。」

…ああ、何か真面目に考えるのがバカバカしくなってきた。

「てえゆうーか悠二さん！！ そろそろ放してくださいよ！！
まだリトにおっぱいはありませんよ！！」

「ああ、俺両刀だけど幼女の胸とか興味ないから」

「リトも悠二さんのゴツゴツしたカラダにはキョウミありません。
プラムさんが良いです、むっちむちです！
チェンジしてくださいチェンジ！」

「チェンジ不可。だってお前捕まえてないと邪魔すんだもん。邪魔
しないってちゃんと約束したら放してやるよ」

「……。…邪魔シマセン、コノイノチ掛ケテ誓イマス」

「はい、交渉決裂」

…この二人、案外仲が良いのかも。

「…え、どうしてコイツが助けると小梅さんが無傷？」

「ん〜、そうね。」

ヴァンパイアの唾液には止血作用があつて、血液を摂取すると怪我が回復するから、かな？」

…あ〜、なんか成る程。

…おっと？

…ていうことは、あのロリにキズを舐めて貰ったって事？

うわぁ………ヒロっ

「ちょっと待ちなさい！その目付きの悪い子供！！」

「…え？あ、俺？」

…っつか子供に子供って言われたんだけど。

「コイツどう見ても小学生なんだけど。」

「今っ！今アナタ不埒な事考えたでしょうっ！！」

「ぐはっ！？」

「な…っなぜバレル！」

「な…ち、違うし！！ 別にR指定な映像なんか見てねエし！！！」

「アナタ！ 今すぐにそこに直りなさい！！」

「良い度胸ですねプラムさんとリトの18禁妄想をするなんて！！！」

「だってしょうがねえだろ！！」

「考えちゃっただろさっきの描写からすると！！！」

「大丈夫だ拓夜。その映像、真実だから」

「更に駄目じゃねエかよ！！」

「何だよ、この性格破綻者の集まりは。」

…もしかして、わりかしマトモな方なんじゃないかな。アイツ。

「さーて。…悠二い？もうリトの事解放しても良いわよー」

「あいさー。合点しよーち」

幼女を抱えていた手が離され、ソイツは床に落っこちる。

「うぎゃあー！！」

「任務完了であります」

「ん、ご苦労」

「…よし。優太あーっ！！」

「悠二さん、お帰りなさい。悠二さんのお陰で小梅さんが助かったんですよね。…この子呼びに行ってたんですか？」

「そーだよ。俺が単品で行ったって強いっこねエもん。戦いの方は小梅を信じといて直行してきた」

「うわぁん！！ プラムさぁぁぁん！！」

「ああ、よしよし。ごめんね無視して」

「そうですよぉー！ ヒドいですっ！リトが居たからプラムさん助

「かつたのにー」

小梅さんに抱き付き上目遣いに訴えていた幼女が、じっとりと悠二さんを睨め付けた。

「リトが居たから」

「あつれー、聞こえないなあ」

カップルが二組。

…俺、邪魔かな…。

少し帰りたい衝動に駆られてきた。

一件落着いたし、俺はそろそろおいとましようかな。

「…でも、アイツを倒した訳じゃない。」

「へ？」

完全に帰るモードになっていた俺は、思いつきもしなかった言葉

に間拔けた声を上げた。

「アタイじゃあアイツに勝てないわ。アイツは帰った。アタイに用は無いからね」

小梅さんが、芯のある声で言う。

こういう時、この人は本当に格好良い。

「またアンタを狙ってくるでしょう。気を付けなさい」

…そっか。

また狙ってくるなら、俺もそれなりに応戦出来るように成らなくちや。

「…ありがとう、小梅さん。悠二さんも」

「俺はちよっぴり走っただけだよ」

「気を付けて帰って下さいね。せめて、桜助さんに会うまでは」

アイツに頼るのは何か嫌だが。

「それよりリト!! リトに感謝してくださいよ!!」

…俺この子供知らないし。

「リトは御頭李兔みがしらです! プラムさんのコイビトですよ!! 覚えておきなさいです!」

「…お、おー。俺は藤堂拓夜だ…けど、えっと」

「桜助の恋人?」

「ちつ違いますよ!!」

好きっちゃあ好きだけどまだそんなんじゃない… って予定があるわけでもないけど!

「ま、リトは拓夜のセンパイですから、じゃんじゃん頼りにすればいいですよ」

…ウゼエ。

「ただ何だろう、ちょっとコイツ可愛いぞ。」

「ああ。せいぜい頑張れリト」

「なんで上から目線っ!？」

目を剥く少女は放置して、俺は踵を返した。

「…じゃあ、お世話になりました」

「おう、桜助と仲良くなー」

「リトはセンパイなんですからね! 拓夜さんアナタ分かって
!」

少女は無視して、ドアが閉まった。

そろそろあいつも起きてるかなー、なんて考えながら、俺は薄暗い空の下、帰路を急ぐのだった。

夢回帰 鬱々

一度、太陽が見えない曇った昼間に出掛けたことがある。

なんて事はない。

大した理由もない。

只の退屈と、ちょっとした興味本位。

確か、それは新築されたデパートと言う店だったか。

…行っただけは良いが、退屈だった。

並べられた衣服は他国の物の様だし、陳列された食品にも何の興味もない。

人混みはただ不愉快なだけで、その上私はどうやら目立つよう

…そして、追い討ちを掛けるように消え去った曇天。

私は苛立ったまま、展望室の出入り口で夜を待っていた。

そう、確かその時だ。

べちよっ、という音とともに、膝が冷たくなった。

『…』

『あ……………』

足元で途方に暮れていた、幼児。

手には逆円錐形のモノの上に白い半固体が乗った何か。

そしてそれは私の膝にべっとりと接して いや、既に浸透しながら寄り掛かっている。

『…何をする餓鬼』

不運しか重ならない日に、本当に私は苛立っていた。

『…あ…わ、わわわ …。 んんん…んんん…』

終いには泣き出す始末で。

良いから早くコレをどうにかしろよ、とか。

そして、言い知れぬ怒りに良く似た苛立ちとか。

もう何でも良いからコイツを喰い殺して仕舞おうか とか。

…それは八つ当たりに近い殺意だったのかも知れない。

『 …… 』

口の中で小さく舌打ちをした、その時、

『 迷子のご案内です。白のTシャツにカーキの半ズボンの、藤堂拓夜くん 』

女の声、アナウンス。

目下で泣いているこのガキも、白服に暗い緑のズボン。きつとこの色をカーキと呼んでいるのだろう。

『 …… お母さんがお捜しです。お見かけの方は、一階、サービスカウンターまで 』

…お見かけの方は、きつと私で。

『 ……トウドウタクヤ……か 』

『 ……ふえ？ ……あれ……？ おじさん何でおれの名前してんの…… 』

…なんて最悪な日だ。
しらばっくれて立ち去ってしまおうか。

『ち…、…立派な名字など名乗りおつて…』

『なあ、おじさん。…アイスどうしよう…』

『は？』

アイスはこの忌々しい白い半液体状の物の事か。

『…知るか。自分の頭で考える。…というか、それより先に、私に何か言うことがあるんじゃないのか』

『…あ、そっか…。うんと…冷たくない？』

…違う、其処じゃない。

『馬鹿者。まず先に謝るべきだろう』

『あ、そうだよな。ゴメン』

…思い切り、頭を抱えた私だった。

『…もういい。』

早くサービスカウンターとやらに行け。母が心配しているらしいぞ』

『行きたいけどさ、おれ迷っちゃったんだよね』

確かに迷子だな。

『…分かった。黙ってついて来い。私も分からんがお前よりはましだ』

『わー、ありがとうー。』

…あ、ちょ、待って。おれオシッコしたい』

『……………早く行け』

面倒な奴に出逢ってしまったと、当時の私は憂鬱になるのだった。

夢回帰 鬱々（後書き）

短くなってしまいました…。

ごめんなさい。中間テストが終わったら頑張ります。

シラナイトコロノ、サクセンカイギ

「……クソッ!!」

バキリ、と、

鈍く音が響いた。

少女が腹立たし気に爪を噛んでいた。

マニキュアで着色、コーティングされた硬質の爪が、鈍い音で噛み砕かれた音。

「リラ、機嫌が悪そうだけど……。ふふ、当たり前だね」

そう笑う少年。

リラという少女が怒鳴った。

「クソっ！！ あの女…下等生物の分際で調子こキやがって……っ
！！」

殴打した壁が、粉々に打ち抜かれる。

「キースもリラも、本当に使えないわ」

赤いドレスの女が、溜め息混じりに言った。

表情にも声音にも、感情の色は見当たらない。

切り落とされた膝上のスカートで、足を組み直した。

「所詮同じ穴の貉でしょう。互いに罵り合っているのが似合いますよ」

「黙れ！！」

リラが叫ぶ。

ジャケットの胸倉を掴み、女を壁に押し付けた。

彼女の後頭部が壁を強打し、鈍い音を奏でる。

それでも、女の表情は変わらない。

それがリラを余計に苛立たせた。

「じゃあお前はどうかロスヴィータ。一度も出向いた事が無い癖に」

「私は前の戦いに参加しているもの。あなた達なんかよりもよっぽど使えたわ」

「……っ」

リラが小さく舌を打つ。それを知ってか否か、ロスは更に彼女を嘲った。

「普段被っている仮面はいつたい何処になくしたのかしら。腹を立てると猫被りも出来なくなるの」

「っこの年増」

少女が声を張り上げた、

時、

「やめなさい、リラ。言葉が過ぎますよ。美しくない」

その声は優雅に微笑した。

「ロスヴィータも悪い。彼女を挑発するのだから」

二人の女は渋々、互いに距離を取り離れた。

ロスが眼を伏せ、膝を附く。長い睫毛が影を落とした。

「申し訳御座いません」

リラも、ゆっくりと重く頭を下げた。

「美しいね。自信の非を認め服従する様は実に美しい」

しかし、と覆し。

声が呆困ったような溜息を洩らす。

「彼等もせめてそのくらい美しければ。

いや、でもそれは無理な話。現実、彼等は醜い。

私は、美しくないものは嫌いですから。

……やはり滅ぼしてしましましょう。我等が再び咲く為にも
ね

リラとキースは妖艶に笑い、ロスも揃って服従と同意を示した。

「……しかし、困りものですね。タクヤと言う少年。無駄に運がいい

のでしょうか。

目障りな上に癩に障る存在だ。

消えて貰いたいのが、それはもう諦めた方が良いのかな。執拗に固着するのは見苦しい」

声の主は、再び溜息。

「…仕方ない。彼とクリステイの愚属は諦めましょう。他の戦力な
どたかが知れたもの。」

クリステイ、彼の愚属とて、私が勝てぬ筈もない。
我々は今暫く、彼等の出方を窺うとしましょうか、」

その案には、みな異議も無く賛成したようだった。

彼等の左胸には、真紅の薔薇が美しく刻まれていた。

こんな事は、誰も知らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1175/>

P oisoNin g

2010年11月14日14時49分発行